

平原は獨體の散亂すること、現在石を以て被はる、如くならんと彼は云つた。」

これは悉く文字通りに適中した。一八九八年九月二日の大戦争さへも正しくエル・メルガニの豫言した場所で行はれた。而して特別通信員は其の平原が長上衣を著したる死骸で眞白であつたと傳へた。

ヘブライの豫言者は多くの豫言者中最大最良なるものであつた。

靈魂不滅の證據は、故らに其の證據を見まいとせぬ人々には、夥しく存する、白衣を着し鐵鎖を響かせて現はる所謂幽靈は荒唐無稽であるが、其の眞理を知らうと望んだ人々は、常に其を見出した。紀元前一千年頃の印度のある豫言者は「天の歌」の中に人間の生死に就て次の如く記した。

永へに靈には生なく死なく變化なし、死は靈に觸る、ことなし、其の家は死したる如く見ゆるとも。

二

男女は進化の方便たる文明の上に各、別個の義務あること

六、「地に満盈よ之を服従せよ」

不滅の靈魂を完全ならしむるを以て其の進化の目的となせる人類は神の明智によつて二つに分たれて居る。「之を男と女に創造たまふ」たのである。地を満たし服従する人類の仕事に就て男女は確乎たる協同作業を營んで居る。

第三章で勢力に就て述べたることを想起せよ。諸君が見得るあらゆる物はみな、其の原子及び細胞の運動に一定の形式を取らしめる勢力に依つて造られたものである。自然界に於ては動植物に就ての勢力の指導は無意識に行はれる。其に反して人類には勢力を指導して、意識的に其の目的を達する力が具はつて居る。又男女には各、其の爲すべき仕事に對する特殊の力が具はつて居る。

人類は身體を暖め、食物を調理し、金屬を溶解せんが爲めに火を使用する。人類は水流を利用し、耕耘し、播種し、收穫し、動物を馴致してそれらの仕事を爲さしめる、即ち馬には乗り、手には耕耘を、駱駝と驢馬には貨物を運搬せしめる。ついで人類は風を利用して海上に船を走らせ、穀物を碾き、機械を運轉せしめ、更に下つては自然の七大勢力——重力、熱、化合力、電氣、磁氣、運動及び光——を相互に轉換し得ることを發見する。



瀑布の勢力を用ひて磁氣を起し、更に電氣を生ぜしめ、其に依つて列車を運轉し、機械を廻轉し、都市に電燈を供給する。爆薬を用ひて山を穿ち、地を壊して石炭鐵金等を探掘する。最初から人類の仕事は自然力の指導——地の服従であつた。人類は道路を通じ、水流に架橋し、河川を掘鑿して運河とする。人類は船舶と都市を建造し、海洋を航行し、鑛山と石切場を開發し、灼熱せる金屬を鍛鍊し、鑄造所、製作所、紡績及び機械工場、印刷工場、發電機、及び軍器を造る。人類は陸海軍を備へ、攻防の學術を究める。人類は通貨、爲替手形、信用取引、銀行制度、及び其に携はる者が遵守すべき制度と規則によつて定まる商業及び企業上の總ての複雑なる機關を發明する。人類は言語を分類して文法を、外界の事實を分類して諸の科學を編む。有爲の男子は皆この偉大なる仕事に幾分携はつて居る。男子は勞役の主宰者で、其の結果を見て以て樂しむものである。即ち野獸の筋肉的勢力と自然の物理的勢力とは、人類の意志を實現する爲めに應用せられる。此等の意志の善惡は一に彼の靈の質に依つて定まる。

此等の文明の外形を造るには、女子は之に關與しない。併しこれのみでは文明は生じない——文明の生ずると生ぜざるとは、此等を使用する手際に依つて定まるのである。親切、

勤勉、作法のよく行はれ居る貧しき家は、此等の見出されぬ最も富める家よりも文明が進んで居る。眞の文明は、男女が正直で、忠實で、公正で、廉恥を重んじ、聰明で、各己れの義務をよく盡す所に存在する。予は男女協同すれば見事に生ずべき文明が、男或は女のみにては、決して生ずべからざること示したい。

### 七、婦人の仕事及び感化

予は婦人の仕事に就て詳説する意志はないが、二三の大なる卓出せる事實を指摘したいと思ふ。其によつて文明に對して婦人の負擔する半分が、男子の半分よりも遙かに重要なことを、若き讀者に示すことが出来ると思ふ。

(a) 國民全體の生活は其の國民中の個人の生活よりも偉大にして、且つ遙かに重要なものである。

(b) 三十年毎に新しき世代の人間が成熟し、新たに國民となる。

各世代の人間が其の祖先より傳襲せる事物を以て行ふことは、彼等の生活と思想の様式——其の家庭、彼等が價値ありと考ふる事物の種類、自己の勢力を傾注する目的——即ち奢侈と誇示、個人的放縱、少數者に對する野心に勢力を傾けるが、或は健康と多數者



に對する幸福の爲めにするかと云ふ如きことに依つて定るのである。

- (c) 如何なる家庭も其を創め其を指導する婦人がなければ成立せぬ。
- (d) 婦人は國民の収入の五分の三を消費する。婦人は家庭を造り、而して家族全部の慰安のみならず其の將來は、第一に女の能力、分別、善良なる趣味に依つて定まる。
- (e) 故に婦人は眞に最初から、而して最も單純に最も明白に、生死、健羸、盛衰等を輔翼する力を指導する。男子を勞役の主宰者とすれば、女は生活の主宰者と云ふべきである。

家庭にあつては、婦人は専制である——婦人の意志が家庭の律である。婦人の意志であつて、出來心でないことは注意を要する。婦人は健康の維持に必要缺くべからざる一切のこと、即ち如何なる食物が必要で、其を如何に調理すべきか、家族の健康を維持し、室内の溫暖を保ち、通風排水を佳良ならしむるには如何なる設備をなすべきか、如何なる物が奢侈で、如何なる物が必需品なるか、如何にせば小兒が壯健となるべきか、何が故に小兒の身體と性格が弱くなるか、婦人たるものは此等を通り辨へ置く必要がある。金錢を稼ぐは男の義務であるが(廣き意味に於ては常に然り)、之を實際に處理するは婦人の義務である。

ある。

右は自然が命じたる協同作業中婦人の勤むべき第一の義務である。此等は如何なる少女も將來之を實行するが爲めに、何より先きに下稽古をして置かなければならぬ。ある特殊の能力によつて、世界の利益を謀り、或は家族の生活費を稼ぐは男子の任務、金錢を巧に使い、衣食住、教育、娛樂、及び一家の、又引いては國民全體の現在及び將來の幸福に係ある社交的目的に其の収入を任意に配分するは女の任務である。即ち(更に一般的に云へば)男はある特殊の事柄に熱達するを要し、女は賢明なることを要する。

この中には一家を治むべき實際的能力より遙かに優れたものが含まれて居る。實際的能力のみにて己れの義務が終れりと考へる婦人あらば、殆んど未だ生活を始めぬと同然である。婦人は本來家庭に於ける専制君主であるが、婦人の無限權は感化に依つて維持せらるべきもので、決して力に依つて維持せらるべきでない。其の感化を婦人は創造し且つ維持しなければならぬ。姉妹、愛人、妻、及び母の感化は、世界に於て最も強力のもので、善惡に拘らず非常に大な結果を生ずる。眞に尊敬を受くる價値ある婦人ならば、彼女を知れる男子は、彼女が人生の其の目的を理解し居るを悟るに相違ない。少女は男兒よりも一層



多く斯る智識を備へて居なければならぬ。婦人は男子の如く金銭を稼ぐ必要はなかるべき筈、又多くの場合其の必要はない。併し金銭が如何にして得らる、かを知り、正しき所得と不正の所得、有益の消費と無益の消費とを識別するは最も大切である。

女が近代語、科擧、或は史學等の試験に及第して免狀を握るなどと云ふことは何の必要もないが、此等の知識に含まれて居るに相違なき原則を辨ふるは極めて必要である。外國語の知識も、單に海外に遊んだ時に商人や婢僕と談話するのみならば、大した利益もないが、其に依つて其の文學上に表現せられたる他國民の思想を解すれば、到る處平和と好意を生ぜしむる力となり、外國人をして自國を尊敬するの念を起さしむるであらう。

化學或は物理學の免狀も殆んど何等の價值もない。併し科學的の吟味に親しむこと及び精密に數學的に推理し、自然の法則の働きを理解し、あらゆる自然界の事實を其の原則によつて自ら説明し得ることは無上の價值がある。婦人が若し全く同型でないとしても兎に角完全なる女たらんとせば、男子の辨へるべきことは悉く辨へ置かねばならぬ。男兒はあつて特別な方面に自己の知識を適用する——専門的になる必要があるからである。婦人は専門家の仕事を理解し、評價し、使用し、眞理と謬著、意見と證據とを識別する必要がある。

現在ではこれを爲し得る者が極めて少ない、其の結果として山師や詐僞が盛に跋扈するのである。

單に英國史上の事實の年代を知るのみならば、何の役にも立たぬが、其によつて、粗野なるサクソン人の生活から、ノルマン人の文化に至るまで發達した段階をしかと會得すれば、人類進化の裏面に隠れたる原則を了解し、人類進歩の何たるかを知り、又個人及び個人を通じて國民全體に影響を及ぼす其の善惡の道理を辨へるやうになるであらう。

これが歴史の意義であり又價值である。想像力は歴史を明かにし且つ有用ならしめる能力であつて、婦人は特に想像を働かせるに適する。「われ保持せん」信仰の擁護「神と王」等の書を繙かれよ。著者マージョリ・ボーエンは其の中にある男——小國民の首長——の精神を描出した。彼は不撓の勇氣を以て人民を鼓舞し、身方に十倍する敵を挫き、我が英國王がルイ十四世の臣下たりし頃に、彼の人民を歐洲自由の保障たらしめた。或は「劍の裁判」を讀まれよ。モード・ダイバは其の書の中に、無能と利己と盲目のために一軍の虐殺を惹起した顛末を記して居る。「ヘラットの防禦者」も良書である。これは英人の名譽なる無名の英雄エルドレッド・ポチンガの武勇談である。右の中孰れを繙くも、史上のローマン



スと女らしき同情によつて個人的性格を看破するを見る、個人的性格を看破すれば、其の者を偉大ならしめ、或は失敗せしめる個人的原因を究めることが出来る。

八、婦人の同情

婦人が他人に感化を及ぼす主要なる手段を限定する必要あらば、予は其は同情であると云ふ。我等は理解力なくとも愛を施すことは出来るが、理解力なくしては同情は出来ぬ。この事は一見些細なることの如く思はれるが、實はさうでない。予はこの書を題寄した婦人の語を以て其を最もよく説明し得る。彼女は其の意味を辨へ、充分理解して居た。彼女はラフカチオ・ハーンの「日本の心」殊に次の條に註解を加へた。

「同情は理解によつて制限せられる。我等は理解すると同じ程度に同情することが出来る。人は彼がある日本人或はある支那人に對して同情するのであると想像するかも知れぬ。併し同情は普通の情緒生活の最も單純な形相以外の小範圍のみに對して眞實であり得る。我等には彼の因習も経験もないからである。」

彼女は曰く、

自分は今東洋の情趣が那邊に存するが、解る。其は全く個人主義の行はれざることである。我等にとつては個人主義を斥けることが不可能であり、東洋人には其が不快の情を起さしめるのは何故であ

らうか。人が己れの生活を過去及び將來の生活の長き連鎖の一環と考へ、彼の宗教が單に過去に對する尊敬のみならず、感謝をも教ふるならば、又彼の爲すこと及び口にするもの總てを、既に世に亡き人々が見て居ると信するならば、これは確かに他に比類なき人を抑制し高潔ならしめる感化である。而してこれが日本に於ける「通俗的宗教」なのである。日本人は衣類を取上げ、恭しく其を疊む。何故であるか。彼は絹の價値或は刺繡の美しさに感ずる爲めではなくして、其を造るに費された人間の思想と熱練と努力——彼の語を用ふれば「貧婦の努力」を恭しく考へるからである。しかも彼女は世に亡き人である。其の衣服は彼女の思想、彼女の熱練、彼女の努力の表象である。故に彼にとつて神聖なのである。宗教が人々をして日常普通の物品に就て斯くの如く感ぜしめる程に國民生活に透徹して居るならば、其は活ける力である。此處には防水隔室はない！ 労働者は木材或は石材を己れの祖先の眼、又來世には己れのものとなるべき「より賢き他の眼」に見て貰ふ爲めに細工する。乞食に至るまで、我等が「新年御目度う」と云ふが如くに、「來世は幸福な境涯に生れ給ふやう」と云ふのである。人々は己れを大なる過去とより大なる未來との間の連鎖であると思つて居る。現在も斯くの如く過去も斯くの如かりしを思へば、將來も亦斯くあるべしと想像するに何の不都合があらう。この連鎖の意識に比肩すべき如何なる力を個人主義は有するか。我等は思想と生活の様式を形作る通俗的宗教を有するか。勿論自分は種々の主義を奉ずる人々が多分答へるであらうと思ふことを知る。自分は又これ及びこれ以上のものが基督心の中にあつたことを知る。併しながら自分は又過去と他人の仕事に對する斯る尊敬心が、高雅なる人々にとつて唯一の可能なるものであると云ふことを知る。自分に感銘を



與へるものは、これが日本に於ける衆庶の感情だと云ふことである。しかも我等は『異教徒』を改宗せしめんとて、彼等に宣教師を派遣して、彼等の宗教は『偽の宗教』である『木石の神』であると云ふ。

右は彼女が理解し且つ通曉せることを男子に感ぜしめるが故に、男子を指導することの出来る婦人の試みたる註釋である。彼女は己れの見地を變更しなかつた。恰も其の時他のものを採用することが出来たからである。連鎖の環であると云ふ意識が亞細亞人にとつて最も強烈なる刺戟であつて、個人的人格の力は歐人の目的なることを、彼女は最も明瞭に理解した。彼女には青踏者流乃至は女教師臭き所は毫も無い。予は彼女が英國及び外國の社交界に於て、高名と情趣との爲めに、男子から持囃されるを見た。予は兒童等が彼女の周圍に群り、彼女に寄り添ひ、彼女の言葉に酔うて居るのを見た。予は彼女が客室の遊戯以外に何等の深遠なる思想を抱いて居らぬ如く、若き男女と笑ひ興じて居るのを見た。予は彼女が未亡人なる母を扶養し、悲嘆と病氣と闘ひ、強き男子を試練するが如き困難に面し、其を切抜けるを見た。彼女は「通曉せる婦人」であつて、男子が與へ得る最良のものを支配するが故に人を指導する。彼女の模範は少女諸君に同情の眞の意義と、又其の同情が小兒に對するものにせよ、成人或は國民全體に對するものにせよ、愛情及び憐愍と如何に

相違があるかを示すであらう。其は愛情によつて動かされる理解力である。其によつて單に他人の意見——往々にして不完全に表現せられたる——を解釋し得るのみならず、己れの意見をも釣合と遠近を整へて見ることが出来る。他人の意見に就て眞の概念を有せざる限り、其に依つて己れの意見を判斷する標準を持つことは出来ぬ——己れの意見は我等の全地平線を充し、非常に重要な價値あるもの、如く思はれる。

總ての人が東洋的の同情心を抱く必要は毫もない。併しながら印度の將來は英國人が東洋風の同情——頑迷に對する同情さへも——寄せるか寄せざるかによつて決する。同情は決して不正に對する嚴正なる手段を排斥するものでなく、又多數者の幸福を少數者の感情の犠牲たらしむる如き弱點を包含するものでもない。

愛蘭問題、印度問題、あらゆる種類の國際問題は、正義を死守すべき確乎たる決心、及び罪惡中最も尤もらしきもの即ち「善を行はんが爲めの惡事」に對する嚴しき抑壓と共に、正確なる事實に同情を寄せて理解しなければ解決することは出来ない。斯る同情力は男子よりも婦人にとつて遙に自然である。生來同情心を有する男子は極めて少ない、男子は經驗によつて其を得ることは出来るが、——競争場裡にあつて餘りに獨立獨歩しなければな



らぬ、又男子の仕事は餘りに優美を缺く。男子は一般的法則と自然の道理に正しく關係して居る。自然を支配するには先づ力を要する。併し婦人は生活の主宰者である。少女が人形の守をするはその本能の萌芽である。婦人が醫術、教育、看護婦等の職業に従ふのも同じ理由に依る。

あらゆる文明國にて婦人が特別の地位——暴力と無作法を加ふべからざる地位を占むるは、全くこの爲めである。而してこの特權には、彼女の行爲が溫和、合理、秩序、優美、及び慇懃——開化に導く精神力——によつて支配されると云ふ義務が附隨する。癡癖、憤怒、執拗、及び強暴は、世界に於ける婦人の感化を全く失はしめる。しかする時は婦人は正に「劣等なる男」となり、男子よりも力弱く、男子よりも條理が立たず、生活を指導する力を失ひ、しかも自然を指導する力を缺く。

此等は、輪廓と本質に就て、文明國に於る男女の夫々の職分である。故に正しい思考は人道に向ふ進化の道程である。單に正しい意見のみならず、人生のあらゆる義務——肉體的工作も精神的仕事も——男子の仕事にも女子の仕事にも應用せられる正しき思考が人道に向ふ進化の道程である。而して兩性相互の關係に於ける程この思考の必要なるものはない。

### 九、兩性の根本的差違

さて予は多くの少女と同じく好奇心に富むと思ふ少女諸君に、男女間の眞に變すべからざる差違に就て、少しく述べん。

男性と女性とは相關的なもので、一方は活潑で自由に勢力を伸張し、他方は溫和で勢力を貯藏する。これは自然界を通じて變すべからざる生理的事實である。其は意見ではなくして科學的事實である。人類には例外が無い。男子を強壯ならしめる野外の仕事或は烈しき肉體的工作を若し婦人が行へば、疲勞し、美を損じ、早く老ゆる。これは婦人が平素野外で勞働する國に常見する所である。故に少女が如何程身體を鍛鍊しても、少年と同様の體力を養ふことは出来ぬ。——若し左様なことをすれば、彼女の進化の線路から脱線するのである。勿論少女たりとも頑丈に、活潑に、強壯になれぬことはない、併し成年に達した後には烈しい運動をするのは心得違ひで、其の結果必ず健康を損ふ。

而して人類は肉體よりも寧ろ本質的に靈魂であるから、男子と婦人の心には根本的に差違がある。男子は自身を特殊の仕事に適せしむべき心を有する。男子の心は女子の其より



も一層論理的であつて、一層直覺的でない。機關や鎔鑪爐を取扱ふに氣轉の必要は全くないからである。男子が充分男らしければ、彼は肉體的に強壯で活潑になる。男子が愚人でない以上、彼は諸の事物を現在の状態にした原因に興味を持つ。臆病でない限りは、程よき危険を愛好し、軽浮でない限り、正義、殊に支配者から發する個人的正義でなく、自然の法則から發する正義を愛好する。男子は一般の法則を、其が個人を壓迫する時には、餘り頓着せぬ程高く評價する傾向がある——男子の傾向は事物を全體として見るにある。男子は往々にして「杜を見ても個々の樹を見ない。」例外は重きをなさぬ。男子は全國を、其が皇帝によつて支配せられやうが、法王によつて支配せられやうが、社會主義の委員によつて支配されやうが、一定の方案によつて一の組織に歸する。男子は教會及び國家組織、「自由、平等、友愛」、社會主義、專制政治等を建設し、或は其に歸依する。教會史及び國家史上の壓制は、この男子の心に淵源する。總ての文明國に於て、法律編纂に就ての一同の協力に基く憲法發布の原因たる獨裁政治に反對する理由も右と同じである。

其に反して婦人の心は、男子に比して一層論理的でなく、一層直覺的である。生活を指導するものは直覺ではない。論理は直覺が認識する者に對する理由を見出すに過ぎぬ。婦

人は常に曲ぐべからざる律を個人の必要に適應せしめ、例外を造る。婦人は生來の專制君主である。婦人は個人的正義を受け且つ之を分つことを好む。婦人は制限なく例外を承認し、一般的の律を蹂躪することさへする。婦人は往々「個々の樹は見ても、杜全體を見ぬ」とがある。寛容を示し、手段を人格に適應せしめるには、全く婦人の性質から出るのである。主婦の意志は一家の律である。己れの意志を正しき、愛すべき同情あるものたらしめるは、主婦の職分である。強壯なる男子が皆、己れの愛する婦人の快き強制に服するからとて、婦人の支配が專制的だと云ふ事實に變りはない。「斯の如く我欲し斯の如く我命す、予の意志は道理に代りて立つ」とは、男子の普通の經驗である。しかも我等は己れの愛する婦人を、彼女の望み通りにして喜ばせんとする。婦人から優者と見られんが爲めに、同輩に先んじて或る位置を得るやう、婦人によつて送り出さる、男子は幸なるかな。

婦人の政治上の意見に就ても同様のことを見る——ある婦人は一家を治める如くに天下を治める——爲さるべき筈のことは、主婦が爲さねばならぬと考へるもので、歴史が教へ、或は事實が證明することではない。議會の投票が國民一般にとつて好ましきことか否かは、論證し得べき命題であつて、其を根據として理性ある人々は差當り反對黨に與するかも知



れぬ。併し婦人参政権運動者は多数の選挙民の主義——多数の婦人の主義をさへ變じやうとはせぬ。彼等は婦人の投票に依つてのみ救済することの出来る眞の弊害を指摘しない。彼等は選挙民が其を望むか否かに拘らず壓制的法律に其を制定せよと壓制的政府當局者に望むのである。彼等は辯辭を弄して其に理窟を附し、有限なる「恐怖」に依つて公衆を威嚇し、投票を強請するは、恰も小兒が泣いて玩具をせがむが如くである。予は諸君に向つて婦人選挙権に賛成の論證をする譯でもなく、反對する譯でもない。併し義務よりも權利に就て聞くことが多いのは事實である。選挙権を獲得することの正常のみを宣言して、投票に附隨する職務に就ては何等云ふ所がないので、多数の人々、特に多数の婦人は、彼等が個人的根據の下に要請し、窓を破り教會を焼いて強請する要求に、耳を傾くるを好まぬ有様である。

要するに自然は婦人を壓制家に造つたのである。併し其の壓制は賢明にして無私でなければならぬ、しかすれば愛人も良人も小兒も其に對して反くことはあるまい。諸君の思ひ通りに未熟の腕前を試みられよ。併し如何程己れの配下が多くとも其の配下の完全なる獻身がなければ、名譽にはならぬことを記憶せられよ。諸君の王笏は感化であつて議論でな

い、議論は相方に一致する公理の上に建設せらるべきものなるに、事實は建設せられないので、殆んど常に相手を信服せしむる能はざるを記憶しなければならない。この條件は男子が之を遵奉するは稀で、殆んど常に婦人が遵奉する。

詭辯を弄すれば議論は何時でも出来る、而して婦人の理窟は、若し其を用ふる婦人が賢明ならば甚だ善きものである。併し多くの婦人の陥り易き如く、直覺には訓練も注意も必要なしと誤解してはならぬ。悍婦と口喧しき女は快辯によつて己れの思ふが儘に爲さうとするが、一般に失敗する。若し成功すれば、其は相手に倦怠と嫌惡の情を起さしめるが爲めである。媚婦は諂媚により又甲と乙とを争はしめて、己れの思ふが儘になさうとするが、結局看破される。賢婦人はたゞ明智に依つてのみ支配し又支配し得るものである、而して明智は、無限小の者を通して、個々の者を通して、働きを及ぼし、遂に多数の者を變形せしめる神の力と同類のものである。國民の賢明なる民主主義と、家庭に於ける賢明なる壓制とは、人間進化の眞の道程であつて、何者も其の律を覆すことは出来ぬ。經典に明智の代名詞に女性を用ひたのは空虚なる文飾ではない、一般の少女の愚かさを見ると如何にも皮肉に聞えるけれども。



其の人種の將來は、男女の提携によつて定まる。正しき思考は其の提携の基礎である。少年少女は其を各自獨特の方法で求めるであらう。思考は意匠を作る、而して正しき思考は正しき意匠を作る。人間の造るあらゆるもの——時計、船舶、繪畫、法律、家庭、政府——は皆初めは觀念として、即ち思想として存在する。而して若し總ての事實中最大なる者——神及び神と靈魂との關係——を度外視するならば、正しい思考はあり得ない、又若し此等の者が拒絶、誤まれる推論、或は迷信のために、戲謔せられ或は非認せられる場合にも、矢張正しい思考はあり得ないのである。

三

進化及び退化の方法

一〇、進歩と墮落

進歩には三大原因がある——理解力、自發活動、及び自制これである。此等は、神の賜物なる明智の指導により、又其の指導を貴重なる友として迎へるが爲めに、生ずるものである。

墮落には三大原因がある、怠惰、愚鈍、及び放縱これである。少年も少女も「怠る」と云ふことが如何なる結果を生み出すものであるか、經驗に乏しい悲しさには充分に心得て居る者がない。又經驗の代りをする義務の意識を有するものも極めて稀である。彼等は清潔を怠り（少くも少年は然り）、勞苦を怠り、利害を怠り、義務を怠り、最後に尊敬、權能、地位、愛情、及び人生を生き甲斐あるものたらしめる一切のものを怠つて、以て成功したりと心得る。

愚鈍が一の不幸なることは極めて稀で、殆んど常に過失である。眞の愚鈍は理解することの不可能ではない、これは早晚失はれるものであるが、實は理解するを厭ふので、この方は年をとるに従つて一層悪くなる。つまり己れの見たくなき者に對して、心の戸を閉すので、心智的醜惡の特殊の且つ恥づべき一形式である。其の原因は能力を缺けるが爲めではなく、興味を缺き或は偏見に固執して居るが爲めである。予の二十年來の經驗によれば、ある少年は勿論語學、數學、科學、手工、音樂、其他のものに特殊の能力と才とを有して居るが、大多數の健全なる少年は何者かに就て卓越することが出来、若し充分意を注ぐならば、自由高等教育の總ての原則を確實に把握することが出来るものである。予は十三歳



の外見愚鈍なる少年が、祕密の目的の爲めに、眞に己れの課業を理解したいと思つた結果、立派な學生になつた例を知つて居る。

放縱は愚鈍よりも一層普通なる不運の原因になる。肉慾の放縱は、最初は些細なことで、習慣によつて鐵の如き堅固なる鎖となり、はては靈魂を征服し、遂には肉體が其の怠慢全部と共に精神に取つて換り、其の人自身になる。靈魂は萎縮し衰弱し、死に臨んで漸く覺醒する。放縱には種々の種類があつて、飲食物等に關するもの、劣情に關するもの、虚榮、衣服、或は頑固に關するものがある。秀でたる者になつて世間の人氣を集めたいと云ふ渴望の盛なる少女、又は反抗的の熱望が一種の病氣になつた少女が不幸にして近來甚だ多い。

若し世の少年少女が、怠惰、愚鈍、放縱、この三原因から生ずる不幸に就て全體の眞理を辨へなば、様々の警告を馬耳東風と聞き流すことは決してあるまい。不幸にして年々人類の脈管に注入せられる恐るべき害毒に就て、人は己れの知れる所の十分の一も云はぬものである。併し予は此等の三原因が人類と云ふ高等生物の自然の進化に反對する如き作用を營む手段の三個の信憑すべき實例を示さん。

怠惰——一九一四年六月十六日のタイムス紙にはある僧侶の手紙を掲げられたが、この僧侶は、懶惰の結果として、差支あつて日曜日の勤行を勤め兼ねる牧師の代理を勤めて口を糊する乞食坊主に落ぶれたのである。確かに伶俐なる人の手になると思はるゝこの書簡の字句の中より學窓にて幾多の機會を徒費したる悲しき事情を讀み給へかし。

タイムス紙の記者へ

閣下——貴殿が六月十日のタイムス紙上に掲げられた木賃宿常連の一人として、小生はかの記事は充分真相を穿つたものでないと思ひます。……露骨に申上げれば、彼處に住んで居る人々に就て何等の知識も御持ちがない。其の爲めに斯る設備が設けられ、又其に特有の意義と色彩と生活とを與へる男女のことは全く看過されて居ります。

貴殿は巡查と共に巡廻されたとありましたが、社會のどん底に居る我々程巡查の御厄介にならぬ者は英國中探したつてありません。我々の活力の少ないこと、云つたらまるでお話にならないのです。我々をして今日あらしめたものは全くこれなんです。我々は罪人でも悪黨でもありません……我々は氣は良いものです、好意ある無能力者です。我々は自分の運命を別に憤慨もしません。そうなるに定つて居るとチャンと心得て居ますから。

先夜ブラツクフライア街の小生が氣に入りの家の共同臺所である老年の同窓生と會合しました。彼はロイズ・ハウスに、小生はスクール・ハウスに居りました。我々は別の大學に居つたのです。我々は



懷舊談に時の移るを忘れましたが、何故、如何にして木賃宿まで落ぶれたかと云ふことはてんで尋ねませんでした。彼は其を厭はしいと思つたのでせう。彼は自分の天才を肆にして、水のまに／＼流れて行くのが好きでした。彼は小生が國立教會の代理僧になつた事情を尋ねませんでした、従つて解らなかつたのです。……事物をありの儘に解釋するのが我々の仲間の特色なんです。職人も職工も兵士も僧侶も手代もこの點に就ては皆同じです——奮闘もしなければ、不平も云ひません。二三日前の晩エンバンクメントで交際つた連中も矢張そうなんです。我々にとつては世の中の報酬なんでものは、以下の外のことなのです。そして時期が來れば、何も云はずにサツサとあの世へおさらばを極めるのです。

今度又我々を御訪問下さるなら、獨りて御出で下さい。ブラツクフライア街の四片宿へいらつしやい。小生は僧禪はつけて居りません、其は一ヤニがものなる日曜日用の一枚看板なんですから、此頃は其も減多に用がないのですが、併し喜んでお目にかゝりますよ。ブラツクフライア街へ行く途中印刷所にて投函致します。草々 何某。

これは純然たる怠惰と其の結末の物語である。此等の例を數多く調査した人の云ふ所によると、活力が無いのは、つまり活力を徒費するのだ、年少氣鋭の時代に健全なる努力をしなかつた酬いで、活力が無駄に消費せられたのだといふことである。

愚鈍——次の話は予が親しく見たので、其の詳細に互つて保證の出来るものである。

某は位地高い官吏の子息であつた。彼は確に怠惰ではなく、活潑で元氣のよい青年であつた。併しながら極端な愚鈍で、其の爲めに、在學中には事物には眼を、警告には耳を、罰には心を閉したのであつた。彼は面白く可笑しく月日を送りたかつた。其の自然の結果として、怠け者や馬鹿者や無能力者を排除するための關門として設けてある如何なる試験にも合格することが出来なかつた。父親は印度鐵道の倉庫副管理人の位置を請求した。其の請は許された、而して二三年の間屬官として熱心に誠實に勤務すれば、本官に昇進せしめると云ふ内約があつた。六ヶ月間彼は外面はよく働いたが、内心は他人の有するものを彼から剝脱した運命と悪い廻合せに對して憤懣の情に耐へなかつた。事物に顔を向けぬと云ふ昔の愚かしさが又始つた。彼は義務を怠つて遊びに耽り、健康と財布が其の負擔に耐へぬ程酒を飲み出した。彼の計算書には彼が帳尻を胡麻化して居ると思はれるやうな節があつた。強意見が加へられた。再び暫くは眞面目になつた。やがて彼は一少女と結婚したが、彼女は彼を愛し、彼を憐れみ、而して彼を救はうとした。彼は妻に向つて己れを魔道から救ひ出し、眞人間たらしめるやうに哀願した。長官は其の結婚には不同意であつたが、この夫妻をある小停車場に轉せしめて、能ふ限りの好機會を與へた。この停車場には歐人



の在勤する者僅かに三四人に過ぎず、本部詰の時は異なり、酒肉の誘惑などは少しもなかつた。故に平靜な質素なる生活に身を落付けるは容易であつた。暫くの間は萬事好都合に運んだ。やがて彼は其の生活の單調に耐へられなくなつた。彼は刺戟にあくがれて再び酒を飲み出した。酒を飲めば負債が生ずるか、彼が保管する官金を費消するか、孰れにしても破滅の元であると思見を加へられた。彼は表面改心を誓つたが、祕密に飲酒に耽つて居た。彼は臆面もなく友人の家に立寄つては酒をせびつた。憐れにも又勇敢な彼の妻は、友人に酒を出さぬやう頼んだ。この時既に彼は全く煩惱の奴となつて居た。彼は食器棚の鍵を妻に要求した、其の中には客用の酒が一瓶藏してあつたのである。勇敢なる妻は其を拒んだ。彼は短銃を突つけて威嚇したが、尙ほ彼女は頑として應じなかつた。如何なる天魔に魅入られたか、其時彼は引金を引いた。彼女はバツタリ倒れて、血潮は床に滴つた。又もや一弾は耳の後部を射た。約三十分程家内は寂として何の音も聞えなかつた。下婢は驚怖の餘り蔭に隠れて居た。

其の三十分間には何が起つたであらうか——彼が徒費せられた生涯の全部を眼前に見た時、彼の胸に迫つたのは、單に戦慄すべき悔恨の念であつたらうか、絶望の念であつたら

うか、其は神ならぬ身の知る由もない。兎に角三十分の後又もや一發の銃聲が響いた。彼は我と我が手で死んだのであつた。調査の結果、戦慄すべき一部始終が明かになつた。

頑固——第三の話はウエストミンスターのコロナ廣場で起つたことで、一九一四年六月十六日のタイムス紙に掲載されたものである。其はある少女に就ての話で、三つの中最も痛ましいものである。原文を轉載すれば次の如くである。

昨日ウエストミンスターにて——嬢の死因に就き係官は取調を行つた。彼女は「ローラ・グレー」の名を以て知られ、嘗ては示威的婦人参政權運動者の一人であつた。彼女の母の語る所によれば、彼女は高潔にして高等の教育を受け、且つ犠牲的精神に富める婦人であつたが、但し多少常軌を逸したる點がないでもなかつた。數年前彼女は示威的婦人参政權運動者の群に投じ、一九一二年監獄に送られたが、刑期中食事を拒んだこともあつた。出獄後彼女は家を去り、女優として舞臺に立つた。其後彼女は酒精及び麻醉劑に耽つた證據がある。過去十八ヶ月間は寛宥に出入し、背徳の生活を續けて居た。検屍の結果彼女の妊娠中なることが判明した。評決は「一時的發狂中の自殺」死因は故意に服用した過量のヴェロナルのためと決定した。

右は唯だ事件の輪廓で、この魔道に陥つた少女が死に至るまでの階程には全く觸れて居ない。放縱や奢侈の爲めではなく、斷乎たる頑固のために彼女が受けた其の苦痛と悔恨と



は、この話の主眼であり、又他人に對する善い訓戒と云ふべきである。

調査の際提供されたる證據によつて見ると、彼女は低級な情慾の爲めに身を誤つたのではなく、反つて普通の悦樂には餘り頓着しなかつた。彼女は刻苦勉勵した。而して社會主義を奉じ、己れよりも一層不幸なる同胞婦人に全生涯を捧げやうと努めた。併し彼女は十六歳の時から道理と諫言に従はぬ致命的の性癖を示した、これは往々強き意志と誤まられることがある。自分の望む儘にすると云ふのが彼女の有力なる特質であつた、この點については愛情、經驗、或は道理を以てしても抑へられぬ多くの少年少女と類似して居る。彼女は極端まで理論を推し進めた。彼女は其の生活が餘りに贅澤で懶惰であると考へたので(多分實際さうであつたらう)家を出て、自活し、獻身克己の生活をした。

人は皆己れの麵麩を得なければならぬ、故に婦人も自ら額に汗して生活費を稼がなければならぬと彼女は考へた——これは男子にとつては健全なる原則であるが、婦人には決して適用するとは出来ない、婦人には多くの有益なる活動範圍があるからである、而して其は單に生存の爲めに麵麩を得るに比し遙かに高尚なる職務である。併し彼女は燃ゆるが如き熱心を以て様々の職業を其から其へと試みた。彼女の決心は幾多の艱難を生んだ。併し

依然として經驗てふ明白なる教訓には耳を藉さなかつた。ついで彼女は舞臺に立ち、魔窟に出入し、どん底に陥つた。併し此等は悪事と奢侈とを望んだが爲めに陥つた過失ではなく、全く自己犠牲の精神、極端な社會主義、刻苦、失望のためなりしことは誰の眼にも明らかである。彼女は神經痛に悩まされ、健康は衰へ、失敗を落膽し、其の結果として彼女はあらゆる愚かしき快樂を追求し、要求のために破滅の淵に陥り、最後の屈辱を受け、我が身が厭はしさに耐へず、遂に我が手で我が身を殺すやうになつたのである。記事は尙ほ續く。

スパイサ夫人の云ふ所に依れば、月曜日には戸が開け放たれ、グレイ嬢は寢室の床に倒れて居たと云ふ。この證人は苦悶の聲などは少しも聞かなかつた相である。

検屍官は五月二十六日附家主に宛てたる書簡を讀み上げた。

「妾はこの様な始末で貴君に多大の御迷惑を掛けますのが心苦しいです。併し妾は一切を整理して置いた積りでいます。兎に角妾は何人にも負債は無い積りです。」とて家賃、電燈等の受取の、此處で死ぬから」ピヤノを取りに来て呉れるやうにと云ふのであつた。

雜仕婦のスパイサ夫人に宛てたものは次の如くであつた。



「あなたとお娘手への御禮の印に金貨で十志封入して置きました。」なほセント・マーチン・レーン圖書館に一冊の書籍を返却して貰ひたき旨追書してあつた。

寢臺の上に見出だされた書簡は母に宛てたものであつた。

お母さん——妾はこの愚かしい手紙が暫くの間あなたの御手に入らねばよいと思ひます、兎に角このためにあなたがひどく驚愕なさればよいと思ひます。妾はあなたに幾度となく手紙を認めました。妾はどうしてもいかに解らない事を二三この中に書くことに致します、併しあなたが此處へ戻つていらつしやる必要があるとは決して思ひません。妾はあなたの御名前と妾の名前とを聯想するやうなものは一つも後に残しません。裂き捨てる氣にならなかつた手紙が二三通——あなたの方にも一つや二つはあるだらうと思ひますが——それから支拂濟の請求書が一束あります。自分で覚えて居る限りでは、誰にも負債はないと思ひます——着物の始末は雜仕婦に指圖して置きました。妾はこの六ヶ月間實際毎晩ウエロナルを飲んで居りました。この事はこれだけにして置きます、眞實を申上げると、あなたに御心配を掛けるのは解つて居りますから。

無論親切な検屍官は「一時的の發狂」と云ふでせう、併し勿論これは妾が今までした中で最も正氣で行はれたことだと思ひます。たゞ妾は一般の事柄に倦き／＼してしまつたのです。この世の中が自分の爲に一層悪くなるのを見て居られないのです。其が卑怯に見えるると云ふことは解つて居ますけれど……あなたに實に純潔で善良な方ですから、斯様なことを申上げにく／＼なりません。併し其は絶對的に眞實だと思ひます。……この世の中に一人として妾ほどよい同情ある母のある者はありません。

ん。

検屍官はこれを概括して次の如く云つた。

この婦人が精神の安定を缺いて居たことは充分なる證據がある。示威婦人參政權運動者の群に投じたるが爲めに非常なる苦勞をしたらしい。窓脚子を破り、警官を襲ひ、獄に投ぜられ、強請的に食物を攝取せしめられた其の心身の興奮のために、既に多少常軌を逸して居た精神を一層錯亂せしめた。

検屍官はついで婦人社會協會から贈られたる勳章に添附した書簡を讀んで云つた。此文書とこの笑ふべき勳章ほど、若き婦人の心を混亂せしめるものはない。書簡によつて彼女も多大の影響を受けた。其の時まで彼女は示威婦人參政權運動者ではあつたが、併し家庭に起臥して居た。……これより後は彼女は己れの地位を誇大視し、遂に家庭姉妹と母とを捨て、主義のために身を献げんとて屋根室に移り住んで自活した。ついで彼女は默劇俳優として舞臺に立つた。彼女は既に成年に達して居たが、自由獨立の生活に入れば、危険、之に迫ることは世間周知の事實である。彼女も不幸にしてこの危険を免れなかつた。ついで彼女は冤窟に姿を現し、其處に出入する男の財布を絞つた。參政權運動には最早無關係であつた。其後の彼女の生活は、飲酒、服藥、背徳、妊娠、自殺、これだけであつた。

これが我儘な卑劣なる婦人ならば、この痛ましき物語を長々と記載する必要はない。これを特筆したのは品性高き婦人の墮落であるからだ。其は非常に大切なことである。

世には頑固と力とを誤り、主義や分別の爲めではなく、克己とこの婦人が最後まで惡び



れず對抗したる如き苦痛を恐怖するが爲めに、斯る行爲を慎しむ少女が随分多い。彼女は飽くまでも我意強く、遂には商量、判断の感覺を喪失したよき實例である。卑劣な婦人ならば、借りたる書籍の返却にまで言及するが如き書簡は書かなかつたであらう。

此等は實に痛ましい話であり、且つ正直正銘の物語である。此等の話は之を隠蔽又は忘却してはならぬ。何人も斯る悲惨なる終りを告げることはあるまじ、或は奇蹟に依つて自然の結果を避け得らる、ならんなどと考へてはならぬ。

勞役を厭うて少年時代に時間を徒費し、試験が容易で仕事が楽だと云ふ理由から僧職に就いた牧師、人生の事實を念頭に置かず、面白く可笑しく暮すことのみを希望した少年、友人に對して我意を立て通し、己れの思ふが儘の生活をした少女、——此等の人々が我等よりも悪人であつたらうか。ローラ・グレーは、ある一事或は何事にも慾得離れて専心すること能はざる人々に比して、非常に善いとも云はれないが、大して悪くなきことは確かである。

併しこの三人は皆かの三大缺點の一の爲めに、前途有望なりし其の生涯を棒に振つたのである。我等はある程度まで其の缺點に誘惑を受け、各相應の罰金を拂ふのである。此等

の氣の毒な人々の所業は、之を神の慈悲に委せるより仕様がなない。併し此等の人々に缺如せる諸性質を我等は何處かで何等かの手段によつて得なければならぬは確かである。徒費せられたる機會を其と悟つた時は既に遅かつた靈魂の悔恨は、愛と道理によつて習得するを望まず、従つて苦痛によつてのみ習得する人々にとつて、落膽の沼から足を踏み出す第一歩であらう。我等は神の正義と慈愛の外何一つ確かには知らぬ。併しながら我等はよく他人の警告に従はなければならぬ、又經驗の教ふる所に我意を通して反抗するを以て、勇敢なる自立的精神の表象であるなどとゆめ／＼考へてはならない。

一一、正しく見て其を行ふは眞の人間の運命なること

予は人間の眞の運命——進化の眞の道程——は、先づ我等の家庭に於ける位置、引いては國民中の位置を充分さしむべき精神及び靈魂の諸性質を發達せしめるにあるを諸君に示さうとした。これを信するはつまり喜悅と生命とを信するのである。其を拒むはつまり墮落と失望の道を選むのである。

これは難解なる科學的眞理である。ハックスレー教授は理想的訓練について次の如く述べた。



人間は少年時代に充分訓練をして、肉體は意志の命する所を直に實行する奴婢の如く、又爲し得る仕事は悉く機械の如く易々と面白く爲し得るやうにしなければならぬ。其智力は明晰冷靜なる論理的機關で、其の總ての部分が等しき力を有し、又圓滑に運轉する秩序を備へ、蒸汽機關の如く如何なる仕事にも直に轉換せられ得べく、其の心には自然の偉大なる根本的眞理と自然の働きの法則とに關する知識が蓄へられねばならぬ。いぢけたる隠者ではなく生命と活力に充ち、併し其の情熱は強き意志によつて良心の奴婢たるべく訓練せられたる人間にならねばならぬ。又彼は自然と人爲の別なく、あらゆる美しき物を愛し、總ての鄙陋を憎み、己れと同じく他人を尊敬することを學ばねばならぬ。

即ち眞の進化は先づ人間精神の諸性質の發展及び發達、次いで精神の奴婢兼通譯として肉體の諸性質の發展及び發達である。故に此等の事實は、精神の本性及び靈魂に未來世——我等が過去の行爲の結果を收穫する生活——のある事實と分つべからざる關係がある。過去の行爲の結果を收穫する生活とは即ち神の怒と正しき判斷の啓示せらるべき日で、神は「人おのゝの作にしたがひて報をなし給ふ」のである。忍耐し善行を積んで、光榮と名譽と清淨とを求むる者には永遠の生活を、不謹慎にして眞理に附從せず、不正に従ふ者は怒、艱難及び惡を行ふ者の靈魂に及ばす懊惱を與へる。此等に依つてのみ頑固に愚かなるものが道と眞理と生命とを教へらるゝのである。

併しこれは黨派の利益世俗の利害を正義以上に重んずる不謹慎者のことである。善を行ふ人には榮光と尊貴と平康とを期待すべき理由あるは明かである。これ亦報酬のためではなく、自然の結果として生ずるので、これが人類進化の豫め定められたる道程——神の子にとりての向上の道だからである。



### 第三篇 何故か

#### 第五章 性の神祕

概説 アミイバの如き下等動物は分裂生殖によつて繁殖し、巴豆の如き植物は其の葉を取つて地に植うれば、其より根を生じて獨立の植物となる。斯る生殖は無性生殖である。併し神は性の上に總ての進化の基礎を置くを最も適當なりと認められた。各細胞には二個の卵極がある。これを變種細胞と名づけるが、これが一度生長を始める時は、アミイバの如き分裂生殖を營む。これがあらゆる生活體の出發點である。種を繼續せしむべき細胞は、男性細胞即ち精蟲と女性細胞即ち卵とに分裂し、其が再び結合して新しき動物或は植物となるので、之を有性生殖と云ふのである。人間の結婚も要するに之に外ならぬ、たゞ人間の場合には他に多くの者が附隨せるが爲めに、肉體的關係は夫婦關係に比較して遙かに重要ならざるものになつて居る。動物は至適存續の原則に依つて一層高尚なるものに進歩するが、人間は總ての者の幸福の爲めに相互協力するによつて進歩するものである。人間の進歩が至適存續の結果なりとは以ての外のことである。夫婦の愛は總ての愛の中最も醇美なるもので、夫婦は互に相倚り相輔け、一方の爲めの努力は他方の快樂で、微笑と接吻とは盡されたる義務に對する最大の報酬なのである。人間の結婚



は實に斯の如きものである。而して愛は善良なる者の間にのみ永續するもので、不誠實なる人間は他人を愛することも又愛せらるゝことも出来ないものである。人間の結婚に就て今一つ記すべきは婦人の権利である。婦人は文明建設なる大事業の半ばを負擔し居るのであるから、男子と同等の権利を有すべきものである。妻は夫の協力者で臣下ではないのである。のみならず婦人は一度結婚を誤る時は、即ち生涯を誤るのであつて、再び出直すことは出来ぬ。従つて婦人に愛を捧げる男子は、才能と勤勉に依つて彼女と家庭を造り得る資格を備へたものでなければならぬ。我等人類は希望すると否とに拘らず進歩發達する。而して神は愛と喜悅とによつて人間の進歩向上するを希望する。而して夫婦間の無私の愛と献身とは、人生最美の悦樂である。

心の清き者は福なり其人 神を見ることを得べければ也。

### 一、進化の基礎なる性

最も下等なる生物——アミーバの細胞——が其の二個の核の分離によつて生殖すること、は諸君の記憶し居られる所であらう。其の細胞は先づ沙時計形となり、次いで8字形となり、遂に分裂して二個となる。これは分裂生殖と稱するもので、これには性は關係ない。其と同じく園藝家が切枝を取つて之を植うる時には、其の小枝には根を生じて新しい植物となるだけの生命がある。巴豆はづの如き植物は一枚の葉を葉柄を下にして地に植うれば、成

長して一の茂みをなす程生命に充ちて居る。蚯蚓の如き動物までが、偶然兩斷される時は、二匹の完全なる蚯蚓になる。

さて神は確かに總ての生殖を、ある同じ苦痛なき方案のもとに造れたであらうが、其に反して神は性の上に總ての進化の基礎を置くを適當と認めた。

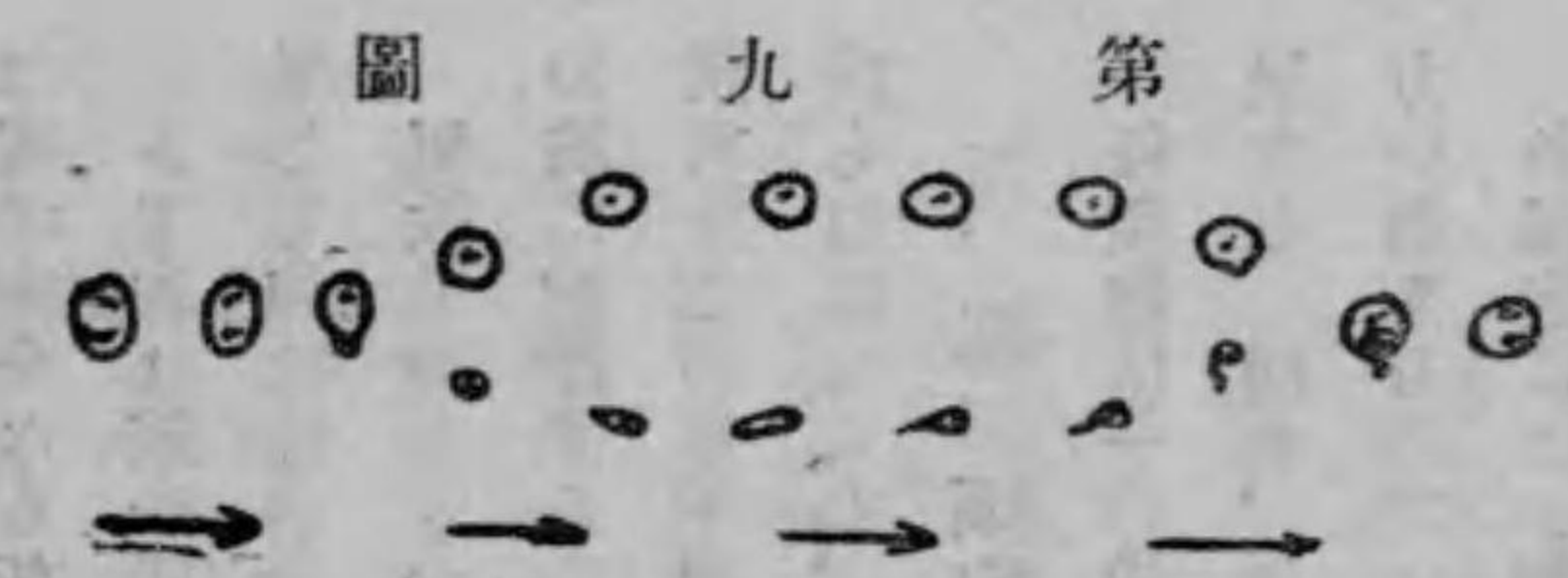
何故であらうか？ 此性の神祕である。其の解答は困難ではないから、直ぐにも諸君の前に披瀝することが出来る。併し諸君自ら其を見出す方が遙かによいであらう。恐らく諸君はこの章を讀了せぬ中に見出すことが出来るであらう。それまでは我等は再び細胞に戻らねばならぬ、其處にこの謎の糸口があるのだから。

### 二、再び細胞に就て

各生物は一の細胞として始まる。此等の細胞は、顯微鏡下に窺ふ時は、全く同様の觀を呈する。樹木、魚類、もしくは人間に發達すべき細胞は、其の内部には甚だ異なる生活能力を有するのであるが、外見上殆んど全く差違を認めない。

各細胞には二個の二重の核即ち卵極——少なき黒點で多少生長の本になる尖りがある——及び一定數の極めて微少な桿狀の組織が含まれて居る。後者は細胞の他の部分よりも





第九圖 雙極細胞結合するが男性及び女性細胞に更に更に

容易に染まるので、染色体と呼ばれる。種の異なるに従つて染色體の数も異り、人間の細胞には十六個ある。斯る複雑なる雙極細胞は、一度生殖を開始すると、アミーバの如く分裂によつて生殖する。而して斯る細胞はあらゆる生活體の出發點である。諸君の身體も始めは斯る雙極の細胞である。

さて昔の昔の大昔に性が始めて地球上に現はれたる時、性的方法に依つて發達し進歩すべき各種の生物に固有なる細胞が、不均等に男性と女性に分れた。

如何なる具合にこの變化が起つたのであるか、其は解らない。何故に起つたかは先きへ行けば解る。

種を繼續せしめる目的を達すべき細胞中の一個の核即ち卵極が他の核から動き去り、而して其の細胞は二個の甚だ不平等なる部分に分裂する。男性部は遙かに形が小さく且つ一層活潑で、女性部は遙かに形が大きく且つ一層不活潑である。大きさは甚だ

しく異なつて居るが、各一個の核と半数の染色體を有する。生殖の起る前に、二個の斯る單極細胞は再び結合して、二個の核と全数の染色體を有する完全なる雙極細胞を造らなければならぬ。これが等しい雙極細胞に分裂して、新しい動物或は植物になるのである。總ての有性生殖は斯くの如きものである。

諸君は卵もしくは種子を斯る雙極細胞と看做すことが出来る。これは全く正確ではないが、今理解し得た限り眞實である。諸君は斯る細胞發達の連續せる階程を示す挿圖によつて男性と女性の單極細胞に分離し、雙極の生殖細胞が、再び新生物の出發點なる生長する細胞に結合する模様を了解することが出来るであらう。

下部の細胞は男性細胞で上部のものは女性細胞である。この兩者は形が全く異なる。男性細胞は自體を推進せしむべき蠢動する尾を具へた微小なる蝌斗の如きもので、精蟲と稱せられる。女性細胞は極めて小さい卵の如く、卵殼の代りに薄い膜がある。人間の精蟲は長さ一吋の百二十分の一程で、顯微鏡下でなければ見ることが出来ぬ。人間の卵子は直径一吋の五十分の一程で殆んど圓形である。鳥卵と胎生動物の卵との相違は、哺乳動物の卵は極めて小さいこと、卵殼の代りに膜があること、暖められて孵化する代りに母の胎内で生



長することである。

男性細胞は成長した男性動物の体内に特別の生殖器によつて夥しく生ずる。同様に女性の生殖器からは卵が生ずる。これが性と稱せられる本質的の相違である。男性動物と女性動物とが結合すると、無数の精蟲を含める男性の精液が、女性の子宮内の一個或は一個以上の卵に出合ふ。卵は其の一端に小突起を出して、其の内部へ單に一頭の精蟲を受容する。然る時は完全なる雙極細胞となつて、母の胎内で新生物に發育することが出来るのである。其の細胞は他の總ての精蟲を拒絶する——又其は生命があつて、間もなく生長し分裂を始める。

この生長は甚だ不思議なる方法で行はれる。卵が受胎によつて雙極になると同時に、アミーバの如く平等に分裂し、斯くして生じた新細胞は外皮様の層と内層とに排列せられる。外皮の褶皺が胎兒の眼、耳、口、其の他の器官、及び四肢に發達し、内部の膜は心臟其他の内臓機關となるのである。

### 三、卵の孵化

其の徑路は鶏卵の孵化に就て精密に研究せられた。抱卵後一日目二日目三日目四日目と

日々卵を破つて内部を検査すれば、胎兒發達の連續せる階程を實際に見ることが出来る。先づ第一に小さき線と二三の赤色の枝を分つた絲とが現はれるが、前者は未來の脊骨と其の内部の大神經、後者は未來の心臟と血管である。着々と別個の器官が發達し、遂に約二十一日で、無形の卵黄から生長し卵白で養はれた完全なる雛が、目も見え耳も聞え、筋肉も神經も具はり、總て完全なる新生物としてこの世に出現する。これ程不可思議な美しきものはない、而してこの日々の神祕によつて感動せぬものは、よくよく低脳な連中であらう。其の毳毛の小塊中に、父母兩方の未だ發達せざる特性が隠れて居る。其が或は鬮雞、或はコーチン、或は右斑のブリマス・ロック其他に生長するのである。

此處で諸君が第三章で讀んだメンデルの系列に就ての事實を想起せられたい。其の親が二人、祖父父母が四人、曾祖父父母が八人と云ふ如く上に溯る程倍加する事實から、其が遺傳する性質の割合は、次の系列の逆でなければならぬことが解るに相違ない。

$$2+1+8+16+32+\dots=8$$

これは若し共通の祖先がなかつたとしたならば、家系の全體を表はすであらう。故に遺傳せられたる性質を表はす系列は次の如くなる。



$$1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + \dots = 1$$

この系列の總體が一羽の雛に遺傳せられたる性質である。これを理解するには少しく思考を費す必要があらうが、よく考ふれば其が確かに眞實なるを悟るであらう。これを理解するには數學を用ひよ。斯る場合に數學は至極調法なものである。

右に述べた所は、動物生殖に關する全體ではない。尙ほ其他に雛の中には既に記述した「變化せんとする力」が潜在して居る。又環境に適應する力、心智的諸性質の端緒、及び容易に説明すべからざる多くのものが存在するが、此等は諸君にとつて頗る難解であるから、直に予の本領に移らん。この方が遙かに解し易からんと考へる。而して動物に於ける性の神祕に就いて幾分理解することが出来るであらう。

人間の結婚は總て之を表示するもので、これに甚だ多くのものが附隨して居る。其の附隨せるもの、多き爲めに、肉體的關係は他の動物創造と何の差異もないが、夫婦關係に比すれば、遙かに重要ならざるものとなつて居る、夫婦關係が、文明國民を造るべき名譽と勳功の傳統を以て、家庭を成し家族の基礎を据ゑるのである。

動物は「至適存續」の原則によつて一層高等のものに進歩するが、進化の方便と手段とは

死である。

人間の進歩は總ての者の幸福の爲めに相互協力するによつて生ずる。人間の進歩が「生存競争」「至適存續」なりとの言を信じ給ふな。この原則は死と破壊とを惹起するので、自然のあらゆる秘密と巧なる發明を戦争の恐怖に應用すること、同胞を不具にし傷害すること、婦人の不幸、荒廢したる家庭、孤兒となれる小兒、不和と憎惡等は皆この原則から起る。

生存競争を以て人間進歩の根元なりと主張する者は、人生の最大なる且つ最も明白なる事實——人間は生ける靈魂なること、幸福と完全とは、絶えず所有し獲得せんとて利己的に争闘する人々の間にはなくして、劣等なる衝動を抑ふる人、意志と興味と智力を以て働き又遊ぶ人、互に相助け相愛する人の間に見出さる、を顧みないのである。

文明は相互の闘争によつて生ぜず、相互の協力に依つて生ずる。あらゆる職業は一般の幸福に何者かを寄與する——人類は皆ある健全なる仕事を爲さんと望むものである。

人間中最も適當なる者が存續すると云ふは一應尤もである。靈魂の性質を無視し、奢侈、放縱、怠惰、臆病等に耽つた人種は絶滅し或は絶滅に瀕して居る。肉體的の適合を道德的及び精神的適合に従はしむる法則の容赦なき働きによつて間引かれるのである。優勢を目



的とする人種の滅ぶるは、羅馬の滅びたるが如くである。征服、隸屬、落膽、苦痛は絶滅の手段である。而して總ての虚言者と不貞漢は遂には現在の墮落を泣き、徒費せられたる機会を切齒するに至るは事實である。併し一層高き人格の發達によつてのみ人類の進歩があり得るとは決して信じ給ふな。この一層高き人格を發達せしめる方便は、愛と苦とである。若し不滅の精神が愛によつて習得するを欲せざる場合には、苦によつて習得しなければならぬ。第三の手段はないのである。人間の生活に於ては愛と苦とは混じ合ひ、遂には完全なる愛が苦を驅逐すること、猶ほ其が恐怖を驅逐するが如くである。

#### 四、人間の結婚

母の愛は苦痛を以て始まる。九ヶ月間母は諸君を胎内に收めて居る。諸君の爲めに多大の不快を喜んで忍耐したる後、非常なる苦痛を以て諸君は生れたのである。諸君が幼少の間には、母は諸君を養育し愛撫し、己れの欲望は捨て、顧みず、餘暇を犠牲にし、諸君の幸福の爲めに己れの快樂の多くを抛棄したのである。若し母が自己の享樂をのみ考へたならば、若し己れの時間と愛とを與へなかつたならば、諸君は今日の如き健康と力は得られなかつたであらう。斯くしたる後に、若し己れの子が怠惰、不潔、不信の人間——人間世

界に何等の善事をも行はざるが如き人間——になつたとすれば、母の失望は如何程であらう。

聖書には母の愛及び世界の生命を持続するに就ての母の喜悅に關する多くの引喩がある。生命と生命の營養とが母の本領である。若し母が諸君に對してなしたることを思はば、諸君の健康と生存とは全く母の愛情込めたる養育の賜なるを悟るであらう。

幼少なる小兒と雖も、愛の幸福——諸君の正しいと否とに拘らず、諸君に對して忠實で、諸君の短所は悉く愛の爲めに忘らる、が故に之を恐怖する必要なきが如き人がありとせば如何であらうか——其の眞味の幾分を悟り得るであらう。夫婦間の愛も斯の如き、又これ以上のものである——夫婦は他の總ての者に對して互に相擁護する。諸君を全く信頼し、羞ぢず怖れず隠さずに接することが出来、日夜起居を共にせんことを好み、彼のために働き全力を盡すことが快樂であり、彼の微笑と接吻とは盡したる義務に對するこの上なき報酬であると云ふ如き友人を持ちたりとせば如何。

これが人間の結婚である。

諸君の中には「親交に就て」と題する論文を讀んだ人があらう。其の中にある伶俐なる羅



馬の法律家が友情に關する彼の思想を披瀝して居る。古代にあつては友情の觀念は高尚なる觀念であつた。デーモンとビシアスなる二人の友人、其の一人がシシリ島シラキューズの暴君デオニシアスから死刑の宣告を受けたと云ふ有名な話がある。ビシアスが何をしたのであつたか予は記憶して居ないが、多分デオニシアスの政府に反對したのであらう。彼は死刑の執行に先ち整理のため希臘へ行くことを望んだ。デーモンはビシアスの請を許すならば、彼の代理とならうとデオニシアスに申し出た。デオニシアスは其の願を容れ、デーモンを其の代りに禁錮した。日一日と経過したが、ビシアスは歸らなかつた。併しデーモンは片時も己れの友人の名譽と忠實とを疑はなかつた。遂にデーモンが友人の代りに死刑の執行を受くべき最後の日になつて、ビシアスは息を切らして飛んで來た、而して落着いて微笑を湛へ、若しビシアスが間に合はなければ、何か故障があつたに相違ないと固く信じて居るデーモンを見出した。諸君はデオニシアスがビシアスを放免し、のみならずいたく二人を讚賞して、己れの友人たらんことを乞ふた由を聞いて定めし喜ぶことであらう。

この逸話によつて筆者のシセロは、眞の友情は單に善人の間にのみ存するを示さんとし

たのである。悪い利己的な人間は、常に己れの利益のために友人の利益を犠牲に供する。彼等は自己の與へざる者を友人に請求する。彼等は好んで己れの利益のために友人を利用する。彼等は友人が恥づべき行爲をなし虚言を吐き、人を欺くことを望む。斯ることは友情を殺す。さて愛は、若し其が眞に愛と云はれ得べきものならば、デーモンとビシアスの如き友情が其の中に含まれて居るのである。愛はこれ總て友情で、又其れ以上である。故に愛は心の善良と高尚を基礎とする。缺點と弱點とは悉く之を忘れることを得るが、利己心と偽りと鄙陋とは愛を殺す。不正直、不誠實で、兎角物事を匿し、裏面に於て不面目なる行爲をなすが如き人間は、何人も之を愛し續けることは出来ない。我等と日夜同棲する者は、我等が其を望むと否とに拘らず、有の儘の我等を見るのである。これはあらゆる喜悅の中最大なるもの、或はあらゆる苦痛の中最悪なるものである、虚偽や鄙陋が絶えず曝露される程苦痛を感じることはないからである。不正直な或は鄙陋な人間は、假令愛に就て思を致すことあるも、間もなく互に憎み合ふやうになる。配偶者に對しては純潔を保ち眞實を以てせよ。しかすれば諸君が眞の結婚の何者たるかを記憶し、人生最大の祕密を惡用して身を汚さるるか否か、他日確かに解るであらう。



不正直で腹黒き人々は、彼等の望む時及び望む人に對して、潔白に眞實に事を爲すことが出来ぬ。鄙陋な習慣は、肉體を支配する靈魂に固有のものではない、がまた一旦左様な習慣がつく時は中々其が治り難いものである。併し左様な習慣をつけぬことは容易である。諸君は斯る習慣の恥づべきものたるを知る。諸君の母及び姉妹が、諸君の爲す事を悉く知つて居たとすれば、如何に考へるであらうか。若し諸君に何等か隠れたる恥づべきことあるを自覺して居らば、この事に思を致されよ。諸君の娶る少女はやがて其を知るやうにならう。鄙陋な或は不正直な或は腹黒い男が、己れの人格に關して妻を欺くは、白痴が正氣の振りをするやうなものである。妻は斯る男を侮蔑するに定まつて居る。或は故意に侮蔑する意志はなくとも、永い間にはさうせざるを得ないのである。

五、道徳的至適者の存續

道徳的至適者の存續と云ふことは甚だ結構なことである。其は動物界の至適存續と同じく、靈魂の發達に關係がある。誘惑を征服すれば我等は強くなるからである。少年は誘惑を受けると同時に、次の三種の中孰れかに己れを屬せしめる。

一、男らしい名譽心を重んずる少年で、彼はあらゆる種類の鄙陋な言語及び行爲に關係

することを欲せず——誘惑せられたることに心づくると、斯る事は高雅なる人間のすまじきことなりと思ひ、斷乎として他の何事かを考へる

二、誘惑を恥づべきこと、は思ふが、次第に其に引き入れられる。其から脱れんと決心はするが、其の決心が永續しない。斯る少年は意志が薄弱になり、人格の力が缺けて居る。而してこれはあらゆる行爲の上に現はれる。成長したる曉に、此の種の少年は、他人が己れを重んぜず、己れの意見に注意を拂はず、「劣等なる人間」や「くさ者」と考へる理由が解らない。其の眞の理由は彼の心中に働いて居る腐蝕力である。其に妨げられて智的洞察と他人の尊敬を博する意志の力を得られないのである。彼等と結婚する婦人は其に心づく。而して愛の覺めたる後には、赤裸々なる男の姿のみが目について、眞の愛は一變して、失敗を出来るだけ利用しなければならぬと云ふ痛ましき寛容及び意識、或は甚だしき憎惡の念となる。

三、第三の階級に屬するものは、「恥を知らず好て凡の汚を行はん爲めに己を放蕩に付したる者である。彼は益、墮落の淵に沈んで、遂には罪人となり狂人となる。養育院には斯る人間が澤山に居る。



これは永く裏面に潜在すべからざるもので——顔面容姿の上に歴然と現はれる。精神は己れになぞらへて肉體を造る。毎日の如く諸君は己れの顔面を造り、其の表情を變更しつゝあるのである。神は慈愛に富むが故に、この變化は直には起らない。一回の過失或は二回の過失は決して顔面に現はれるものでないが、遂には狡猾な落着かぬ眼、だらしない態度、濕つばき不格好な手、發達不充分の筋肉、不確なる神經、懊惱しやすきこと等によつて、何人の眼にも其と知られるやうになる。

### 六、婦人の權利

人間の結婚に就て今一つ記すことがある。少年及び男子は、全く己れの見地から其を考へ易い傾きがある。併し少女及び婦人は人類の半分であつて、男子と同様の權利を有するものである。婦人の仕事が文明建設の上に莫大の關係あることを思へば、婦人の權利の重要なことも従つて解るであらう。母の本領は家庭である——母は彼女の夫と同等の者且つ協力者であつて、夫の臣下ではない。彼女は家庭を陽氣ならしめ、又其を文明生活に屬するものを以て充すべき資質を有さねばならぬ。金錢を獲ることは彼女の任務ではない、家庭を美しくなさんが爲め、世の荒浪を避ける避難所たらしめんが爲めに、金錢をうまく

使用するのが彼女の任務である。婦人は唯だ一人に對してのみ深き愛を捧げ、遠慮を捨てるものである。若し婦人が結婚を誤る時は、即ち己れの生涯を誤るのであつて、新たに直すことは出来ない。故に婦人に愛を捧げる男子は、才能と勤勉とによつて、彼女に家庭を與へることの出来るものでなければならぬと云ふことは、婦人の權利である。男子が若し少年の時に怠惰であつたならば、斯ることは爲し得ない。斯る男子は愛を捧げる或は愛を乞ふ權利がない。男子として最も鄙陋なることの一は、家庭を與へることも出来ぬ辭に婦人の愛を受けることである。無私の愛のみを受けて、何者をも之に酬いないのは虚言者であり詐僞師である。

「半ば知らずに甚だ残酷な所業を行ふことは、若い男にとつて決して稀でない。即ち彼は悪い事とは知つて居るが、其が怖るべき殘虐であるとは悟らない。彼は、恐らく始めは別に悪いとも思はないで、貧しい少女や、自宅の女中や、女店員や、村の小作人の娘などを盪し込む。彼が一寸した快樂の爲めに、彼女の全生涯の幸福を犠牲に供したと覺る時は、既に遅いのである。予は總ての少年がこの事に就て明白なる警告を與へらるべきものであると思ふ。諸君は定めしスモレットとフィールディングを讀んだであらう。而して斯ること



は大したことはないと云ふ意見を見たであらう。あの意見は婦人が男子の玩弄物及び奴隷にのみ適する劣等動物であると考へられた時代の遺物である。……併し少しでも寛大な所のある、或は少しでも正義を愛する者は、斯様な場合に殆んど總ての罪は男子の方にあつて、殆んど總ての苦惱は婦人が蒙ることを、見るに忍びないに相違ない。諸君の誘惑に従つた憐れとして、生涯不幸なる日を送るが如きことは、如何なる婦人に對しても決してなさぬと云ふ決心を固めるやうに、この怖るべき情況を、諸君の眼の前に曝露することが必要であると考へる。二十歳位の男子でこの猥らなる利己主義を超越したる者は稀である。併し若し己れの快樂と他人の不幸との間の非常なる不權衡を覺つたならば、恐らく身を慎まれるであらう。貞操を汚したる少女は名譽を失つたのである。名譽の毀損は、男女に拘らず、人生に於ける救ふべからざる阻碍である。諸君自身が名譽を有するならば、他人の名譽を毀損することが何を意味するか、解し難いことはあるまい。

高き人格の精髓は無私である、而して無私には男女の差別はない。男女間には餘りに差等がある如く考へられて居る。多くの家庭が男子の不信、利己、及び氣儘のために不幸になされると同じく、亦婦人の不信、利己、及び氣儘のために不幸になされることがある。

前者は往々放縱、驕傲、及び不注意の形式をとり、後者は贅澤、偽り、及び肝癪の形式をとるが、少年に對しては同様に少女は勇敢に、眞實に、聰明に、辛抱強くすべきもの、又相手の心を理解し、社會のため有益な人間になるやう心掛けなければならぬ。斯くしてのと、永續する尊敬と愛情とを得られる。

要するに美とは表情に就て云ふのである。多くの婦人が、青春一度去れば美を失ふと云ふが、大概の場合其は眞實でない——彼女は始めから全く美を有して居なかつた、唯だ美の材料なる滑らかな皮膚と鮮かな色を有して居たのである。彼女は又心の習慣によつて、日々顔面と容姿を造つて居るのである。知識を愛する少女、自己、己れの衣服、及び己れの願望より一層廣い興味を持つ少女、己れの心を美しいものに向つて開き、同情と親切な行爲によつて心情を若やがせる少女、世界の進歩に遅れず、優雅な活潑な無私の生活を營む少女は、彼女の良人にとつては、青春の愛らしさよりも、遙かにいとしい表情を發達せしめる、而して其は若い時よりは年をとつて後に嘆賞せられることが往々ある、彼女を愛する男子にとつて、彼女は決して老いることはない、假令肉體は衰へても、愛の心は永遠の若々しさを有するからである。



七、名譽と喜悅の手段

これは少女にとつては少年と同じく、又少年にとつては少女と同じく眞實なことである。子の目に映する主なる差違は、男子の人格にとつて特に致命的の罪惡は、意志力、勢力、及び決斷力を缺くが爲めに起る所のもので、婦人の人格にとつて特に致命的の罪惡は、不斷の嘆賞を得んが爲めに性の勢力を悪用し、遂には無私の行爲、引いては愛を施すことも不可能ならしめる自己中心の虛榮心だと云ふことである。虛榮心と下らなき好奇心との爲めに、多くの少女が身を滅ぼした。

男女の區別なく、若し諸君が率直な、勇敢な、虚心坦懐の性格を有する人として知られたければ、若し諸君が到る處で人から好まれたければ、先づ少なくとも一日一善を行ふと云ふ少年團ボイスカフの成規より始められよ。暇ある毎に諸君の見たる美しき事物、諸君の知れる面白きこと、諸君の讀みたる高尚な物語を回想せられよ。殊に邪惡なる或は利己的な思想に襲はれたる時には、斯くせられよ、右の如き思想は折々何人をも襲ふものであるから。しかすれば諸君の品性は確かに高尚となる、しかすれば諸君の顔面の表情は愛らしくなる、而して諸君の配偶者は、諸君に就て無限の新奇と歡喜を見出すので、大なる喜悅を感じる

であらう。無生氣と飽滿の原因となるものは興味の缺乏である。

諸君の希望すると否とに拘らず、諸君は進化し發達しなければならぬ。諸君は進化を止めることは出来ぬ。進化は諸君を進歩させる、然らざれば退歩せしめる。靈魂は歡喜或は苦痛によつて習得しなければならぬ。喜悅と名譽の道、眞實、潔白、誠實、勤勉、愛情の道を辿られよ。罪を犯してならぬことは云ふまでもないが、あらゆる行爲を正しく活潑にすべきことも言を俟たぬ。斯くすれば諸君は今殆んど想像すべからざる幸福に到達するであらう。神は我等を造つた。神は我等を幸福ならしめるやうに造つた。神は相互の便宜の爲めに男女を造り、精神と等しく肉體を造つた。神は各々を他の補足者及び助力者として造つた。神は愛と喜悅によつて、人間が進化し向上することを欲する。而して眞の夫婦の間に授受する無私の愛と獻身とは、正に人生が提供する最善の悅樂であり、眞に世界の音樂であることは、靈魂の未來世にあらずとも、現世に於て絶えず證據立てられる。其は總ての人に提供せられる、而して其れを享けるに必要な條件は、清き誠實なる生活である。

諸君は斯る神聖なるものを、淫猥なる談話、野卑なる串戲の題目とするであらうか。諸



君は人間の心より生ずる最も美しき情緒なる愛を、醜陋なる聯想や忌はしき行爲を以て汚辱するであらうか。諸君は諸君の動物性的性質のふしだらなる放縱によつて、全生活を美化し、其の喜悅を倍加し、其の悲哀を半減する賞品を抛棄するであらうか。

八、性の神祕に對する答

さて諸君は、神は何故に進化の基礎事實なる性を造つたかと云ふ問に對する解答の、少なくとも一部分を會得されたことと思ふ。

總ての文明の爲めに必然互に相倚り且つ婦人に倚賴して居る男子は、他の一人を得て以て生活すべきである、又其の者の爲めに生活することは、總ての喜悅の中最も大なるものと考ふべきものなること。

小兒は最初の無力時代を經過したる後永い間、家庭の懇切溫和なる感化を受くべきものなること。

人生の教訓は孤獨の艱難辛苦に依らずとも、最も懐かしき交際によつて學び得べきこと。

此上に尙ほ性に含まる、一層深き眞理があるが、其は未だ諸君には解し難いであらう。

よつてかの詩人と共に次の如く云へば其で充分である。

我等は自ら造る喜びはた怖れ

我等の將來を造るものはこれ

我等は充す未來の大氣を

日光をもてはた隆をもて。

總ての鄙陋、又従つて總ての恐怖を斥くる完全なる愛を以て、死すとも別るとも變ることなき強烈なる愛を以て、互に相愛する時、彼等は極めて奇異なる方法で、心も感情も共に一に歸する、彼等は神が再び其を取去らんとて惡を與へたのでないと云ふことを知る。彼等は世界を被ひ、あらゆる過失を正し、あらゆる罪を宥し、輕んじられ、忘れられ、見脱がされるが、あらゆる善きものを無制限に與へ、惡から善を、悲しみから喜びを、死から生を生ぜしめ、氣儘なる道を踏み迷ふた足を平和の道に指導する永遠の母の愛を理解するやうになる。彼等はこの永續する愛の驚異と神祕を見、少なくとも「神は愛なり」と云ふ意味深長なる語を理解し始める。

其が性の神祕である。而して其の神祕を解決すべき鍵は次の語中に在る。

「心の清き者は福なり其人は神を見ることを得べければ也。」



## 第六章 苦痛の神祕

概説 世界の創造せられたる目的如何と云ふ疑問に對して種々の解答が與へられた。ある者は世界は一大花園で其の美と秩序とを維持せんが爲めに人類が出現したと云ふ。自然界を見れば諸の生物は皆完全なる幸福を享樂して居るのであるから、この説は一應尤であるが、もとより満足の解答でなきは云ふまでもない。轉じて人生を見れば、富める者あれば一方には貧しい者がある、健康なる者があれば一方には羸弱なるものがある。即ち人生には多くの幸福が有ると同時に多くの不幸がある苦痛がある。何故に人類のみが斯かる不幸苦痛を嘗むるのであるか。其は動物界に於ては無意識にもせよ、神の創造的意志の指導に正しく従ふが故に健康と幸福を享樂するのである。人間の標式的感情には三種あつて、肉の欲望、眼の欲望、生の驕慢、れであるが、此等を正しく用ふれば向上の手段となるが、使用を誤る時は苦痛を生ずるのである。併し苦痛にも效用がある。靈魂が物を學ぶ手段は喜悅によるか若痛によるかの二途あるのみであるが、人間は動物體中に宿れる靈魂であるから、若し我等が美なるものを愛さず、己れが行爲が他人に影響を及ぼすことを忘れ、本務を盡さぬ場合には、苦痛によつて習得するの外はないのである。苦痛は又科學の起源となるものである。人類は苦痛を感じるが爲めに、其の苦痛を除かんとして鬮漿を絞り、其の結果として種々の科學の發達を見るのである。又人格の

完成には苦痛は必要缺くべからざるもので、其の結果の幸福なるか不幸なるかによつて其の行爲の正邪を知り、而して正を採り邪を斥け以て人格を完成することが出来る。人若し苦痛を感じる場合には靜かに其の原因を考へるがよい。しかすれば其が何等かの律を破りし結果なることを知り得らる。即ち苦痛の十分の九は自ら招くのである。苦痛は之を絶對的に避けることは不可能である、前に述べたる三種の標式的感情を指導することによつて大に輕減することが出来る。勇氣、自制、親切は苦痛を避くる賢明なる手段で、又斯くすれば他人に苦痛を與ふることも少くないのである。

しかも尙ほ我等

邪惡と不平の道を好む、

破れたる律の上を辿り

自ら招ける苦痛をつぶやく。

### 一、世界は何故に造られたか

世界は如何なる目的の爲めに造られたかと云ふ疑問は屢、發せられた。其は無理ならぬ話である。我等の力に及ばぬことは明白であり、又大昔から引續き力を振へる神の創造的意志の全體の目的を理解し得ると想像するのは無理であらうが、我等が喜んで且つ好意を以て、一般の計畫中の特殊の位置を充すに先だつて、其の目的を幾分了解しなければなら



ぬことは明白であるから。

其の疑問に對して種々なる解答が與へられた。而して何等かの其に對する解答（通例言語に表はされぬが）が、あらゆる人間行爲の基礎になり、又其を鼓舞する。諸君は此等の解答の中孰れが正しいか自ら判断しなければならぬ。

野獸の美しさと幸福とを見た者が、世界は其れ自身の美しさの爲め、又其の住民の幸福の爲めに造られたものである——世界は大なる花園である、エデンの園である、其の秩序と美を維持すべきものは即ち人間で、人間は自身も幸福にして、又幸福なる生物に圍繞されて居るものだ、斯う答へるのは自然の話である。予はこれを眞實でないとは云はぬ。我等が幸福に達する正道を發見するならば、ある意味に於て其は眞實である。併し其は我等の周圍に見る様々な事實と充分一致せぬ。諸の動物が幸福なることは眞實である。彼等には貧富の差が絶無である。總てのものが美しい。野生のものは悉く健康で、明かに生を享樂して居る。殆んど總ての者が他の動物を餌食となつて所謂横死を遂げる所から見ると、彼等は餘り幸福ではないやうに見える。併し野生動物の習性を綿密に觀察する者は、何人も彼等の幸福なるを認めることが出来る。動物中最も臆病で、絶えず耳を聳て、警戒

し、穴から決して遠出をせぬ熟兎<sup>カウチヤウ</sup>さへも、其の生を享樂して居る。何物かの下に隠れて、養兎場に遊び戯る、熟兎を見よ。彼等が心底樂んで居ることが解るであらう。僅かの音を立て、彼等が驚愕して穴に向つて走るを見よ。次いで何事ならんと、小さき頭を彼方此方の穴から出すを注意せられよ。

我等には斯る樂しき生活は出来ぬ。我等は敵に食はれたる友人と我等も食はれるならんと云ふ恐怖を記憶する。熟兎はさうでない。兎は養兎場に何等他と異りたる兎の有るを知らぬ。前夜狐に取られたる姉妹も、死に相なる母に對しても、何とも思はぬのである。危険をも知らぬ、瞬間の危険を避けるは本能的で全く無意識にするのである。過去の危険を記憶するのでもなく、又將來の危険を怖れるでもない。鷹が天空から舞ひ下つて、小兎を攫つて行く。悲鳴一聲、萬事休す。生存者は右往左往走り去る、而して翼ある死神が立ち去つた時、其の母は己が子が一頭不足せることを知らぬやうである。動物には自意識が無い、又彼等の感情は其の瞬間の實際の外界の状態に正しく一致する、又彼等は實際に見たり聞いたりしなければ何者をも怖れぬと云ふ事實の御蔭で、幸福なる生活を營んで居る。死の苦痛の如きも何ヶ月何年の自由なる歡喜に満ちたる生活の後の唯の一瞬間である。



たゞ人間の友なる犬——而して犬の中でも教化せられた犬のみは、眞の記憶力の如きもの、即ち不在の主人の記憶を喚起する力を示すのである。殆んど他の總ての動作は本能的であつて、諸君が昨年轉んで膝頭を擦りむいたことを記憶して居る程にも記憶して居ない。斯る理由から自然界に於ける不斷の死は残酷ではない。狩獵も残酷ではない。一人前の銃獵者が奇麗サツパリ殺してしまふのならば、銃獵も残酷ではない。撃ち損じたり、手負の鳥をのた打ち廻らせる如きは残酷である。一人前の銃獵者となるには、自然が殺すやうに——手早く狙ひ誤らず殺さなければいけない。

併しながら世界の謎に對する斯様な解答——其はつまり狩りつ狩られつ、食べて飲んで配偶を見つけて、子供を育て、生を享樂すると云ふことで、其には充分理窟はあるが——は動物の答である。

世界は花園で、人間は其を維持し、其を装ひ、其の中で幸福に暮すために生じたと云ふ觀念さへも、稍、似通つた解答である。これは世界は斯くあるべき筈だと云ふ比喻或は寓言で、又寓言としても、人間が、本能的生活を營んで居る動物の如くに、正邪に就いて無意識である——善も惡も知らず、何時善を知つて其を選択するかをも知らざるが故に、無罪

であるとしなない以上は、眞實の解答となる譯にはゆかぬ。人間が善惡の差別を辨へると同時に、世界は花園でなくなり、人間が自ら進んで且つ意識して神の指導に従ふまでは、鬭争の卷となるのである。

人間自身は其の疑問に對して全く異つた解答を出した。彼曰く、世界は己れの爲め——己れが之を使用し之を享樂する爲めに造られたものであると。

其も亦眞實である。人間は動物階級の最高位を占めて居る。彼は土地を己れのものとして扱つて居る、其を耕し種子を蒔き、其を賣買し、希望する植物を植ゑつけ、森林を伐採し、鳥獸を滅ぼす。彼は野生の者を奴隷同様に取扱ひ、彼等を馴致して之を使役或は屠殺するが、勿論自分の權限内なりと思つて居る。人間は主人である、而して或る意味に於て世界は人間の爲めに造られたものである。人間は總ての動物の中最後に出現し且つ最も強き者であるが故である。これは自然人の解答——優勢なる、利己的な野心満々たる、能力ある人間の解答である。而してこの解答も亦世間並の答としては眞實である。

## 二、世界の不平等

併し其は完全なる或は満足な解答であらうか。事實を見よ。諸君は醜き弱き野生の鳥類



を見たことがあるか。否、然らば諸君は醜き弱き少年少女を見たことがあるか。諸君は憐れむべき不幸なる不具なる男女を見たことがあるか。眞に美しき少年少女は寧ろ例外ではあるまいか。諸君は監獄、工場、癲狂院、或は病院内へ入つたことがあるか。多分あるまい、其は悲しむべき事柄である、不幸な人々を見ずに、此等のものを想像することは出来ないからである。併し諸君は宜しく大都市の貧民窟を訪れて、其處で諸君が見る少年少女を観察し、彼等の運命と諸君の其とを對照して見るべきである。諸君は折々其等の貧しき兒童が、健康なる幸福なる生活の機會を殆んど有せざること、強壯なる美しき身體を發達せしむることは困難或は不可能なることを思ひ浮ぶべきである。神の創造力は、他の勢力に依つて其が毀損せられなければ、彼等に強壯なる美しき身體を與へるのであらう。動物の本能は彼等を正道に導き、秩序正しき世界を造るのであるが、其に反して我等人間には、醜を得て蜀を望み、互に奴隷となし、互に壓迫する或は不正なるもの、存在すること、又多くの幸福の存在すると同時に、多くの不幸、多くの苦痛、多くの悲哀、多くの病氣の存在すること、これを諸君は自らよく考ふべきである。

此等の及び他の理由の爲めに——主として他人に對して身を護る爲めであるが——人類

には政府を形造り、座右の銘や法律を設け、罰によつて事を強請する本能が常にあつた。阿弗利加或は濠洲の野蠻部族の習俗を研究する時は、部族の風習(即ち部族の政府)なるものがあつて、其の部族を統一し、危急の場合には部族全體が一人の如くに一致して活動する仕組になつて居る。翻つて政府の階程の他の一極端を見る時は、總ての文明國にては、貧民の状態を改善し、病者を治癒し、老弱を扶助し、少年少女を訓練し、健康なる幸福なる生活を營ましむべき機會を與へんと云ふ願望と共に、同じ終局の目的を有するを認めるであらう。

而してこの點については、政府は可なりに成功して居る。僅か五百年以前には、ある有力なる領主に仕へて、其の武力によつて暴力と不正とから保護せられねばならなかつた。今はあらゆる人は法律に依つて保護せられ、病人には病院の設備あり、老人には救助の法備はり、學校はあらゆる人に開放されて居る。

而して若し政府が公平なる正義を行はんとする願望に就て率直であり、惡の原因を除き、其に換ふるに善の原因を以てすることのみを目的とせば、一層大なる成功をなすであらう。併し不幸なる人間は、自ら尊大に構へ、己れの命令を他人に強制せんが爲めに、過度に權



力を欲求する、而して其の権力を悪用して勞せずして金錢を得、不當の名譽を得んとする。従つて政府は、帝王、貴族、議會、政黨の別なく、往々不公平で、横暴で、腐敗し、不良なることがある。今に至るまで、技能を練り、誠實なる仕事と健全なる生活の機會を總ての者に與ふるべく使用し得られる、又使用すべき等なる莫大の金額が、家屋を焼き拂ひ、全家族を寒暑と雨露と飢餓とに曝露する戰爭の準備に費消せられる。獨軍が不幸なる白耳義人に加へたる怖るべき殘虐は扱置き、最も武俠的の戰爭と雖も、恐怖すべき苦痛と不幸とを必ず包含する。而して現今ではあらゆる科學の發明が、他國民を殺傷するに用ひられ、或は船舶の甲板に石油と爆彈を投じて、船員を焦熱地獄に陥れ、或は船底に大なる孔を穿つて、乗組員を水の藻屑たらしめ、或は毒瓦斯を放つて兵士を窒息せしめる。此等は極悪非道と云ふべきではないか。

何故に斯の如き蠻行が敢てせられるのであるか。其は人間が情——野心或は權力を愛する情、富貴或は金錢を貪る情、自己と差別ありと考ふる人々に對する憎惡の情によつて支配せられ、又彼等が思想上一致せざる人々を公平に支配するやう信頼せられぬからである。これが歴史全體を通じて戰爭の原因であつた。又戰爭の不幸を深く感得せる人々も、戰爭

を以て政策の方便と看做し、之を防禦の爲めにせず、己れの目的を達する見込あれば直にこの手段に訴へんと準備して居る者に對して、國家を護らんが爲めに、武装して立ち、生命を犠牲に供するも、矢張り述べた原因によるのである。

病氣と罪惡も亦普通である。英國には今日約三百萬人の狂人があるが、家族中の狂人或は不具者によつて生ずる悲哀の如きを別とするも、此等の狂人を扶養せんが爲めには、國防上必要な兵士を養ふと同額の費用を要する。

世界は己れの爲めに造られ、己れの手に渡されたと思ふるにも拘らず、又政府や法則が具備せるにも拘らず、人間は概して野獸の如き自由と健康と幸福を享有せぬ。

### 三、何故に斯る不幸が生ずるか

何故に、あゝ、何故に斯くも多くの苦痛と悲哀とがあるのであらう。是に於て我等の疑問は一層難解なるものとなる、而して之に對しては、唯一の解答があるのみと予は考へる。動物界に於ては、假令無意識にもせよ、神の創造的意志の指導に正しく従ふが故に、健康と幸福を享樂する。動物は殆んど全く本能と稱せらる、無意識の心によつて指導せられる。人間も多數の無意識の行爲に就ては斯くの如くである。併し我等が意識的に行ふ總ての事



に就ては、其を行ふに正しき手段と不正の手段とを選択することが出来る。

さて諸君にして少しく思を潛めれば、我等は互に持ちつ持たれつするものなることが解るであらう。諸君は、諸君の生存のみならず、食物、衣服、教育に就ては、之を父母に負ふ。餘暇と遊び時間に就ては、家事を取扱ふ人々に之を負ふ——自ら室内を整理し、食物を調理し、衣服を繕はねばならぬ場合には、他の何事をもする餘暇はないであらう。何を如何に教ふべきかを辨ふる教師、食物を供給する商人の誠實、病氣の際醫療を加ふる醫師の技能、我等の生活を保護する政府、此等のものに負ふ所も甚だ多いのである。

我等の行爲にして、何等かの方法で、他のものに反動を生ぜしめぬものは一もない。譬へば甚だしき怠惰なる少年があるとせば、彼の未來のみならず、他日娶るべき妻及び他日生すべき家族の未來までも傷ふことになる。のみならず彼の不勉強の爲めに、教師は教授に興味を失ひ、己れの任務を没意味なる困難なるものと考ふるに至る。若し級の多數の兒童が怠惰なる時は、教師は仕事に倦み、教授は生氣を失ひ、授業時間は徒らに費消せられる。伶俐なる生徒も愚鈍なる生徒も、悉く迷惑を蒙るのである。

我々人類は國民の細胞である。而して肉體に於ては、腦細胞、神經細胞、眼細胞、筋肉

細胞、骨細胞等數百種の種類ある如く、國民も、悉く文明國に必要な數百の異なる職務を盡すべき男女から成立して居る。健全に己れの機能を営む細胞が體內に多ければ、それだけ其の身體は健全である。弱き或は病に罹れる細胞が多ければ多い程、一般の健康は不良で、苦痛を蒙る。國民に就ても正に同じである。其の任に堪へ且つ誠實で、各健全なる仕事を爲す人民が、國民中に多ければ多い程、其の國民は健全に幸福になる。

標式的の感情は三種ある。而してこの使用を誤る時は、各人の肉體的、心智的、及び道徳的健康を滅却し、従つて國民全體に苦痛を及ぼすことになる。この感情とは肉の慾望、眼の慾望、生の驕慢である。世の殆んど總ての惡と殆んど總ての苦は、此等の感情の使用を誤りたるが爲め、即ち肉慾の濫用、理解力の濫用、意志の濫用の結果として生ずる。此等の感情は我等一同に自然のもので、之を正しく用ふる時は向上の手段となるのである。

若し不滅の靈魂が改善せられ得るものとすれば、好意を意識することによつてのみ爲し得らる、は極めて明瞭である。若し斯くの如き靈魂が、多くの少年少女の如く、理性と良心の聲を聞き流すならば、其の靈魂は其の力を誤用したること、及び其の眞の職務を知らざりし結果なる、苦き經驗によつて習得する外はないのである。



四、苦痛の效用

死は動物界に於ける進化の方便である。弱者を強くすることは決して企てられぬ——彼等は容赦なく滅却せられるのである。人間が單に一層發達したる動物に過ぎないとすれば、同一の方案が必然従ふべきである。併し我等は實際動物體の中に生活する不死の靈魂であるから、若し我等が眞實で美しきものを愛する心から習得しなければ、我等の行爲が他人の運命に影響することを記憶せざるならば、若し我等が己れの本務を盡さんとせざるならば、我等は苦痛によつて習得しなければならぬのである。靈魂にも肉體と同じく健康と美の法則があること、其の法則に従へば健康と幸福を得べく、其に逆へば悲哀と苦痛を覺えることは、他の手段では之を習得することは出来ないものである。

世人は、神が罪惡に對する罰として、饑饉と疫病、電光と暴風雨、地震其の他の不幸を下したのだと考へるのが常であつた。始終さうであるか否か其は知らぬ、併し予はさうは思はぬのである。若し其の原因を遡つて究めると、大概の苦痛は、我々自身或はある他の者の不正の所業もしくは無智の直接の結果なることは明かである。

肉慾を濫用すれば其れ自身が罰を受ける。過食し且つ食物に就て餘りに考慮し過ぎる者

は、消化不良に罹り、あれこれと高價なる治療法を講じなければならぬ。其に反して、多食を戒め、且つ一層身體を働かすれば、始終完全なる健康を維持し得たであらう。過食する者は肥滿し、筋肉弛緩し、懶惰で氣むづかしくなり、あらゆる病氣に罹り易い。而して肉體は其の中なる靈魂の状態を外部に表現するものであるから、彼等は弱々しい陰鬱なる表情を帯びるのである。

飲料の濫用はこれよりも影響が少ない、併し家族を扶養するために必要であり、旅行及び競技の如き智的の健全なる快樂を與へる金錢を、麥酒や火酒や葡萄酒の爲めに費消する人の多きを諸君は知らぬ筈がないと予は考へる。醇良なる酒は宴樂の際の饗應に用ふべきものである。アルコールは日常生活に於ては、よし用ふるとしても、充分量を節して用ふべきものである。併しある男女は之を切望するやうになる。彼等は意氣銷沈して、少量の興奮劑を要求する場合に、必要なだけの休息をして、然る後驟然活動を始めれば、氣分は回復するのであるが、さうはせずして、暫くの間心臓の活動を早める火酒の數杯を傾ける。併し酒精は食物ではない、其の反動として一層意氣銷沈するので、是に於て更に再び酒杯が戀しくなる。斯くの如くして男子或は婦人が、意志を弱め、智力を損ひ、健康を破



るが如き習慣に陥るのである。苦痛と病氣は皆この二つの原因から起るのである。

性の濫用は一層普通であつて、往々幼い小兒が其を弄べる中に殆んど無意識に開始せられることがある。これは、諸君が試みるならば理解し得らるゝやうな方法で、其の部分の極めて微妙な鋭敏な神経に反動を生ずる。精神上の努力は、思想或は行爲に使用せられる一群の神経に意識を集注する。暫くの間意識は其の中に居留し、増加せられた神経の瀉出が其の意識を強め、習慣が其を固定し、局部的發達を惹起す。このことは競技者、手細工人、文學者、及びあらゆる肉體的、心智的の活動に就て見るに事實である。常習的行爲は斯くしてのみ完全になるのである。

再々の性意識は其等の神経に注意を集中し、血液と神経瀉出の増加したる結果なる刺戟と不安を生ぜしめる。これは他の如何なることにも増して肉體に墮落の種子を播くのである。其に反して美しき者、眞實なる者、高尚なる者に對して與へらるゝ注意は、精神上に永遠の生活の種子を播くのである。この收穫は報酬としてではなく、確實なる結果として得られる、一は死滅に向ふ發達であり、他は永續に向ふ發達なるが故である。靈魂上の事實と肉體上の事實とは、其の結果に於て相反するものではない、本來が一なるが故に、斯

る結果を生ずるのである。天國は統一を缺くが如きことはない、且つ神は物質の世界を靈魂の世界と同じく造つたのである。

斯くの如き肉體の濫用は、精神上に至大の影響を與へるものである。絶えず性に關する事柄を考ふる少年少女は、全く非常なる程度まで精神を狹められる。彼等の個人的談話はこの一つの題目に限られ、而して彼等は物憂きまで、往々胸の悪くなる程繰返して其れのみ思ひ耽る。其が爲めに彼等の精神は生氣を失ひ、情緒は鈍り、従つて彼等は眞實の者、美しき者には最早頓著しなくなる。禮節と自尊心とを無視し、卑猥なる不潔なる言動を好む時は、次第々に斯くの如き行爲に引き入れられる。而して斯る思想に充ちたる心は、最早智的の、合理的の思想を受容せぬことは、恰も泥水で充たされた杯に清き水を充すと能はざると同じ道理である。先づ第一に汚れたるものを抛棄しなければならぬ。右に記載したるが如き汚しき思想を以て心を充し、やがて悪いと心づいた時は既に遅く、其の爲めに立身出世の機會を悉く逸する少年が夥しくある。總ての失敗の苦痛と恥辱は、彼自身が行爲と彼が習得し得べかりしことを無視したる直接の結果である。予は爰では性の濫用が人類に及ぼす深甚なる不幸の百分の一をも之を語る事が出来ぬ。併し第五章に記した



ることを理解せば、神が總ての進化を建設するに適當と認めたる美しき事實を濫用する時は、其の結果が如何に怖ろしきものなるかを自ら解し得らる、であらう。

五、多くの苦痛は律を破りたるが爲めに生ずる

眼の慾望は、眞に持つべき價值あるものに關する理解力の幻想である。人をして眞に偉大ならしむるものは、人の所有するものにあらずして、人となりである。

若し我等が眼の慾望によつて誤まらるゝことなくば、この眞理を我々の理解力が示すであらう。この語は一見奇異に思はれるかも知れないが、暫く考慮せば、極めて眞實なる言表なることが解る。單に「所有すること」は諸君にとつて何等特殊の價值はない、單に諸君が使用し得べきものを所有するは所有する甲斐があると云ふに過ぎぬ。如何にも喜ばしきことには、少年少女は概してこの點に就て成年男女よりも要領を得たるものにて、彼等は已れの使用し得ざるが如き所有物を徒らに蓄積し、其を負擔するが如きことは萬が稀である。彼等の心得違ひは通例其とは反對に、無頓著で物を浪費すると云ふことである。併し諸君が年長する時は、結局單に眺むるのみに過ぎざる物品を蓄積せんとする慾望が、不正に對して、従つて苦痛に對して與つて力あることを悟るであらう。宏壯な邸宅、眼を眩惑す

るが如き美服、善美を盡したる家具、寶石を鏤めたる裝身具等は、最も簡單なる最も質素なるものによつて達せらるゝ、目的以外に、何等眞の目的に役立つものでない。其は衝耀を目的とするものである。世には眞に稼いで得ることをせず、あらゆる邪まなる手段で、金錢や贅澤物を不正にも彌益、貪るが爲めに、苦しみ悩むが如き人が少くない。

これが爲めに雇主は労働者に對して充分なる賃金を支拂はず、労働者は出來得るだけ仕事を怠るが如き結果を生ずる。雇主は多くの金を支拂はずして充分働かせんとし、労働者は、餘りに働かずして充分なる賃金を得やうとする。其の結果として労働争議や烈しき紛擾が多く、悲哀と不幸と苦痛とを伴つて起る。時には凄まじき禍害が其の結果として起ることがある。譬へば近代の火藥は、其の製造に使用せられたる酸を除去するが爲めに、極めて念入に洗滌する必要がある。この洗滌充分ならざる時は、火藥は貯藏中に熱を生じ、其の熱が化合力の爲に増大して、自ら爆發する。數年前ある佛蘭西軍艦の火藥庫が斯くの如くして火を發し、僅々數秒にして艦は海面を被ふ一群の破片と化し、三百人の乗組員は殆んど總て海の藻屑となつた。これがある不注意なる職工及び出來上りし火藥を一々検査すべき分析者が義務を怠りたる結果なることは、殆んど確實である。良人を失ひ父に別れ



た總て者の悲哀と苦痛とは、不注意にも義務を怠りたるが爲めに生じたのである。

不注意及び怠慢が如何なる結果を生み出すか、其は何人にも解らない。無頓着なる學生は、恐らく何年かの後醫師若くは技師となつて、無能の爲めに痛しき苦痛と難儀を招致することが屢ある。虚偽の辯解の如きものによつてさへ、少年は往々同輩に迷惑を及ぼすことがある。幾度となく其の手にかゝりたる教師は、眞實の辯解をも疑ふやうになるからである。而して疑はれる少年は、自己又は他の者が常に眞實をのみ口にすれば、何人も彼を疑ふことはないとは考へないで、不平を感じ名譽を毀損せられたるが如く思ふのである。

仕事を充分念を入れてせざるが爲めに起る多くの苦痛は、我等が他人からして貰ひたきやうに他人に向つて爲すこと、及び世の中のある地位を充分に充さんと云ふ願望によつてのみ避け得らるゝことを世人に示した。少年が將來何になるがよきか皆目解らぬが、樂で備かる仕事がいと云ふのを屢、耳にした。其に就て考へて見れば直に解る通り、これは我よりは一物をも與へずして、取る物だけは取らうと望むのである。之は大なる間違で、骨を折らずに金の儲かる譯がない。斯る事に對しては宜しく身心の訓練をして置かなければならぬ。然らずんば自ら求めて苦痛を嘗めるやうなものである。

最後に出て来るのは生の驕慢である。我等は誰しも強くなりたい、誰しも權力を持ちたい、誰しも賞讃を好むのである。我等が右の如くならねばならぬと云ふは決して間違ではない。併し之も亦勞して得なければならぬ。而して其が得られると、更に他のものを支配し、尊大に、氣儘に、専横に振舞ひたいと云ふ誘惑が来る。これも亦、苦痛の種となる多くの不正、多くの不公平の根原である。歴史が教ふる大教訓の一は、濫用せられたる權力は、大なる憎悪と野蠻なる戦争を惹起すと云ふことである。

一個人或は一黨派に屬する者が權威を濫用することが、世の紛擾の最も多き原因である。律の原則は正義即ち人心によつて正しきことを認識するにある。完全なる正義と完全なる眞理は神に存する——この兩者は人間が考へ得る如何なるものとも關係ない、而してこれが人間の靈魂及び幸福發達の條件である。律は、與へられたる場所及び時に於ける多數者に共通な正義の認識から出發する。併し多數者と雖も不正を正義とすることは出来ぬ。律は、其を永續せしめるには、正しいものでなければならぬ。而して小人と野心家はこの事實を覺ることが出来ない——彼等は、何人も絶対に正しいものはないと云ふ事實を無視して、己れが專政君主たらざるべからずと主張する。我等は他人に讓歩すべき場合、賢明な



りと信ずることに對して斷乎として動かぬ場合、如何なる困難をも忍んで決して屈してはならぬ場合をそれぞれ辨へて居らねばならぬ。而して若し我等が他人の利益は之を助け、己れの利益に就ては讓歩するやうにせば、概して誤なく事を決することが出来やう。

世の苦痛の中最悪の者と雖も、此等の三大感情群を賢明に指導し支配することによつて、避け得られるであらう。勇氣、自制、及び親切、此等の三つは苦痛を避け得る賢き手段である。

### 六、科學の起源としての苦痛

併し尙ほ其の他に苦痛の演ずべき役割があるが、これは肉體生活と分つべからざるものである。即ち其は勇士的行爲の起源である。苦痛がなければ、勇士的行爲はあり得ないのである。

苦痛は亦科學の起源である。我等總てが學ぶことを愛したならば、我等の人格を發達せしめるに苦しむ必要はないであらう。諸君は知らんが爲めに學ばんとするのであつて、怠惰と無智の結果を怖れるが爲めでないか否か、己が心に問うて見られよ。若し「然り」と云ふことが出来るならば、諸君は既に明智に達する途上にあるのである。併し人間が發達の

ある程度に達するまで、安樂である限り、何者にも頓著しないのは、不幸なる事實である。野蠻なる部族は、始めは呪文に依頼して、收穫を祈り、病氣を癒し、敵を呪ふのである。彼等は次第に事物の原因を覺り、是に於て農學、醫術、戰爭が起る。彼等が文明の民となれば、彼等の潔白と慰安の標準は改善せられ、貧苦を避け、一層多くの慰安と満足を得んと望む。彼等は事物の原因を様々の部類に分類する、工學と物理學は斯くの如くして生じる。一層後に至る時は人間は自然の働きを發見することに興味を感じ、斯くの如くして、知識の爲めに知識を求め、其を得んが爲めには喜んで困難を忍ぶと云ふ眞の科學が開かれるのである。

鍛冶屋の子僧なりしファラデーは、仕事のすみたる後、己れの貯へた蠟燭の燃屑の光で、慰み半分讀書したが、遂には王立學會ロイヤルソサエティの講師となり、發電機ダイナモの原理を發見した。數千人の人を健康に使備し、瑞西及び那威の如く全國民の富を造る、近代電氣工業の總ての大なる利益は、この發明から生じたのである。ある人は、若し彼が研鑽を中止し、彼の發見の改良に従事し、彼の發明の特許を得たらんには、巨萬の富を得らるゝであらうと指摘した。

「あ、！ 私は其處こゝを居る暇がない。」とかの眞に偉大なる人が云うた。これこそ



眞の科學者氣質であつて、己れの位置に甘んじ、己れの仕事を樂しむ人である。

併し右の如きは我等の大多數の天性ではない。我等は地位を得生計を營むやうになると、正義、慈悲、眞理等は望まずして、己れの光榮、己れの感謝を過度に欲求する。即ち我等は未だ其を得ない中に、其の原因より生ずる結果を削除せんと努める、而して生産的の事業に依らずして富を、自制をせずして健康を、忠實を盡さずして名譽を、功績も無きに幸福を得んと努めるのである。

### 七、因果の法則

我等の自ら意識する意志は、人間界が自然界と同じく、秩序ある幸福の光景を未だ呈せざる以前から、物理的世界に充満せる聖靈と一致しなければならぬ。又我等の心中に在る自ら意識する意志はこれを自由に行ふに相違ない。我等は善惡を選擇する力を有する。併し我等は全能の創造的意志を撃破することは出来ぬ。神の創造的意志は、急がず休まず其の目的に向つて進んで行く。恰も重力或は化合の法則が原子に固有せるが如く、正邪の法則は人心に固有のものである。而して正と邪とは其の結果が幸福なるか苦痛なるかに依つて知られる。我等は獨力にて其の目的を遅延させることは出来る。其の道を長く困難なら

しめることは出来る。併し我等は靈の進化を變ずることは出来ぬ。死は動物界に於ける進化の方便である——弱者及び無能力者は敵の犠牲となる。苦痛によつて教へられる所は極めて少ない故に、苦痛は殆んど用ひられぬ。人間は結果を記憶し記録することを得るが故に之とは趣を異にする。結果の記録は人間進歩の手段である。總ての歴史、總ての科學は、人間の眞の經驗の記録に過ぎぬ。

併し苦痛によつて習得するには長き時間を要する。幾多の帝國が同じ理由のもとに興り且つ滅びた。戦車に駕して敵の上を馳驅し、無益の征服の表象なる切斷したる手を受領しつ、あるラメッセスを見よ——王の姿は其の偉大を象徴する爲め敵の十倍も大きく描かれてある。アレキサンダは希臘の武器をマセドンからガンジス河に運搬し、全國民を己れの驕慢の奴隸たらしめた。羅馬の貴族は奴隸を以て邸宅を充した。此等の奴隸は單に主人の田畑を耕し、遊興を助くるのみならず、農園を管理し、收穫物の販賣も司るので、つまり彼等は商人、製造者、醫師でさへあつた、但し彼等の所得の全部もしくは大部は主人の有に歸するのである。羅馬人は、希臘の没落は徳性の衰へたるが爲めなることを充分明かに認めた、併し徳性の頹廢は奴隸制度と放縱の結果なりしことは認めなかつた。



因果の法則によつて世界に與へらる、教訓が今一つある。遊惰なる貴族と快樂をのみ事とする平民とに充ち、金銀穀物美酒絹布奴隸に飽満したる世界の富の女王羅馬は、北方より來れる偉大なる自由民族の劍戟の前に崩壊した。其の北方民族も勇氣、掠奪、頽廢、衰亡の悲劇を繰返した——これ、理性と良心の聲を聽かざる者が辿つた長い長い苦痛の道である。

人間の本性に就て最も痛ましきことは、我等の大多數が、成功し幸福の境涯となるや否や、己れよりも不幸なる人々の困苦に對して無情にも冷淡なる態度を示し、斯くして我等は苦痛によつてのみ同情を學び得るものなることを示すにありと予は考へる。非常なる心痛を覺えたる時、始めて他人に心を傾め始める。何故に其を苦痛を味はざる時に爲さぬのであるか。

この世に於ては、正しき行爲によつて大に其を輕減することは出來るけれども、何人も全く苦痛を避ける譯には行かぬ。諸君は未だ眞にこれを知らぬ、諸君の両親と教師とが、諸君と諸君の犯した過誤に伴ふ苦痛との間に立つて居るので。斯の如く過誤の結果なる苦痛は實に小なるもので、氣象鋭き勇ましい少年はよく之を辨へて居る。

#### 八、苦痛は人格を發達せしむ

併し如何なる人格も苦痛なくんば完成せられぬのであるから、諸君が幾分の苦痛を味ふは確實である。諸君は痛苦を忍ばねはならぬこともあらう、失敗して意氣阻喪せぬやうに努力することもあらう、不幸或は惡意の犠牲となることもあらう。恐らく諸君は己れの過失の結果苦痛を感じることがあらう。右の如き苦痛に襲はれたる場合には、徐ろに其の眞の原因を省みよ、さすれば諸君は其が概して、知りつ、或は知らず、己れの行爲によつて、ある律を破つた結果、然らずんば方法宜しきを得れば其の苦痛によつて矯正し得べき諸君の人格中のある缺點なることが解るであらう。而して若し其の原因が諸君の怠慢もしくは無智にあらざること明かなる場合には、其を勇氣、忍耐、剛毅に到達する手段と考へよ。金が火にて試みらる、如く、心は苦にて試みらる。而して若し諸君が明かに他人の自發的の惡意によつて苦痛を感じしめらる、場合には(斯る場合は稀であるが)、諸君の苦痛は、總ての人類は一であつて、若し一人が苦痛を感じれば、他の總ても同時に苦痛を感じると云ふ有益なる事實から發するものなることを想起せられよ。若し然らざれば、我等は分離せる原子であつて一の實體ではないであらう、而して國民的發達は協力に依り、協力



は相互の好意に依るものであるから、國民的發達は不可能とならう。我等が先見し、寛恕し、最大の結果に向つて働く氣質を養ふには、我等の行爲の結果が單に我等自身に止まらずして、必ず遠く波及するものなることを覺らねばならぬ。他人の困苦に同情し、其を救はんが爲めに能ふ限りの盡力をする辭をつけよ。さすれば九十まで生きることも、世の憂さを感じることはあるまい。諸君が病氣、失敗、惡意等に襲はれざらんことを祈る！ 併し諸君が様々の苦痛に襲はれた場合に、諸君以前の人々が、如何にして悲哀と苦痛に耐へ忍んだか、其を思ひ浮べられよ。諸君を襲ふ苦痛は皆人間に共通のもの、みである。而して神は信義あるもので、諸君に耐へられぬ程の試練を受けしめることはなく、反つて其の試練によつて、其に耐へ得る如き遁道を造るのである。

併し如何なる試練を免れるとも、諸君が己れの愛する者の生命なき姿の側に立ち、愛を語りたる唇、常に他人に力を貸したる手が、今や死んで冷やかにされるを見るが如き時が、必ず來るのである。其の苦痛が又の如くに諸君の體を貫いた時、自分は最善を盡さなかつた、すれば出來たのであるが——自分は自分に與へられた愛と心盡しに對して片意地と冷淡とを酬いたと云ふ如き考へを以て、其の創口に毒を附けぬやうにせよ。

眞實、死別の苦は、愛情あり、將來再び會ふことが出來ると信じて居る人々にとつて、償ふべからざる忘恩、取返しのかね徒費されたる機會、拂戻すこと能はざる粗略にしたる愛、此等のものに對する悔恨の辛さに比ぶれば、輕微なものである。己れの愛する者が死ぬるを待つて、然る後雪花石膏製の愛の筥を取出して其を壊す者が餘りに多い。彼等は、言語が深長なる意味を表はす時、又多大の喜悅と鼓舞と希望とを與ふる時には、己れの愛に就て沈黙して居る。友人が白玉樓中の人となると、彼等の唇の封は切られ、遅ればせの賞讃などには一向頓著せぬ耳に、熱烈なる言葉を公然と述べ立てる。「困難、誘惑、及び辛苦と勇敢に奮闘し、負ひきれぬ程の重荷を負ひ、他人の私心なき奉仕に對しては渾身の愛を傾けて生涯を送るが、しかも殆んど一言の賞讃も受けず、濃やかなる友情をも味はぬ人が随分少くない、然るに斯る人々が一旦この世を去る時は、多くの欽仰せる友人が集り、敬意を表するを惜まない。諸君の母の心に、彼女の試練を輕減する愛の慰藉を、與ふるやうに留意せよ。與へ得る時に與へ、最善を盡せ、しかしれば諸君の苦痛は、諸君が試練を受くる時、輕減せらるゝであらう。この苦痛の輕減は、諸君が其を考へずとも到來する、幸に苦痛を避けんとする卑怯なる動機から、寛大になることは不可能だからである。併し



諸君が寛大で親切なればなる程、他人に苦痛を與ふことも少なく、又己れに苦痛を與ふことも少なきは事實である。我等の悲哀の十分の九は、自ら及び互に招くのである。而して無智、利己心、失行等から生ずる其等の苦痛が、其等の過失の爲めに、智恵、愛情、及び正しき行爲に變ずることを止めると、暴風雨と變災、衰頹と死との盛に跋扈せるに相違なき物質世界に於て、肉體的な生活に離るべからざる苦痛の原因のみが残る。

各國民が其の光榮と名譽、其の藝術、其の理想を齎す、併し如何にしても不潔なるもの或は虚言を吐く人間は入ること能はざるかの天國に於ては、此等のものからの救助がある。而して愛の王が彼の榮光を以て君臨せる間は、何者と雖も彼の聖山を犯し破ることは出来ぬ。故に神は總ての涙と總ての非哀とを拭ひとる、最早死はないからである、肉體的な變災は不滅の靈に觸れることは出来ないで、従つて嚴格なる因果の法則の下に、次の約束が充されるので、

「復死あらず哀み哭き痛み有ることなし蓋前事すでに過ぎ去ばなり。」

## 第七章 神の默示

**概説** 神は我等の靈魂を一層善良ならしめんが爲めに、苦痛と歴史によつて教示する以外に、更に直載なる方法を用ふる。其は神の默示である。神の默示を正しく用ひたる者はモーセ及び豫言者である。豫言者の警告、神の地上の物語、讚美歌、其他を彙集して一卷となしたものが即ち聖書である。聖書中の物語は事實としては信憑すべからざるものが多い。其は一の戯曲と看做すべきものである。併しこの記録法は著音機の譜板よりも眞を寫すものである。眞實には三種ある。其の一は事實の眞實と稱するもので、有るが儘の事實である。これを否定すれば其は虚言である。第二は推測の眞實と稱するもので、數學上の眞理の如きものである。この種の眞實を拒否すれば錯誤である。第三は戯曲的眞實で、これは單に推論にては表はし得ざるが如き眞實を、繪畫彫刻詩歌劇等に表はすを云ふ。語を換へて云へば架空の文句にて深き眞實を表現するのであつて、この眞實に背反するものは「實の藝術」である。聖書は戯曲的眞實を以て記されたものである。舊約全書はヘブライ民族の歴史と傳説との混じたもので、其の歴史も正史にはあらずして戯曲として叙述せられたものである。神話傳説には必ず意義と核心とがあるべきもので、其が深く埋没し居らざる限り認め得らるるものであるが、聖書に含まれたる傳説の意義は明かである。即ち常に正義を行ふことが發達と力と喜悅を得る道なりと云



ふのである。聖書の歴史を簡単に記せば次の如くである。紀元前二〇〇〇年頃カルデア國にアブラハムなる者があつて一夜幻影を見た。彼は之を以て神の使命なりと信じ、即ち家を去り羊を追うて漂泊生活を營んだ。後に猶太民族の族長となつた彼は斯の如き牧人であつた。彼及び彼の後繼者の信じたる宗教は所謂神の前を歩むことであつて、即ち誠實、清淨公平で良心の命する所に従ふと云ふことであつた。戯曲的物語の發端に、良心の聲に注意し神の意志に服従するが繁榮の原因で大國民の起原であると記してある。これは永遠の眞理である。この事實を聖書には神とアブラハムとの契約と云ふ戯曲的形式に記述せられてある。これがヘブライ戯曲の序幕で、續いてヤコブの子孫が埃及に於ける奴隸生活、モーセに率ゐられて埃及を退去する場面などが現はれる。埃及を去りたる當時の猶太民族は未だ志操堅固ならず勇氣、訓練、神に對する信頼等を學ぶ必要があつた。これが族長時代の片影である。士師時代の猶太民族は未だ少年時代で、動もすれば惡風に従ひ易く、偶像崇拜、部族間の争闘と軋轢のみを事とする墮落時代であつた。これを統一し強固なる國家を建設するには專制的統治に依るの外道がなかつたのである。ダビドの如きは幾多の短所があつたものゝ、政治的手腕に於て卓越せる得難き名君であつた。併しこの國民的統一は永續せられなかつた。強制的労働を行ふこと餘りに甚だかつたが爲めに、遂に大分裂を惹起し、四百年の間内亂相次ぎ貧富の差は愈々甚だしく、偶像崇拜は一世を風靡した。恰もこの時に當つてバロヒンは先づ埃及を破り、破

竹の勢を以て猶太を一蹴し、大多數のヘブライ人はバビロンに拉し去られた。浮囚生活七十餘年、波斯のためにバビロンの征服せらるゝに及んで、許されて郷土猶太に歸還した彼等は、地上に天國を建設せんとの期待を有して居たが、其の天國は正義と好意とを基礎としたるものではなく、異教徒を壓迫し、侮辱と壓迫に對する復讐を試むべき其の目であつた。猶太民族の傳説、律令、豫言者の語を聚集校正したる舊約聖書の編纂はこの時代に行はれた。やがて基督世に出て、道を説いたが猶太人の多くは彼を救世主とは認めなかつた。彼等は基督の教訓とは大に異なるものを救世主の條件として求めて居たのである。基督の先驅者ヨハネは「天國は近づけり」と叫んで猶太人を驚醒せんとした、其の天國は決して當時の猶太人の考ふるが如きものではなかつた。天國は勇敢なる尊敬すべき男女の群で、其の中に在る時は最も強く最も幸福に最も善良に感ずるのである、即ち人類が神の意志を行ふ時天國は到來するのである。

汝の過失によりて死を求むる勿れ、汝の手もて破滅を身に招く勿れ。  
神は死を造り給はざりき、はた生きとし生ける者の破滅をば喜び給はず。  
神は生きんが爲めに諸々の生物を造り給へり、代々の世界は健かなりき、其處に破滅の毒なく、地上には死の國なかりき。  
正しき道は滅ぶことなれば。



一、神が意志を啓示する手段

創造力は、自由なる靈魂を一層善良ならしめんがために、苦痛よりも更に近道を設けて居ないであらうか。若し其の力が神であり、又神が愛であるならば、埒のあかぬ苦痛の教訓と看過せられ居る歴史の教訓に依る外、我等が其によつて強くなり勇敢になり自由になる結果の法則を我等が學ぶ道はないであらうか。

確かにある、其は神の黙示である。

この黙示は物語の形をとつて示されるのであつて、世界に就ての唯一の合理的説明は、其の中に偉大なる目的が存すると云ふことである、又富貴も權力も智力も、用法宜しきを得れば大なる價值のあるものだが、利己的の享樂の爲めにのみ用ひられる場合には有毒有害なものであることを、最も善良な人は常に認めたと云ふ一人種の思想及び傳説の物語である。

此等のものを正當に用ひたる人々は、モーゼ及び「神の僕」と云はれる豫言者達であつた。

二、これは律に従ふものである

「心を盡し精神を盡し意を盡し神に仕へる」は、つまりこの世には生き甲斐のある者が唯

一つあることを認めることであつて、其の目的とは即ち、美しき秩序正しき社會を組織する。自由なるが故に幸福、又信するに足るが故に自由なる律である。

如何なる科學者も自然の法則から脱することを望まぬ。科學者は重力の法則を無視して建築し、又針金の代りに綱を用ひて電力を送りたいとは思はぬ。科學者は己れの智力に依つて自然の法則を發見し、己れの技能に依つて其を指導して、以て快とするのである。如何なる競戯者も競戯の規則を破らない——競技をすること、眞の自由に干渉すること、は違ふのである。眞に賢明な人にありても同様である。彼は富の力及び自然及び人類の勢力を最大の目的——美しき秩序正しき世界を造る手助けに使用せんと望むのである。彼はこの目的を達せんが爲めには、先づ己れより始めて、秩序正しき且つ美しき心の人間を造らねばならぬことを心得て居る。彼は神の律を以てするに非ざれば、斯る人間の造れぬを知る、其故に其等の律は彼にとつて歡喜であり最も眞實なる自由である。故に「神の僕」てふ語は彼にとつては、恰も「勤務」てふ語の善き軍人に於けるが如き意味を持つて居る。其は名譽の稱號である、船舶を造り、聯隊を造り、或は學校を造り、幸福なる僚友の社會を造るものは、この律の中に含まれて居る自由である。其は又自然及び藝術上の總ての美



しき者、科擧及び宗教上の總ての眞實なる者、あらゆる善良なる者——強さと力の爲めに  
なる自己修養、事物の隠れたる原因を見得べき智力、世界に於ける最も偉大なる最も眞實  
なる最も美しきものなる無私の愛——此等の者に對する愛を意味する。其は又、總て此等  
の者を造りし偉大なる靈、我等を理解に導き我等の歩みを指導する偉大なる靈、彼は天地  
に充滿して居るが、我等の各に個人的の助力を與へること、猶ほ偉大なる太陽が個々の雛  
菊の成長を助けるが如き偉大なる靈に對する個人的愛を意味する。一個の人として神を愛  
し崇拜するは斯くの如きものである。

この黙示は、彼の指導に従つた人々の心に與へられた。彼等が己れの經驗を述べたる語、  
讚美の歌、祈禱に對する答、律に服従又悖戻した結果の年代記、豫言者の警告、世界の光  
なる神の地上生活の物語、彼の名前によつて教へたる人々の書簡、此等のものは悉く、正  
しくは神の語と呼ぶべき一卷の中に記録された。これぞ神の人類に對する使命である。

### 三、聖書の物語は信するに難し

予の少年時代には、この文句は神自身の語を書き取つたものであるから、聖書中のあら  
ゆる語は正しく眞實であると教へられた。年長じて後、予は斯ることのあるまじきを知つ

た、其の叙述が總て一致しないからである。即ち聖<sup>セント</sup>ジョンは曰く、「未だ神を見しものな  
し。」(約翰第一書第四章十二)又出埃及記第二十四章九には、ヘブライの長老のことを記し  
て、「イスラエルの神を見るに」とある。尙ほ其の他に文字通りには眞實であり得ない多く  
の事實がある——エデンの園、大洪水、バベルの塔、ヂョシヤとヂョナの奇蹟等は即ちこれ  
で、其他は詳細に述べる必要はない。予は今一層斷乎として此等の事實は文字通りに眞實  
ではあり得ないと云ふ、少年の時に予は事物が斯くの如く起ることはあり得ないと正に思  
ふたからである(勿論これは單に意見であつて、全く無價値であるが)、併し今でも尙ほ予  
は其等の記載は、世間周知の事實と變化せざる神の意志の表現なる自然の法則とに矛盾せ  
ることを認める。

少年の時予は、多くの兒童と同じく、其等の事實を疑つて右の如く云つたのである。予  
は次の如く云はれた。「斯る事を推論するは宜しくない、其等の事實は理窟を超越して居る  
ものである。神は己れの欲することを爲し得る。御身は爲し得られることを裁斷する譯に  
はゆかぬ。」而して予は己れの語が母を深く悲しませたことを覺つた。そこで其からは一切  
沈黙を守ることと定めてしまつたが、其の矛盾の爲めに、何の矛盾もない美しい物語や如



何なる時代の人々も眞理と認める如き意義を悉く看過した。久しき間予は全部を無視した。聖書は予にとつて無いも同然であつた。予は其の存在を忘れた。予は決して其を繙かなかつた。若し予が苟くも聖書を胸に思浮べた場合には、其は、左様に装ふ人はあるかも知れないが、何人にも眞に解し能はざる神祕の如く思はれたのである。

さて其は一の神祕である、併し難解の神祕ではない。而して若し如何にしてこの神祕が解かれたか其の手段を記述するならば、諸君にとり又予よりも遙かに賢く、又其の仕事に就ては當時の予が全く知らなかつた學者や學生諸君にとつて、幾分有益であらうと思ふ。諸君は、予の述べる事が、諸君に適するか否かを自ら判断しなければならぬ。此等の事は文法や數學のやうには行かぬものである、文法や數學は、教ふる者は全く正確に眞實なることを教へ得べく、又學ぶ者では、苟くも眼の見ゆる以上、同様に考へ同じものを見るに相違ない。我等が進むべき道を見やうとする時には眼を使用しなければならぬ如く、あらゆる者が己れの心を使用しなければならぬ。予は重ねて云ふ、聖書に關して何等かの決論に到達するが諸君の本務ではない、清淨で、正直で、誠實で、且つ勤勉になるが諸君の本務である。此等の四ヶ條をよく守り、又諸君が之を守り通せるやう神の助力に倚頼せら

れよ。さすれば諸君は己れの本務を果したことになるのである。諸君は興味を感ぜざる事に苦しむ必要はない。多分諸君は現在には興味を感じて居られまいが、將來は興味を覺えるやうになるであらう。併し諸君が若し其の程度まで讀まれたならば、實際に重要な事項に就ての諸君の觀念を淨化するよすがともならう。盲目的に事をなすよりも理性と知識を基にして正しく事を爲す方が常によいからである。我々は皆同種の正しい思考力、神は眞に存在すると云ふ同じ認識を發達せしめなければならぬのであるから、この特殊なる國民の發達の記録は、我等が自己の心中に同じ神靈の聲を聞き得る程度に達するまで、あらゆる指導者中の最良なるものである。

聖書は正しき思考力を指導するものであるから、行爲の指導者である。其は猶太民族が人身供養から「汝等は汝等の主なる神を心のかぎり愛し又汝の隣人を汝等と同様に愛すべし。」と言ふ金誠に至るまでの進歩の歴史である。

#### 四、聖書の物語は一の戯曲なり

右は精神進化の物語としての聖書の意義である。

聖書は一の主義或は議論として表現せられず、一の物語、戯曲——ヘブライ民族の戯曲



として表現せられて居る。この戯曲に表はされたる事件は六千年の長きに互つて居る。勿論脱漏も中々多い。單に幾人かの人々に就いて、しかも其の生涯の僅かに二三の事件のみを記してある。其等の事件は、總て彼等の道德的目的の爲めに選擇せられてある。強大なるバビロン帝國勃興に關しては殆んど記すところなく、又かの以士帖書の記されつ、あつた時に、クセルクセスが計畫した世界的大事件に就ては、何等の記載もないのである。其に反してアモスの如き何處の馬の骨か知れざる葡萄栽培者の警告は、其のみで亞摩士書の全部を埋めて居るのである。記されたる言葉は、多くの場合實際に發せられたる言葉ではなくして、其によつて生涯の主なる意義を傳達するものに外ならない。

今予はこの記録法が蓄音機の譜板レコードよりも眞に近き所以を説明せんとするのである。世には肉體、精神、及び靈魂に應じて三種の眞實がある。

一、事實の眞實。諸君は斯々のことをした、或はしなかつた。諸君は昨日斯々の場所に居た、或は居なかつた。磁石は鐵を吸引する。クリストフ・コロンは聖ポール寺院を設計した。此等は事實である。諸君の知れる事實を否定するは、即ち虚言である。

二、推測の眞實。此等は推論によつて建設せられたる眞實である。數學上の總ての眞

理及び總ての自然の法則はこの種の眞實である。此等の眞實は事實を基礎にし、事實を説明する、併し其れ自身推測、もしくは理性的の推斷である。斯る眞實の拒否は錯誤、誤謬、仕損じたる推論で虚言ではない。

三、戯曲的眞實。これによつて靈魂は、瞬間に、單なる推論にては表はし得ざるものを見得るやう教へられる。長時間に互つて退屈なる議論を聞はせるやうになるかも知れず、又しかするとも全く示すこと能はざるが如き善惡に關する眞實を、彫像、繪畫、詩歌、もしくは劇は諸君に示すことが出来る。

戯曲的眞實に背戻することを名けて「質の藝術」と稱し、眞實から邪路に導くものである。譬へばジャンヌ・ダルクを野卑なる魔法使として描きたる戯曲は、彼女に關する單なる虚言よりも深き影響を與ふる虚妄である。

沙翁の劇を繕いて、アジンカートの戦争前部下に對して試みたるヘンリ五世王の演説、シーザー暗殺後羅馬人に對して試みたるマーク・アントニーの演説、或はかのウルジー僧正が疲勞落膽の極、己れの廢頽せる生活と失墜したる權力をはかなんで試みたる演説を讀まれよ。



クロムウエルよ、野心を捨てよ。天使も其の罪によつて墮落したではないか。然るに神の肖像の人間が、何とて其を以て利益が得られよう。我身を大切にせよ。御身を憎む人々を大切にせよ。墮落は誠の敵ならず。尙ほ右の手に穩和なる平和を持して、猜み深き舌の根を抑へよ。おうクロムウエル、クロムウエル、俺が王に仕へた其の半分の熱心をもて神に仕へたならば、神はこの老衰した俺を敵前に曝すやうなことはまさかになんたらうに。

ウルジーは其等の語で眞に最後の斷定を述べたやうに思はれる。沙翁の筆になつた文句は、ウルジーの心情に就て眞實の觀念を與へるけれども、彼は確かに右の如き言を吐かなかつたのである。沙翁の作中には眞實も少くはないが、戯曲的眞實は遙に其よりも多いのである。ある二三のもの（譬へばチャヌヌ・ダルクの性格の如きは）戯曲的にも又歴史的にも虚偽である。

斯の如く架空の文句にて深き眞實を表現する方法を「戯曲的眞實」と云ふのである。

聖書は戯曲的眞實を以て記されたるものである。聖書は貧乏人や無教育な人間にも、科學者にも、學生にも、歐洲人にも又亞細亞人にも等しく、適當なる言語を以てヘブライ人の物語を傳へて居る。

聖書の記事は實に悠久なる年代に互つて居るのであるから、全部の物語を記録するは不

可能であつたらう。遺漏は極めて多い、又恐らく年代の正確なるものは極めて稀であらう。我等の生きける王なるイエス・クリストの語さへも、多分アラミア語で話されたのであらう。多年の後に其を聞いた人々の記憶から希臘語に翻譯され、更に後に至つて拉丁語に譯され、其後數百年を経て、拉丁及び希臘譯から英語に翻譯せられたのである。

舊約全書は傳説の原形から一層大なる變化を受けた。

併しながら聖書の精神は、我等の心中の神の生ける指導を除きては、世界中にて最も眞實なるものである。

舊約全書は歴史と混同せられたる傳説である——歴史と云うても全世界の歴史ではなく、ヘブライ民族の其である、而してこの民族を通して我等は我等の信奉する宗教を受けたのである。主イエス・クリストはダビドの子孫として生れ、聖ポールと他の使徒は猶太人であつた。彼等は舊約全書を聖書の原本とし、後に至つて其に彼等自身の著作が加へられたのである。故に神が己れの使者としてヘブライ民族を選んだと云ふことは、歴史的に眞實である。

併しヘブライの歴史は一の戯曲として述べられてある。而して其の戯曲は、彼等が我等



と同じ熱情を有し、同じ誘惑を蒙り、同じ試練を受くる人間なるが爲めに、我等の心情に適するのである。モーゼは、我等にも提供されて居る同じ二つの道を彼等に示した。其は即ち申命記の第二十八章に在るが如く愛と喜悅の道、悲哀と苦痛の道、云ひ換へれば祝福と呪咀の道、生と死の道である。

予は斯くの如きことを語り聞せて貰へなかつた。予は神がアブラハムやモーゼと語り、宴樂を焼き盡し、彼等の間に恐るべき蛇を送つたことに就て讀んだ時に、此等の傳説を眞の歴史であると考へた。而して若し其の命に違背する時は、火と疫病を送るが如きこの苛酷なる神は、甚だ恐るべきもので、之が愛慕せられると云ふことはあり得ないと思はれた。而して人間の如く人間と歩み且つ物語る神は、實際に眞實ではあり得ない氣持がされた。單純な無智な人間が、眞に心中にて與へられる指導は、神と相對して語ると同様に眞實なることを理解し得られるやうに、造られたるものであるとは知らなかつた。予は他の手段では不注意な強情な人々が眞に見、正しく感ずるやう指導することが出来ないで、神が悪事を行ふ者の上に眞に重き罰を加へると云ふ事實を、神話、傳説、もしくは全く架空の物語によつて戲曲的に表現することが出来るとは知らなかつた。

### 五、傳説の意義

議論を進めるに先つて、神話もしくは傳説の意義を諸君が正しく理解されんことを望む。希臘の船乗がジブラルタル海峡を通過した時に、兩岸の高き山を「ハーキュリーズの柱」と名づけた。彼等は大地の最外縁に達した、而して其の外は世界を圍繞せる大洋であると考へた。彼等は山頂に雲のか、れるを見て、此の山は世界の端にあつて天地を支持して居るのであると考へた。彼等は歸還して右の如く物語つた。其後になつて詩人が其の物語を戲曲化し、アトラス山を、天地を支持する「疲れたるタイタン」と名づけた。彼がパーシューズに向つてゴルゴンの首を示さんことを請ひ、其によつて己が身を石に變へて安息を得んとした顛末はキングズリの「希臘英雄譚」に就て見られたい。これは何等宗教的意義を含まざる傳説であるが、神話若くは傳説が発生する徑路を知るには絶好の者である。若し突止めることが出来れば、あらゆる神話傳説に意義があり又事實の核心がある。ある者は其の意義が極めて不明瞭である。本來の事實が餘り深く埋没して居るので突止められぬのである、併し聖書の傳説の意義は常に明瞭である。常に正義を行ふことが發達、力、喜悅——何者も之を取去ること能はざる喜悅——を得る唯一の道——豎琴と王冠の夢ではなくして、死



んだ肉から生きて發達する生命に現はれる強い自由な勇敢な靈の活動なる、永遠の生命に到達する道だと云ふのが其の傳説の意義である。我等は傳説の意味を了解すれば、其の發達の正確なる方法には重きを措く必要がない。

六、聖書の歴史

是より聖書の物語の概要を記さん。又後段に至つて種々の經典が纏められた顛末を述べて見たい。

西洋に及ぼしたる最も永續的影響は三の都市から來た——アゼンスは美術を、羅馬は法律と紀律を、ジェルサレムは宗教を與へた。この偉大なる榮譽はヘブライ人に屬するのである。彼等の歴史と豫言とは、紀元前二千年頃から現代に至るまで、否更に將來に至るまでも及んで居る。他の幾多の民族は絶滅した、併し猶太民族——亡國の民なる——は、尙ほあらゆる國土に判然と残存して、何人も否定すること能はざる豫言の眞理に對する永久の證人となつて居る。其を理解せんとするには、先づ以て其の歴史を明かにしなければならぬ。故に爰に掲げる各項の年代的順序を注意して讀まれんことを望む。

ヘブライ民族の族長時代

(自紀元前約二〇〇〇年至紀元前一三〇〇年)

我等が明瞭なる記録を有する最古の文明はカルデアに始まる。これは蒙古人種の王國で、アブラハム時代の久しい以前に、カルネ、ウル、アカドの如き大都市を建設した。其の國は二大人種——蒙古人種及びセム人種——の接觸地であつた爲めに、二元王國が生じ、あらゆる葛藤が自然の結果として起つた。アブラハムはセム人であつた。彼は斯る政治的生活とは全く關係なく、チグリヌ、ユーフラチス兩河の間に位するメソポタミアに今日でも見らる、如き土地に建てたる村落の一に、質朴なる村長の息子として暮して居た。このアブラハムは一夜幻影を見、彼は之を神からの使命であると信じたのである。この使命は三部から成立つて居た。

我は全能の神なり、汝我前に行みて完全たまたかれよ。我汝に示す土地に至れ、然らば汝を大なる國民となさん。



地上のあらゆる國民は汝に於て祝福を受けむ。

傳説に依るとこの幻影は三度繰返されたと云ふことである。

其に従ふには多くの勇氣と其の確實を信ずることが必要であつた。其の當時にあつても現今と同じく、實際父の家と確實なる前途の見込とを打捨て、心中の命令に従つて、異郷に漂浪する者は、非難と嘲罵の的になるのであつた。幻影を語るは易く、驚嘆するも易いけれども、其を服膺することは至難の業である。併しアブラハムは内部的の光明を信頼し、其は正しいものであると彼には思料せられた。彼は羊群を率ゐて南方の國に移り、牧草地を探ねて數哩づつ、移り住んだ。妻と甥とが彼に隨行した。後に猶太國民の族長となつた彼は、斯くの如く天幕の中に生活して漂泊する牧人であつた。彼及び彼の後繼者には、信條も僧侶も寺院も法律も與へられなかつた。宗教は神の前を歩むこと——即ち日常生活の事柄に就て誠實で清淨で公平であり且つ良心の聲に服従すると云ふ意味であつた。彼の傳記は傳はらないが、二三の挿話によつて、如何に彼が心内の警告者に服従或は違反したか、解るのである。

戲曲的物語の發端に、この良心の聲に注意すること、及び神の意志に服従することが、

繁榮の原因で一大國民の起源であると記されてある。これは永遠に眞實である、又よしんばアブラハムが架空の人物であつたとしても、矢張眞實であらう。世に永續する平和はあり得ない、我等の各々が神の道は最良である又善良なる結果を得んとて惡事を行ふは許し難いことなるを覺る以外には、他に人類間に好意の共通の根柢はあり得ないからである。敢然と正義を行ふこと、優しき慈悲を愛すること、斷乎として眞實を語ることに、これ人類間に一致と幸福を見出す唯一の手段である。平和と繁榮が、自然に且つ神意に服従する直接の結果として得られるは確かなる事實である。其の事實は約束の形式で叙述せられてある。其の約束と事實とは、創造者と被創造者との間の「契約」と云ふ戲曲的形式に造られてある。精神的の法則と避くべからざる結果によつて、氣高き精神が肉體を美化し、國民を發達せしめる眞の方法は未だ了解するに困難である。「契約」は最も質朴なる者によつてのみ理解し得られるものである。併しこの傳説が神とある特殊の人間との間に口頭契約が結ばれたことを意味すると想像するならば、其は大なる間違である。戲曲を歴史とするは即ち其を虚偽とするのである。其は偉大なる潜れたる精神的事實を戲曲的に表現したものである。



この契約は正しき行爲の基礎であつた、又今日でも基礎になつて居る。正しき行爲とは、つまり一方には聞いて従ふことであり、他方には繁榮を祝福することである。繁榮は恰も羊群又は牛馬の群の増加の如く、他の者を犠牲にしては決して得られぬものである。これは偉大なる永續する眞理である。正當なる行爲は確かに繁榮を齎らす。誠實は最良の政策である、若し總ての政策が單に誠實にして、決して其以上でないならば、我等は天國に近づくのである。同じ正しき行爲が總ての土地に於て繁榮を齎すことは、進化の蔭に隠れたる力の單一と公正との永久の證據である。他の證據は史上に表はる、神の手振である、而して我等の限りある認識に對して、豫言の成就ほど明瞭な證據は何處にも無い。アブラハムは一大國民となつた。彼に依つて地上の總ての國民が祝福せられた、其國民は聖書に依り又十二使徒の教訓によつて、他の國民より深く世界に影響を與へるからである。ヘブライ民族の歴史は唯一の眞實なる神の黙示を以て始まる。「聞けイスラエルよ！ 主なる汝の神は一なり。」之が幾多の時代を通して猶太民族の警語であつた、今日尙ほさうである。カルデアの神は、空氣の神、水の神、火の神、地の神の如く夥しくあつた。神は一なり。神は亦あらゆる者の前に正しきものとして表はされる。異教の神には有力なるもの、美しきもの、雄辯なるもの等があつたが、一として特に正しい行爲に與するものはなかつた。

これは神に關する眞實の觀念と誤れる觀念との最も肝要なる區別である。神は全宇宙を造つた、而して其を正義の爲めに正義に依つて造つたのである。

語を變へて云へば、生命なきものにも調和の内部の本質があり、生物には常に進歩する傾向がある。又總ての物質的自然は人間の奴隷となり、美しき高尚な民族の發達を助くべきものである。而して總ての者はかの神聖なる語によつて造られ、又造られつゝある。今を距ること四千年前歴史の黎明期に當つて、アブラハムが受けたる使命の本來の觀念は斯の如きものであつて、これは今日より見れば進化の内部的意義及び説明と見ることが出来る。傳説全體の根柢に横る意義は極めて明白である。又其の形式は神とアブラハムとの個人的契約の如く記せる一の戯曲である。我等は皆天の父に對して個人的關係を結ぶを難事と考へる、又正しき行爲は實に我々にとつて進化の進路なるが故に、この形式で記されたのである。若し我等が其の形式の物語を文字通りに眞實なりと考へ、人間とエホバとの間の信すべからざる契約を想像するならば、我々は故らに至上の眞理に對して眼を蔽ふのである。契約は諸君及び予の爲めに存在する。我等の各自と神との關係は、地上に他の人間



がないかの如く個人的である。人間は神の靈感即ち正邪の知識によつて指導せられねばならぬ、人間は其によつて歩み其によつて完全なるものとならねばならぬ、又人間は繁榮と祝福を受け、苦しむよりは寧ろ喜んで精神的進化の目的地へ向上すべきものなりと云ふこの契約は、聖書の中に充滿せる觀念である。其は即ち天國——神意によつて生ずる一般的の祝福が天上に於ける如く地上に生ずる状態——の觀念である。天國と云ふ如き語は久しき後まで用ひられなかつた、併し之は、あらゆる人生問題を解決するため、創世記から最後の黙示録に至るまで聖書の全部を通して見出だされる。天國は地上に到来するであらう。確かに來るであらう。我等は各自、其を知ると否とに拘らず、補助すると妨礙するとの區別なく、天國の内部或は外部に己が身を致しつゝ、あるのである。

嘗て肉體の神祕に就て諸君の讀みたる所を想起せられよ、而して肉體が種類と機能とを異にするが孰れも同じ生命によつて活動せしめらるゝ、數百萬の細胞から成立つ如く、天國も能力と本務を異にするが各、神の生命によつて活動せしめらるゝ、數百萬の靈魂から成ることを記憶せられよ。あらゆる健全なる細胞は美と調和との要素であり、あらゆる不健全なる細胞は醜と病氣の要素である。同様に天國に於ては、あらゆる健全なる靈魂は尙更調

和の要素であつて、尙更不統一の要素ではない。

ヘブライ民族との契約のこの思想が實行せられた顛末、即ち埃及の女ハガールの子の排斥、イザクの平靜なる生活、彼の双生兒の争闘、強情なるエサウが家の傳統に背いてヒツタイトの女を娶りしこと、狡猾で利己的であるが、かの契約をよく服膺したるヤコブが、己が子の中最も秀でたる者の母となりし少女に對する愛の爲めに、ラケルへの七年の奉仕も僅か數日と思はれたること等を詳細に記述する餘白がない。併し諸君はあらゆる行爲の結果が成就すること、及び神の目的が其の全部を通して充されることを知り得らるゝであらう。

右はヘブライ戯曲の序幕である。次いで正しき生活の直接の結果として、ヨセフがファラオの下に埃及の知事に昇進したること、ヤコブの子孫が四百年間に多數になり、彼等が奴隸とせられモーゼに救はれたること等が場面に現はれる。時には傳説を生み出した事實の核心が明かに見られることがある、又絶対に突止められぬこともある。譬へば「水を血に變ずる」が如きは、其の事實らしき起源を容易に知り得られる。ナイル河及びインダス河の如き熱帯の河川は、醗酵しつゝ、ある沼澤地を通して數哩その流路を變ずることがある。嘗てインダス河に斯る事實が見られたことがあるが、河には赤味を帯びた半ば腐敗せる多



量の泥土を流下した。これを見たる人々は「水が血に變じた」と云ひ、埃及人の爲せるが如くに、河畔に穴を穿ち地を通して水を濾過した。若し出埃及記第七章十七—二十五の記事が文字通りに事實であつたとすれば、渴の爲めに悉く死んだに違ひないことは明白である。或は紅海に於ける埃及人の覆没である。埃及人は潮汐現象の顯著でない地中海に慣れて居た。彼等がイスラエル人を追跡した時に、海岸に廣き干潟あるを見て其の上を突進した。其の中に潮は再び満ちて彼等を覆没せしめたのである。勿論この事實は埃及人にとつては、ヘブライ人と等しく奇蹟と思はれたに相違ない。聖書を繙いて見よ。其の傳説の原形は出埃及記の第十四章二十一に暗示されてある、即ち其の奇蹟は強風が海を吹き戻したものと解釋されて居る。其の誇張せられた形式は二十二より二十七に至る文句に見出される。斯くの如きことは多年の後著者が神の保護の事實を發揮せんと望む場合には當然の戲曲的表現法である。若し實際に水が兩側に墻の如くなつたとすれば、神崇の苦き經驗ある者は、決して之を敢て横切らなかつたであらう。

物語全體が戲曲的である。種々の事件が後から／＼引續き起りし如く記されてあるが、恐らく事實はさうでなかつたらう。ファラオは斯る状態に納得しなければならなかつたの

であらう。占星術と卜筮は埃及宗教の主要なる特色である。而して若し蛙、蠅、瘟疫の如き神崇が折々に起り、モーゼが其を以て己れの民族の解放せられる前兆なりと公言し、而して埃及の占者が之を否定したとすれば、事件の徑路は充分自然である。

傳説の意義は其の形式よりも重要である。世界を指導する力が其の部族を解放して、其を一大民族たらしめんと欲したのである。其の戲曲は舞臺上に於ける如く、幾多の幕を相次いで示し、且つ舞臺効果を大ならしむるために誇張を施してある。其の誇張が故意になされたるものとは思はれぬ——神の加護の傳説を執筆した人々も、其の國民的物語を左様に解釋したのであらうが、彼等の戲曲的本能（これも亦無意識の心の活動であるが）が其の事實を斯くの如くに記さしめたのである。荒野に於ける四十年の漂泊に就ても同じである。埃及を去つた奴隸の部族は之を強壯ならしむる必要があつた。イスラムの旗印に追隨したアラビアの征服者を養成し、ヒクスの軍を殄滅したベドイン族を養成した其の同じ沙漠生活が、亦ヨシュアの戦士を造り出したのである。燃ゆるが如き信仰を抱き、殘酷で殺伐で飢渴と炎熱と長途の歩行に耐へた彼等は宛然今日の沙漠のアラビヤ人である。

埃及を去つて後、勇氣、訓練及び神に對する信頼、此等を悉く學ばなければならなかつ



た。故に出埃及記の第十六章、民数紀略第十四章及び第十六章に在るが如き物語を生じたのである。彼等は亦總ての人民、總ての民族に對して永遠に眞實なる行爲の原則——十戒の中に含まれたる正しき行爲の最小極限を習得しなければならなかつた。眞實此等は神の命令であつた、石の板の物語は此等の戒律が神によつて與へられたる事實を戲曲的に表はしたものに過ぎぬのであるが。

## 二

## 士師時代

(自紀元前約一三〇〇年至紀元前一〇〇〇年)

カナンの征服は、約書亞記を皮相的に讀んで想像する程徹底したものではなかつた、約書亞記には其の地に残存せるカナン族に就て屢々引照しては居るが。士師記の第二章三及び二〇—二三を見れば其が明確に解る。この時代は猶太民族の少年時代であつて——剛愎で氣儘で不慣の點が多く——未だ道義を認めて之を遵奉する程強きもしくは確乎不拔なる精神を具へなかつたので、動もすれば惡例に従ひ易すかつた。この時期は墮落と偶像崇拜の時期であつた。偶像崇拜なる語は少しく説明を要する。少年時代には彼等が何故に他の神

を崇拜せんと欲するか想像が出来なかつた。併し眞の理由は極めて單純である。此等のシリア的の崇拜は暴亂至極の祭禮で、淫猥なる裸體踊、大醉狂熱、怖るべき人身供養等、今日に至るまで阿弗利加の部族間に盛んに行はる、如きことが行はれた、羅馬の歴史家ストラボの云ふ所に依れば、フェニシアの植民地カーセーヂに於けるモロツク神眞鍮像の兩腕は、一種の爐の上に傾いて居る。生ける小兒をこの腕上に戴せ、下の火中に轉落せしめて以て之を犠牲としたと云ふ。斯の如き恐怖と猛烈なる刺戟は人心中に潜在せる野獸性を満足せしめたのである。諸君は兒童が折々裸體、淫猥、殘虐に興味を感じる傾向を示すを知らる、であらう。これは原始的本能への復歸で、此等の本能は文明と正義の初歩などは面白く思はぬものである。この時代のヘブライ人も平和の手段、神の律を面白からず思つた——彼等は自制の代りに刺戟を欲求した。彼等は道徳的法則の束縛を脱せんことを希望した。彼等が偶像崇拜に墮したと云ふは、主として斯る意味である。偶像を造るべからざる見えざる神を體現する困難はこれ所ではなかつた。

如何に公衆の意見なりとて、正しからざる者を正しいとする譯にゆかぬ理を覺ることが、靈魂發達の次の段階である。剛愎、個人的野心、淫蕩なる行爲、貪慾、不淨なる生活が、



多くの風俗と法律とで如何に其に制裁を加へても、争鬪と墮落てふ致命的の結果を生ずるのである。風習は人々が利己的享樂を事とし勞せずして金錢を得、他人を壓迫し制御するを許容するかも知れぬ。又法律は男子に婦人を弄び、同胞を壓迫するを許容するかも知れぬ。併し確實なる結果による應報を受くべき時代は確に來るのであつて、何人も之を阻止することは出来ぬ。

## 三

## 合衆王國時代

(自紀元前約一〇〇〇年至紀元前約九三〇年)

一家或一國民に屬する人々を一致團結せしむる正しき行爲の律を無視したる自然の結果として生じたるものは、部族間の争鬪と軋轢、衰弱と敗北であつた。合衆的統一は同一の信仰と宗教を有する人々の間にありては容易であるが、其の理想の一致せざる者の間に於ては不可能である。彼等は異なる風習を有し、従つて異なる目的を有するからである。十二部族に進歩することを得たる唯一の手段は專制的統治であつた。かの豫言者サミュエ

ルは彼等に警告するに斯る統治の不利なるを以てした。併し物語の示すが如く、國民統一を目的とする律に自發的には服従を望まざりし以上、其の變化は必要であつた。タビド及びソールに率ゐられて各部族は一の國民的團體に結合した。ダビドは、個人的短所もあり罪惡も犯したが其にも拘らず、(臣下の生命は主權者の意の儘であると考へた東洋では別段咎むべきことではない) 神の指導に對する絶対服従、無私の友情に偉大なる度量、及び非常なる寛大とを示した。彼は勇敢なる戰士、熟練なる將軍、天成の指揮者であつて、其の部族をシリアに於て未曾有の高き地位に達せしめた。詩篇の全部をダビドが作つた譯ではないが、併し彼の手になつたものは、指導者、保護者、及び友としての神に對する人間の個人的關係の眞情を吐露してあるので、太古より引續き同じ靈の指導を受けて、神の手に扶けらるゝ、同じ必要を感じたる人々の眞の聲であつた。

帝王時代になると、其の國民の年代記は尙ほ全く戲曲的であるが、一層確實なる歴史に近づいて來る。年々の事件を組織的に記録することは全然試みられず、單に各の王の特性を表はす如き著しき事件を記するに止まつて居る。舊約全書に就ては何等聞く所がないが、我々歐洲人に缺けて居る指導力としての神を信仰し、諸の事件を永く記憶する東洋



人は、偉大と明智との爲めにソロモンの名を尊敬する。併し彼が大を成すに至るまでには多大の壓制を加へたのである。東洋には強制的勞役と稱する極めて古い習慣がある。彼は建築工事の爲めに三千人の勞働者を就役せしめたと傳へられる。彼は壯大なる寺院と華麗なる宮殿とを残したが、天國を地上に建設することは到底不可能であつた。やがて彼は墮落の淵に沈淪し、異教の神を信じた。國民も其の道を誤つて居た——神の指導に従はずして、王の華美、軍隊組織、東洋風の專制政治に従つた。これによつて見れば偉大なる支配者も其の人民を偉大ならしめることは出来ぬ。たゞ性格の高尙なる者のみが高尙なる行爲を行ふことが出来る、而して邪念を抱く者が多ければ、従つて惡事を働く者も多い譯である。政府は之を阻止することは出来ぬ。

## 四

## 大分裂時代

(自紀元前約九三〇年至紀元前五二〇年)

ソロモンの子にして且つ其の後繼者が輪奐の美に於て父を凌がんとする野心を有し、其が爲めに益、強制的勞働を行ひ、愈、其が高じたるが爲めに、遂に大分裂を惹起した。分裂

は四百年の長きに亘り、其の間折々内亂が起つた。列王紀略と民數紀略は即ち當時の記録である。この二書は概ね一致するが、細目の點には相違があり又年代の全く一致しないのは自然のことである。當時の主要なる世相は偶像崇拜、偶發する改革、益、甚だしき富者の奢侈、貧者の壓迫、一方の徹底的征服に歸着せざりし内亂であつた。同時にバビロンの偉大なる武力が勃興して、近隣諸君を併呑しつゝ、あつた。バビロンは既に埃及と衝突し、カルチェミシュの決戦に之を撃破した。其の時猶太の一王は埃及軍に分遣隊を派遣した。以賽亞書、耶利米亞記、及び著名ならざる豫言者の或る者は、山雨來らんと欲して風樓に充つとも云ふべきこの時代を論じて居るのである。訓練されたる軍隊と、蓄積された富と、レバントを支配せんとする野心を包蔵し、しかも既にシリアに於て埃及に致命傷を與へたるバビロンが、奢侈と利己とに生氣を失ひ、蝸牛角上の争のみを是れ事とせる猶太民族と衝突し之を一蹴すべきは、神よりの特殊の靈感に訴へるまでもなく、ほんの常識に過ぎなかつた。紀元前七五年にバビロンが小亞細亞を征服せんとしたる意圖は、一九一四年に獨逸が歐洲を征服せんとしたる意圖の如く明白であつた。併し以賽亞書及び耶利米亞記に記されたる豫言的洞察の當れることは、其後の歴史で證明せられたのであつた。これは次の事



實によつて解る。

(二四四)

(a) 彼等は國民的健康の唯一の手段は各個人が正義を行ふに在りと云ふ永遠の眞理を民衆に説いた。犠牲や寺院の勤行や外國との提携は彼等を救ふに足りぬ、其の爲めには個人的生活を改善しなければならぬ。イザヤは曰く、「悪をおこなふことを止め善をおこなふことをならへ」然らば死罪と再生とが従ひ來らん。エレミアは神は犠牲を命ぜず、彼の前を正しく歩むを命じたと斷乎として公言した。

(b) 彼等は征服の將に來らんとするを公言し、民族的贖罪の時期の到來すべきを豫想した。我等が自然の原因と稱する者を神の眞接の行動と看做す東洋風の思想及び發表の様式に従つて、彼等は俘囚の境遇を神の怒、再興を神の宥怒と云つた。言表の方法は戲曲的であるけれども、これは本質的に永遠に眞實である。

(c) モーセは「汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我の兄弟の中より我のごとき一個の豫言者を汝のために興したまはんと云つた。以賽亞書はこの言を擴張して、猶太民族の救世主なる其の指導者の來るべしと一層多くの豫言を記録して居る。

この時以後へブライイ人中の善人の豫想はこの希望に集中せられたのである。

## 五

## 俘囚時代

(自紀元前約五二〇年至紀元前四五七年「キスの布告」)

嵐は遂に來た。先づイスラエルの王國、次いで猶太の王國がバビロニアの勢力の下に征服せられた。サマリアにはアツシリアの兵士が植民したが、彼等は猶太人の主なる家簇が俘囚としてバビロンに送れた殘餘の隣れなる婦人と結婚した。彼等は後のサマリア人の先祖となつた。ソロモンの聚集したる富は征服者の手に移つた。總ての階級の者が等しく掠奪を蒙る戰爭賠償金は未だ發明せられなかつた。而して掠奪せられたる比較的輕微なる國庫の損失は、國民の總ての指導者、總ての身分高き人々が俘囚とならざりしならば、其の回復は容易であつたらう。比較的貧しき者のみが地を耕す爲めに殘されたのである。「われらバビロンの河のほとりにすわりシオンを思出でて涙をながしぬ云々」の詩篇百三十七は確かにこの時期の作である。又詩篇七十四及び七十九等も多分この時期のものであらう。運び去られたる人々はエレミアの忠告に従つて、征服者の忠實なる臣下となつたらしい。彼等はバビロニア政府のために虐待を蒙つたやうには思はれぬ、併しながら奴隸の身分であり、又彼等は排他的根性と宗教的矜持のために嫌惡せられた。耶利米亞記及び以西結書には俘囚時代の初期の摸様が描かれてある。又但以理書及び以士帖書には後期を記載してある、併し後の二書は其の當時書かれたものではあるまい。

(二四五)



七十年に互る俘囚生活の終極を告げることが大なる變化によつて豫報せられた。バビロンと當時勃興したる波斯との間に戦争があつた。王の子にして軍司令官たりしベルシャザルは戦敗してメデス河畔に斬られ、バビロンは波斯王キロスの手に落ちた。エレミアの豫言したる七十年が殆んど終つた、又但以理書及び以士帖書には猶太の名士が波斯の皇族ダリウス及びクセルクセスの愛顧を受けて居る由を記して居る。

但以理書の中に始めて地上の總ての國民に天國を建設したいと云ふ望みが現はれて居る。其の豫言にはバビロン、波斯、希臘が滅亡し、羅馬帝國が次いで衰亡する後、神は決して滅ぶることなく全地を充すが如き一王國を建設すると公言してある。猶太人は絶えず之を期待して居た。この王國は一般的正義を基礎としたものでなければならぬ、又其は猶太人が異教徒を支配するものでないと云ふ豫言者の警告に留意した人は極めて稀であつた。彼等の大多數は其に反して、猶太人が異教徒を壓迫し、彼等が隠忍して時機の到るを待ちたる侮蔑と壓迫に充分なる復讐を試むべき日の來れよかしと心密かに期待して居た。彼等の天國に就ての觀念は、最も無情なる最も卑陋なる最も殘酷なる形に於ける彼等自身の優勢であつた。彼等の歴史が順調なる一轉機を劃する毎に、豫言者中の最良の者は其が

神意の地上に行はる、もの——正義、慈悲、及び真理の實行——を意味すると公言したるにも拘らず、この變化は神の恩寵と運命によつて生ずるものなりと考へた。

## 六

## 復 歸 時 代

(自紀元前四五七年至紀元前六年)

波斯のキロスは俘囚の猶太人に對して新政策を開始した。彼は猶太人をバビロンに留置するよりも本國に歸還せしむるを以て波斯帝國の利益なりと覺つたので、紀元前四五七年一選拔隊に歸國を許したのである。歸國の記事は以士喇書及び尼希米亞記に載つて居る。彼等は之を以て期待されたる天國の第一着なりと考へた。其の布告を得たる彼等が大歡喜の有様は以賽亞書第四十五章以下及び詩篇の百二十六及び百二十七によつて窺ふことが出来る。

併し猶太民族は嘗て受けたる恐ろしき教訓を忘れなかつた。豫言者の痛責したる嫌はしき偶像崇拜に再び墮落することはなかつた。豫言者の警告は種々の事實に依つて試みられ、全く其の眞實なることを覺つた。本國に歸還するや猶太人は直に殿堂の再建に著手した。



彼等はモーゼの律を行政上の律令とし、國家の法律とした。併し彼等の欲求する天國は正義と總ての者に對する好意を基礎としてのみ成立せられるものなることは中々覺ることが出来なかつた。彼等の爲したることの一是殿堂の再建にサマリア人の助力を峻拒したる一事であつた。二代の間此等のサマリア人は猶太人たるべく仕込まれた。憐れなる猶太人の母親は己れの知れる限りの律に従ひ全力を盡して外國人の夫によりて生れたる小兒を養育した。サマリア人はモーゼの書の譯文を所持して居た。彼等は猶太人として認められんことを切に望んだ。彼等は又喜んでエヅラの指導に従つたことであらう。彼等は一新せられたる猶太人の生活を喜んで援助するために來たのである。然るに彼等は輕侮して斥けられた、斯くの如く新たなる都市は憎惡を以て始められた。犠牲と儀式とが律に含まる、一層重大なる事柄——公平なること、賄賂を取らぬこと、虚言を吐かざること——の代りとなつた、而して宗教は正しき生活に關することではなく、信條と遵奉に關するものとなつた。

然しながら一大事業がこの時期に行はれた。猶太民族の古き傳説及び律と豫言者に關する書が丁寧に且つ敬虔の念を以て聚集せられたのである。二百年以上の間猶太の律法博士

の學校は總ての稿本を比較校合した。彼等がこの事業を完成したのは紀元前約一五〇年、綿密なる校訂を開始してから實に三百年の後である。是に於て猶太民族は承認せられたる原文——猶太聖書——即ち今日の舊約全書を所有することになつた。これより後彼等は一字と雖も變更するを許さざる程神聖なるものと看做されたる聖典を持つやうになつた。

この時代の間パレスチンは外國の知事の管轄する一の州で、最初は波斯に、アレクサンダの征服以後は希臘に屬した。希臘の壓制者に對するマカビー父子の版圖成功の後、高僧等は暫くの間獨立の支配權を再得した。併し基督の降誕前二百年は紛擾を極めた時代であつた。アラビヤ、希臘、埃及及び羅馬が猶太の獨立を脅した。希臘の藝術、希臘の遊戲、希臘の武力を嘆美し、あらゆる點に就て希臘を模倣せんとするサドカイの徒、嚴格なる保守的正教を墨守するバリサイの徒、この兩派の間に絶えず軋轢があつた。イヅミア人(アラビヤ人)へロドがオーガスタス・シーザーの引立によつてこの地に封ぜられ、彼の死後(紀元前四年)其の國は皇帝によつて彼の四人の遺兒に分與せられたが、長男の失政によつて猶太人はシーザーに向つて彼を彈核した。其が爲めに彼はゴールに放逐せられ、其の代りとして羅馬の大守が高僧の支配を管理し且つ一定の貢物を受けることになつた。これが路



加傳福音書の發端に記載されて居る形勢であつた。

天國が近づける由を宣言すべき長年豫想せられたる救世主の出現したる時に、何故に猶太人は彼を救世主と認めなかつたのであるか、其の理由を理解せんには、諸君は先づ豫言に就て少しく了解する所があらねばならぬ。

これは容易ならぬことである、諸君は豫言者とは將來來るべき運命を有する不可思議の事件を豫め洞察する者であると云ふ通俗の觀念を諸君の心から一掃しなければならぬからである。これも幾分は事實である。豫言者とは直に人の履むべき道を告ぐる者である。將來の事件を豫言するとせざるとは一向關係しないのである。若し諸君がこの事柄を充分理解せんとせらるゝならば、少しく綿密に推論しなければならぬ。

星辰運行の法則を辨ふる天文學者は、過去數百年間の蝕の數を正確に算出することが出来る。古代史の年代は往々この方法で證明せられる。天文學者は亦數百年後の蝕其他の現象をも豫め算出することが出来るが、これを我等は豫言とは云はぬ——これは事未來に關するのではあるが知れ切つたことなるが爲めである。さて天文學者が物質的原因を辨ふるが如く、智力は精神的原因を辨へて居るものであるから、總ての人事を、天文學者が蝕及

び季節の變化を生ぜしむる太陽及び遊星の未來の位置を豫め知り得る如く、確實に豫言することが出来るであらう。

神は事物の原因に就て斯の如き知識を有する、而して神と心智的に接觸する者は、折々又小規模に、神の豫知の一部を授けられるのである。總ての國總ての時代に斯る意味の豫言者があつた。諸君は第四章に於て既に二三の近代の例を讀んだ。而して猶太のみならず他の諸國に於ても、様々の豫言が知られて居た。其は迷信ではない、歴史的事實である。總ての古代宗教は主として前徴と神託を基礎にした。此等は豫言の形式或は變種である。若し此等の前徴を悉く虚偽——單に妄想及び迷信——なりと考へるならば、其は大なる誤解である。人間は多くの過誤を行ふ、併し若し其の助力が單に妄想に過ぎぬとすれば、デルファイの神託の如き神祠のために、代々富を浪費することはない。幾百人の人々が困難に際して助力を仰ぐべくデルファイに赴いたのである。

最賢の人と云はる、ソクラテスの如きも全く謹直なる態度で、己れの知識によつては知り能はざること告ぐる心中の聲に就て述べて居るのであるから、我等無學の身を以て斯る非難の餘地なき眞實なる人物の斷言する事實を取て疑ふに先つて、我等の生活と彼の生



活とを比較するが最も善いであらう。

聖書に記載せられたる豫言の全部が、ヘブライの豫言者によつてのみ爲されたものではない。バラムはヘブライ人ではなかつたが、彼は「主の豫言者」であつて、彼の語は眞實であつた。而して羅馬人が前徴の學校を、又埃及人が占星術の學校を有したるが如く、猶太には豫言者の學校があつた。勿論これは小兒の學校ではなく、中世期の修道院の如く、青年の學校であつた。此等の豫言者は随分夥しくあつて、各人の人格の高下に從つて、彼等の豫言には當り外れがあつた。イザヤの如き眞の豫言者の述べたとせらるる豫言の如きも總ては適中しなかつた。即ちバビロンは破壊しなかつた。其の都市は敵の包圍を受くるまでもなく波斯のキロスが軍門に降つたのであつた。のみならず其の後二百年マセドニアのアレクサンダ時代及び其の久しき後まで繁榮を極めて居た。

時には其の意義に就ては眞實なる豫言が、豫言者の個人的觀念によつて、其の戲曲的樣式に就て潤色されて居ることがある。譬へば世界と世界のあらゆるものを造りし神が、ミカイアがアハブに云ひたる如く、天上で會議を開き價値なき國民の王を誘惑し破滅せしむるため、偽りの靈を派遣すると云ふが如きは、全く信憑するに足らぬ。若し其が文字通り

に眞實なりとせば、宗教は憎むべき、人を墮落せしむべきものであらう。而して苛酷で殘酷で執念深き猶太人の性情は、次第々々にある豫言者をして(彼等が眞に先見した)天國は猶太人が他國民に殘酷なる復讐を試むることによつて建設せらるべしと期待せしめるやうになつた。其が殘忍なる俘囚時代に記されたることを思へば無理ならぬ次第ではあるが、併し其にも拘らず眞實でない。然らば基督時代の猶太人は如何にして眞偽を識別することが出来たか、又今日の我等は如何にして其を爲し得るか。其には二の特徴がある。

(a) 眞の豫言者は己れの利害に頓着することなく、又個人的の感情に捕はれない。アハブの豫言者等は我等の知れる事は王の御意に叶ふであらうと公言した——彼等は詐偽師ではなくして全く彼等の自信ある欲求から發せられたる語であつた。ミカイアは己れの利害を犠牲にして眞實を述べた。エレミアは足枷を掛けられた。アモスはベテルの爲めに狩立てられた。眞の豫言者は己れを偉大ならしめんとせず、又個人的の便宜を圖らぬ。エリア、エリシャ、アモス、エレミア及び洗禮のヨハネの如き眞の豫言者は、通例僧侶及び支配者に嫌惡せられる、彼等に對して警告を試みるが故である。眞の豫言者の云ふ所は彼自身には地位も權力も名譽をも齎さぬのである。

(b) 眞の豫言者は折々單に未來の事件を公言するのであるが、概して彼は事物の根柢と原因とを洞察するものである。

俘囚となるに先ち、北方にはバビロンの國運隆々たるものあり、南方には埃及の強國を



控へて居た時、イスラエルにとつて安全を求むる道は一に合衆國民となることであつた。瑞西の如き國ならば山上から敵を蔑視することも出来たであらう。併し友情は誠實なる人々の間にのみ存し、愛が利己心なき人々の間に存在し得るが如く、統一は主義の一致する人々の間にのみ存在することが出来る。而して人間が永久に一致することを得る唯一の主義は神の正義に従ふと云ふ主義である。眞摯と正しき行爲によつてのみ人は結合することの出来るものである。

故に猶太の王が明断と正義を實施し、掠奪せられたる者を壓迫者の手より救済せよと警告せられた時、神が世界の眞の指導者なることを忘るゝは理解力が缺けて居る爲めなること、術策と詐欺によつて急に富を得るは價値なきこと、指導者が己れの權威を失はざらんが爲めに眞實を口にせず人を喜ばしむる如きことのみ云ひ、人民も其を以て甘んずるは國民的自殺なることを民衆が警告せられたる時——總て斯の如き豫言は明かに善良なる或は惡しき主義によつて指導せられたる言明である。神は殿堂の保護又は正教の援助には干渉せぬが、エフライムの聖所シロが破壊せられたるが如く、エルサレムを破壊せんが爲めにアツシリア人を用ふるならんと警告は、單に未來の事件の言明と看做すべきものではな

い、其には證據が伴うて居る。斯の如き豫言の眞偽を判別するは難くなかつた。貪慾、贅澤、放縱に使用する目的にて不正手段を以て得たる利益、眞實らしき議論によつて眞理を蔽ふこと、飲酒、不淨、眞に正義の人々に對する冷淡なる態度、斯の如きものが人を不幸に導くことは之を覺るに難くなかつた。而して過去の歴史ですら、埃及の同盟が墮落せる民族を罪惡の結果から救ふこと能はざるべしと云ふ豫言の適中したことを示したであらう。物の眞相を見るを望み、又眞相を見んが爲めに己れの感情と僻見を除かんとする者は何人も、豫言の眞偽を識別することが出来たであらう。

判断力を使用する上にこれが必要な理由は極めて簡單である。豫言を盲目的に受容するは、よし其の豫言が眞實なるものとするも、單に迷信である。盲目的に意志を抛棄すれば、靈魂の退化を招く。總て神の我等に對する處置は理性と判断力の發達を促すものである。故にあらゆる豫言の歴史的適用は曖昧なるものなるやも知れず、其が實現せらるる後までは殆んど明瞭でないが、其にも拘らず其の戲曲的警告は好意を有する人々に常に理解せられる、其等の警告が繁榮及び衰亡の原因に關係して居るからである。



## 基督の降誕よりエルサレムの破壊まで

(自紀元前六年至紀元後七年)

さて之を天國に關する豫言に適用して見よ。洗禮のヨハネの時代にあつて虚心坦懐イスラエル人歸國の豫言を研究したる眞摯なる猶太人は、彼等の民族より出づべき救世主が地上に天國を建設すべきことのみならず、其の救世主が明智と理解力、憤慮と膂力、神の知識と恐怖によつて指導せらるゝことを理解したためらう。彼は必ず歸國は實現せらるべきものであつて、其は邪惡なる者が其の行爲を止め、不正なる者が其の思想を捨て、神の指導に従ひたるが爲めに實現されたのである。又この結果は永遠に平和、平靜、自信であらうと云ふことを認めたであらう。神は永遠に住んで總ての空間と時間とを充して居るのみならず、又悔悟せる者及び心の貪しき者と共に住んで人の精神を振興せしめるのである。

正義に依らずんば天國は來らずと云ふことは、斯る豫言の研究者にとつて極めて明白なことであつたらう。彼は其の事件の後まで救世主が人々に侮蔑排斥せられ、しかも永遠の

天國を建設することが出來た顛末は理解することが出來なかつたであらう。併し神は貧しき者に福音を傳へ、心に受けたる傷を癒し、盲者の眼を明かにし、過失の虜となりし者を救濟し、神の意に適ふべき年を宣言せんが爲めに油を灌がれたる者を認めることが出來た。彼は以前の事物の状態が最早記憶せられざる新しき天地の創造は、律を胸中に收め、物質世界と人間世界に於ける神の存在を認めて、正しい行爲に協力したいと云ふ欲求に充ちたる人によつてのみ爲し得られた、又爲し得られると宣言せられた次第を覺り得た。悪行を遠け、彼等が其によつて神聖法則と裁斷を守る新しき心と新しき靈との賜によつて國民中より眞のイスラエルの集るべきことを覺ることが出來た。

斯る讀者は彼の周圍の著名なる失政から、「主の日」は事柄の性質上神が迷信を信する者と不淨の者と信義ならざる者に對する、又不正手段にて富を蓄積し、他人の權利を犯す者に對する敏活なる證人となる審判の日でなければならぬことを覺つたに相違ない。彼は斯くの如き形式の宗教否定が神に對する眞の反對ではなく、眞の無神論は神に對する奉仕を以て無益となす感情、眞に幸福なる者及び成功者とは富み足れるもの、謂なりと云ふ信仰なることを覺つたであらう。人は正しき行爲と不正なる行爲、神に奉仕しつゝ、あるが如く



装ふ人と眞に神に奉仕しつゝ、ある人とを識別せざるべからざるは、正義の子が醫す能<sup>ち</sup>を供へたる翼もて昇る條件である。斯くしてのみ何時までも滅ぶることなく、大なる山岳の如くなりて全地を充す天國は建設せらるゝのである。彼は基督の模範と教訓を、神の宣言したる主義の眞實なるを信ぜしめんが爲めに豫言者等の發したる最良の語と比較せねばならなかつた。

基督がベツレヘムに生れたること、及びダビドの子孫なる處女から生れたることの故を以て、己れが救世主なりと主張しなかつたのは、多分猶太人が總ての豫言を文字通りに解したからであつたらう。彼がイサアの豫言の實現を仄めかしたのは、ナザレの會堂で我は心の傷る者を醫し、替者に見させん爲めに遣はされた者である、此録<sup>しよ</sup>れたる事は今日なんぢらの前に應<sup>こた</sup>りと公言した時のみであつた。彼は一度洗禮のヨハネを期待されたるエリアなりと公言した。併し彼は人間の間の祝福の原因として高潔と正しき行爲と好意との必要なることを教訓の基礎として、此等のことには重きを措かなかつた。

これ支配者が彼の主張を試みんとて求めた所であつた。彼等は實際何を求めたのであつたか。

彼等は眼に見ゆる理由以外に、神が猶太人の敵を虐殺せしむる奇蹟的救出を求めたのである。彼等は自己の得意と猶太民族の排他根性、酷薄、及び復讐に對する自由なる進路に神が奇蹟的干渉をなさんことを求めた。故に彼等は基督が彼等に公言した天國の道を考へることも欲せず又見ることも出来なかつた。同様に我等が宗教を日常生活以外のもの——専門とするならば、我等も其の道を悟ることが出来ぬであらう。如何なる語を以てするも徹底的に述べる譯には行かないが、我等は其が極小の者——原子及び細胞——を通して神が働くのであつて、其の集合せる特性が神の自然の法則であると云うて差支ない。野の百合は如何にして育つかを思へ。の一句は、今尙ほあらゆる草の葉が其に依つて場所と形に指導せられる、又あらゆる露滴が其に依つて大洋のあらゆる性質を小規模に有する其の神祕的な力に關する教訓である。

同様に無限小なる行爲が道德の世界を組成するのである。放縱と適度の快樂、勤勉と怠惰、冷淡と好意、正と邪、此等の一を選ぶべき所には、神の光榮に達する手段がある。あらゆる行爲は天國に對して愉快或は不愉快である。而してあらゆる正しき行爲は天國の原由となり、我等を其の位置に適せしめる。地上の人間が天國で爲される如くに神意を行ふ



時に、天國は來たのである。他の手段では天國は決して來らぬのである。

而してこれは總て狹義の教會の神聖なる意味ではなく、充分自由なる意味に於てある。宗教が信條に關すること、なつたのは宗教の禍である。天國は勇敢なる尊敬すべき天賦の才ある男女の幸福なる群であつて、其の群中にある時は我等は最も強き最も幸福なる最良なるものなるを感じる。此等のものは現在この地上にて天國に屬するものである。而して斯の如き人々が多きほど天國は現在の事實となるのである。あらゆる科學、あらゆる藝術、洞察と行爲のあらゆる形相は其の中に地位を有する。其は無限に變化があつて單一の型の性質ではなく、人爲的不自然な統一でもなく、健全なる生活のあらゆる形相を包括して居るものである。

#### 七、神の完全なる黙示

これは神の眞の黙示であつて、科學が我等に教へた所、及び後世に至つて發見された所と完全に一致する。其の指導に従へば、世界は其の悲哀と苦痛の十分の九を免れたであらう、其は世界を愛と喜悅の道に導いたであらう。この眞理は我等が主の日の猶太人に於けるが如く我等にとつても正しく同じである。肉體の慾望、所有獲得の慾望、及び壓制に至

らしむる驕慢を容易に無視せんとせば、靈に關する者は偉大なる實在なることを知らねばならぬ。我等は未來の報酬を得んと望むのではないが、將來喜悅の花が咲くに相違なき靈魂の生活を現世にて始めたいのである。

次章に於て予は地上に於ける天國の發達が平和と好意とを世界に齎す唯一の手段である所以を諸君に示したい。其は人類進化の成就であつて、各人は其に勤むべき役目があるのである。



第八章 天國の神祕

概説 人類が生活上の指導者として孰れか其の一を選ばねばならぬ道が二つある。即ち快樂の爲めに生きんとするか、義務の爲めに生きんとするか、語を換へて云へば自己の意に適ふ生活をすべきか、神の意に適ふ生活をすべきかである。國家の將來は其によつて定まるのである。我等が若し動物界を支配する進化の原則に立脚すれば、この世は血と涙の中に滅亡するであらう。我等が若し協力の原則に立脚すれば、國民的幸福の條件を悟り得るであらう。昔モーセは人民に祝福の道と呪咀の道を選ばしめたが、戦争は所有し獲得せんとする利己的の競争を選ぶによつて生ずる。人間が勞せずして有せんとする限り、喧嘩戦争は免れ難い。戦争の救済策は古來の問題であるが、今に至るまで完全なる豫防法の發見せられたものがない。其に關する會議も其の列席者が賢明誠實ならならざる限り効果の程は疑はしいのである。今回の戦争は基督教の失敗なる如く唱ふる人があるが、其は誤つて居る、失敗したるは寧ろ我等である。眞理は決して失敗するものでなく、我等は往々理解もしくは實行の點で失敗することがある。基督は新宗教を發明したのではない、規則を設けたのではない、單に人の履むべき原則を示したに過ぎぬ。規則は適川の範圍狭く融通の利かぬものではあるが、原則は時には逆説なることもあり、兩刀的で變通自在である。基督は古き律に反して個人的危害に對する無抵抗の原則を教

へたのである。基督は盲目的に己れの教訓を受容せよと強ひなかつた。彼は常に理解力に訴へた。彼の教訓の中心は、天に在る父の指導に従ふことが幸福に到達する唯一の手段であると云ふのである。彼は種々の比喻によつて天國を説明して居るが、要するに天國とは、總ての肉に靈が明かに姿を現はし、地が神の知識を以て充さるゝ状態を云ふのであつて、總ての者の心中に天國が建設せられた結果として、明白に外部的に天國が完成せられたのである。唯一の永遠の人間の實在は靈魂の生活と及び權利と正義は提携すべきものであると云ふ理想である。之を實現し得ると得ざるとは個人的性格の如何によつて定まる。而して其の性格は神の語は永遠に持續すると云ふ信念と分つべからざるものである。以上は天國の神祕に就て單に片影を傳へたに過ぎぬのであるが、諸君は將來予の述ぶる所の眞實なるを悟る時機があるであらう。勇敢なれ、心を眞實に清淨にせよ、神の指導を固執せよ。然らば來るべきかの光明を期待し得るであらう。

爾曹には天國の奧義を知おたことを予たまへど彼等には予へ給されば也。イザヤの豫言に爾曹は聽ども悟らず視ども見ず蓋この民目にて見、耳にてきゝ心にて悟り改めて我に醫されんことを恐れ、その心を頑し耳を蔽ひ目を閉たりと云しに應へり。

馬太傳

一、戦争と平和

歐洲の天地が古今未曾有の恐怖すべき戦争にて擾亂せられつゝ、ある時に、天國の到來を



説くは不思議に思はれるであらう。悲嘆に暮る、最愛の者を後に残して海陸に屍を曝した幾千萬の勇敢なる壯丁——生涯不具癱疾となつた幾千人の若者——父や良人を再び迎ふべき日のあらざる幾千の侘しき家庭——長き將來を灰色に塗られたる幾千人の美しき少女——饑餓に襲はる、幾千人の母子——全く荒廢に歸したる都市村落——三十年戦役以來比類なき文明に對して罪惡によつて残されたる憎惡の怖るべき遺贈——此等の恐怖は平和王の知食す天國の到來と如何なる關係があるか。

曰く大に有り。

此等の恐怖は神靈の教訓の受容を拒んだ直接の結果だからである。我等は愛と理性によつて習得しなければ、苦痛、總ての者が共にしなければならぬ苦痛によつて習得しなければならぬ、我等は其を承認すると否とに拘らず相互に部分を形造つて居るものだからである。

我々人類が生活上の指導者として孰れか其の一を選び得る道が二つある。あらゆる少年少女に其の選擇が提供される、諸君は快樂の爲めに生きんと欲するか、はた義務の爲めに生きんと欲するか——自己の意に適ふ生活を爲すべきか神の意に適ふ生活を爲すべきか。

諸君は己れの先見の明なき意志を信するであらうか、もしくは正義の爲めに世界を造つた永遠の明智を信するであらうか。

諸君の國家の將來は諸君が二者孰れを選びかに依つて決するのである。

諸君は動物界を支配せる進化の原則——生存競争、至適存續——に立場を定めんとするか。

若し然りとせば、諸君は残忍なる論法によつて弱者は強者の爲めに使役し虐使せらるべく——貧者は常に有力者の奴隷とならねばならず——武力、大砲、潛航艇、飛行船、爆薬、毒瓦斯は統治の手段で——己れの生命を輕んじ他人の生命は一層輕んずる超人が我等の望み得る最良のもので、我等に反對する者は悉く蹂躪し——最強者の律の外には世に何の律もない、至上の愛もなく死を征服したる基督もなく地を審判する神もないと公言するやうになるであらう。諸君は否でも應でも、粗野なる心情、遲鈍なる耳、外物のみを見て物質界を支配する眞の精神界の存在を知らざる盲目の眼を有するが爲めに、明智を聞きて之を理解すること能はざる人間の狀態に陥り、而して諸君の世界は血と涙を流して滅ぶるであらう。



或は諸君は協力の原則——總ての人間關係に於て道德的最適の手段——最も清淨なる最も眞實なる最も誠實なる最も賢明なる手段——人間は本質的に肉體よりは寧ろ靈魂であつて、相互の扶助と好意とが總ての眞の人間行爲の條件であると云ふ原則を諸君の指導者として採川するであらうか。

若し然りとすれば、諸君は等しく論理的に國民が幸福なる家庭で充滿しなければならぬこと、總ての者がよく有益に使用せられ、品格を下げ人を薄弱ならしむる物を作らず、有益で美しく身體を健康ならしめ精神を美化するが如き物を造ることによつて幸福なる家庭が生ずること、之は他人に對する嚴格なる公平と同情によつてのみ生ずること、總ての政府はあらゆる勢力をこの目的に指導してこれを可能ならしめる人間の共同動作でなければならぬこと、心及び靈に關することは偉大なる實在なること、神は人間の我儘を壓倒して眞實高尚無私勇敢なる總ての者の讚美に變ずるものなること、我等を造りしものは、如何なる理論によつても如何に我意を通しても、神の靈であつて我等自身ではない、而して我等は眞に感謝の念を以て神の門に至り、讚美を以て神の宮殿に昇るやうになること、これが國民的幸福の條件なることを悟るに至るであらう。

## 二、選擇

遠き古にモーゼは人民に祝福の道と呪咀の道とを選ばしめたのであるが、其と同じく諸君も之を選択しなければならぬのである。

よく選め！ 君が選擇は

短かけれども果しなし！

戦争は所有し獲得せんとする利己的の競争に其の基を發する。人間が勞せずして所有せんと欲する限り、之を小にしては喧嘩、之を大にしては戦争の起るは當然である。戦争の起るは病氣の發するが如きものである。先づ身體の細胞が相次いで衰へ然る後其の害毒物を排除せんとする自然の企圖なる病氣が生ずる——身體の全勢力が恢復てふ唯一の目的に捧けられるのである。國民に於ても同様で、個々の精神が相次いで或は贅澤、或は私慾、或は制御、或は自負等の害毒に襲はれる、暴力と邪惡とが次いで來るが、邪惡に卑怯にも同意するは戦争よりも悪いのであるから、更に一層惡しきもの、身に振りかゝらぬやう力を以て抵抗しなければならぬ。然る後に總ての人間に眞の邪惡の性質を示す恐怖が來る。戦争の眞の原因と其の救治策は四千年來の問題であつた。其は法律を以て規定せられ、



世界が始つて以來存在したる豫言者によつて宣言せられ、又主基督の兄弟は之を次の如く約説した。

「爾曹の中の戦闘と競争は何より來りしや爾曹の百體の中に戦ふ所の慾より來りしに非ずや。爾曹貪れども得ず殺すことをし嫉ことを爲ども得こと能はず。爾曹は求ざるに由て得ざる也。なんじら求てなほ得ざるは爾曹慾のために費さんとして妄に求むるが故なり。」(雅各書)

ある人々は戦争に對する戦争を主張し、世界は最早この恐怖に襲はるゝことなるべしと云ふ。彼等は國民會議により、或は人民に重大國務の管理を許して、或は仲裁條約によつて戦争を豫防せんと考へる。

此等のことは幾分の効果はあらうが、決して充分なる方法とは云はれぬ。

會議は其に列する人々が賢明で誠實ならば明智と誠實に對する偉大なる保護となる。他を出し抜かんとする欲望に充ちたる人間の會議は單に虚言と陰謀の網を擴げるに止まる。率直なる人をして、眞の論點を混亂し不正の勝利を獲得するを目的とせる法律家の言語の蜘蛛巣に陥るよりは、寧ろ暴力に訴へ且つ之を正しとするを望ましむること之より甚だし

きはない。歴史を知らざる人々が古の帝王の失錯を更に繰返して試みんとするのであるか。愛蘭に於て對立せる頑迷、偏狹、過激なるかの二民族が公平、賢明、或は正しき指導者となり相であるか。生産高を制限する規則を造り、而して廉價と豊富の唯一の手段は生産の夥多なるを悟らざる人々、怠惰なる労働者にも勤勉なる労働者にも同一の賃金を支拂ふ人々、資本と労働との間に想像的敵意を設け、國民的困迫の際に賃銀増額の罷業をなすが如き人々——此等の者が外國の正しき或は不正の熱望によつて定まる困難なる國家問題の指導を依頼すべき賢明なる指導者であらうか。若し正義及び洞察よりは寧ろ先見の明なき私慾の念が、其を作成し運川する人々の心を支配するに於ては、仲裁條約は他の條約以上に忠實に遵守せられるであらうか。

### 三、解決法としての個人的性格

斯る問題は少年少女にとつて難解に過ぎると云ふ者もあらうが、さうでない。これは諸君が是非解決しなければならぬ問題である。將來の世界は諸君のものである。我等年長者は隠退しつゝある。諸君は相續財産であり、力であり、將來である。而して諸君が個人的性根が唯一の救済策なりてふ大眞理を覺るならば、諸君は將來を我等が現代に對して爲し



たるよりも一層高尚なる社會の眞に光榮ある曙たらしむることを得るであらう。  
 或る人々はこの残忍なる戰爭は基督教の失敗を示すものであると云ふ。諸君は屢之を  
 耳にするであらう。

これ實に人を驚殺するに値する言で、我等は如何にしても斯る非難を受くるに耐へぬの  
 である。失敗したる者は實に我等である。眞理は決して失敗するものではないが、我等は往  
 々理解もしくは實行の點に就て失敗する。我等が失敗する一の方法は（漂泊時代のヘブラ  
 一人の如く）、我等の一部の者は規則なき生活を營み、成功せる不信實、快感を與ふる懶惰、  
 優雅なる不道徳を故意に尊んで、己れ獨りの律たらしめんと望み、他の者は（後期の猶太  
 人の如く）嚴格なる律を以て正義、慈悲、及び眞理に代らしめんと欲し、又他の者は一歩  
 進んであらゆる人に同様の觀念を抱かしめ、宗教は信條と遵守の均一を意味するものなる  
 ことを想像せしめんとするにある。更に他の者は神を忘れ神を無視すること恰も彼等が小  
 冊子と新思想によつて世界を新たに造り得るが如く、恰も基督が世に出でず、眞にこの世  
 界の支配者——王中の王、主の中の主でなかりしが如くである。

四、原則は規則にあらず

基督は何等新しき宗教を發明したのではない。彼は何等の規則をも設けなかつた。彼は  
 人の履むべき原則を確立したのである。其の差は規則は常に變化なしと云ふ點に存する。  
 「盗む勿れ」の規則は何等の理由ある反對を許さぬ、其は常に適用し得るものである。併し  
 原則は逆説なることが往々ある、原則は兩刃的であつて其を適用するには健全なる判斷（即  
 ち賢明なる靈魂）を要する。「我と憎ならざる者は我に叛く」は折々事實なることがある。場  
 合に依りてはあらゆる誠實なる人が一方に與すべき義務のあることがある、即ちあらゆる  
 誠實なる人は白耳義を破壊したる不徳の罪を鳴らさねばならぬ。快樂にのみ耽つて超然と  
 して其の問題に關與せざる各男女は、善の力に背くのである。この英國存亡の秋に當つて  
 故意に懶惰に耽る男女は母國に背くのである。更に又其の論點が疑はしく、誠實なる人が  
 決心し兼ねる如き場合、「我儕に敵抗ざるものは我儕に」者也の眞實なる場合もある。矛  
 盾しては居るが、各記載は其の時其の場所に於ては眞實なのである。

同様に基督は目にて目を償ひ齒にて齒を償へてふ古き律に反して、個人的危害に對する  
 無抵抗の原則を確立したのである。併し彼は他人の危害に頑として反對する英雄的行爲に  
 關しては一言も之を口にしなかつた。彼は國民的行爲の一般規則を定めなかつた。彼は鞭



を以て殿堂を瀆したる者を追ひ、「父よ彼等を宥せ、彼等はその爲す所を知らざればなり」と云ひたる其の同じ唇にて、「蛇蝮蛇の類よ如何なれば爾曹地獄の裁斷を免れ得るぞ」と云ひ、又次の如き最も峻嚴なる警告の語を發した。

「若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遅らんと意ひその朋輩を打撻きて酒に酔たる者どもと共に飲食し始なばその僕の主人おもはざるの日知らざるの時に來りて之を斬殺し其報を僞善者と同うすべし其處にて哀哭切齒すること有ん。」

權力は其の中に度し難き者に對する罰を含んで居る。神は彼の敵の爲し能ふ最惡事を黙つて忍んだ後、神に對して天地の總ての力が與へられた、又今も與へられる、而して彼は正義を以て判斷して戰爭をするのである。聖ヨハネがバトモスに於て起草した文句は比喩的なること勿論であるが、自分一個は其が戰爭に類似せざることに全く與すものとは信じられぬ。先づ苦しみ忍び、然る後永遠の王冠、永久に正義の爲めに抜き放たる、劍、邪惡を燒盡し虚偽を失はしむる炎が來る。

人は神を信ぜざるべからずと云ふ基督の要求は、今尙ほ屢其の解釋を誤り誤解する人がある。其の要求は其の前に置かれたる場合に心を開いて眞理を認めよと云ふことである。

基督自身、彼の誕生、もしくは彼の使命に關する理論を盲目的に受容することを要求するのではない、況んや理性の征服に於てをや。

其に反して彼は絶えず理解力に訴へて居る——「汝これを理解したるか」「汝等之を悟らざるは何故ぞや」と。若し我等之を理解せんと欲するならば、我等は常に彼の云ふ所は原則であつて、ある與へられたる場合に、孰れを適用すべきかを我等の判斷力に教ふるものなるを記憶しなければならぬ。若し彼の云ふ所を規則とするならば、其は人を誤るものもしくは不可能なるものとなるであらう。彼は實に一の原則は個人的暴力或は不正に向つて復讐をせざることであると云つたので、これは恰もテミストクレスが、アゼンス市民に對する彼の警告を打撃によつて妨礙せんとしたるユリビアデスに向つて「打て！ 併し聞け」と云ひたると同じである。併し彼は又理性と正義を無視する者は協同すること能はずと云つた。我等が彼の教訓を實行不可能なりと主張するは、我等に實行し得る眞の意義を發見せんとせずして、其等の教訓が迂遠なることを證明し、以て自己の態度を辯明せんとするからであらう。

### 五、基督が理解力に訴へたること



轉じて天國に關する基督の語を見れば、單に其の神祕が釋明し得べきものなるのみならず、彼が其の神祕を説明したることを發見するであらう。

彼は洗禮のヨハネが用ひたる「天國は近づけり」の語を以て己れの使命を開始した。ナザレの會堂に於て彼は己れは來るべき救世主の豫言を行ふものなりと發表した。彼は井戸の水を汲み居たるサマリアの女に又後には己れの使徒に、我は救世主なりと公言した。彼はカイアファスの前にも同じ事實を公言した、これがために直接十字架に導くことが出來ると考へたからである。彼は己れの弟子に天國は必ず來るであらう、何人も其の到來を阻止することは出來ぬと云つた。故に我等は今も其の征服の途中にあることを信ずる。而して我等は我等の周圍に見る者悉くかの契約に一致せるを認めるからである。

併しこの天國は、神の創造的活動と同じく、内部的原因の結果であつて、全能の力によつて外部から賦課せらるるものではない。「天國は爾曹の中にあり」其は總ての他の進化的變化に類似して居るのであるから、麥粉の中の酵母の如く地中の種子の如く規則を遵守せずとも生ずるのである。

彼の教訓の中心觀念はヘブライの族長に與へられたるものと全く同じで、我等の天に在

す父の個人的指導は、今この地に於て總ての者が行ひ得るものである、又この指導は人間幸福の唯一の手段なることである。

アブラハムの使命は「我は全能の神なり汝我が前に行みて完全かれよ」であつた。基督は曰く、「天に在す汝の父は完全なるものなれば汝も完全なれ」而して彼は其の手段を指示した、若し人神意を行はゞ……我儕來りて彼と偕に住べし」即ち神意を實行する結果個人的助力を得るのである。基督教の眞髓を悟れる聖オーガスチンは曰く、

「現在基督教と稱せらるるものは實際古人に知られて居た、人類發生の當初から基督の降誕に至るまでこれを缺いたことはない、たゞ基督降誕の時より、以前から存在して居た眞の宗教が基督教と稱せられるやうになつたのであつて、今日の基督教は即ち之である。以前には其がなかつたのではなく、後になつてこの名を得たのである。」

惡業の排斥が神の指導の祝福に達する第一歩なることは、洗禮のヨハネが生得權によつて彼等がこの特權を有すると考へて居た猶太人に向つて公言した所であつた。祝福は完成せられたる永續する幸福を意味する、而して基督の教訓全體は心中の神の鼓舞に服従することによつてこの幸福に到達し得られると云ふに在る。これが淨化と靈による新生である



——其によつて靈魂が迷妄から覺醒し、精神の無氣力を脱し、人生の有爲轉變を超越し、虚言を愛し或は吐く者なく、従つて平和と祝福との存在する社會を形造るまで力を發達せしめ得る、唯一の永遠に變化せざる手段である。

基督は彼が神の力によつて惡を放逐して、天國は實際其の時其處に提出されて彼等の取るに任せてある由を證明すると云つて居る。收税人も娼婦もヨハネが悔悛の教訓に接して、其の良果が眼のあたり明かにせられても其の使命の眞實なることを認めなかつたバリサイの徒よりも天國に入り易いと猶太人に告げた。心の貧しき者——即ち地上の富に執着せず正義の爲めに迫害を忍ぶ人々に對しては、天國は現に彼等のものである旨を述べて居る。彼が單に綺語として現在を用ひざること、他の六の至福に未來を用ひて居るとによつて解る。哀む者は福なり其人は安慰をうべければ也、柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければなり、矜恤ある者は福なり其人は矜恤を得べければ也、心の清き者は福なり、其人は神を見ことを得べければ也——此等の文句は如何にせば天國が地上に充分實現せられるかてふ觀念と密接の關係を有するものである。

### 六、天國の比喩

次にこの主要なる題目の種々の状態が、如何様に比喩に表はされたるかを見ることとせん。

一續きの比喩の最初に、彼は天國てふ語と其の使命とを、穀物を播くことに譬へ、其が種々なる人に受容せらるゝに對照してある。其の結果は現在生ずべく、其の奧義を受容したる者より生ずる生活の種類である。又畑に播かる、善き種子と、惡しき種子との同じ比喩の下に、天國の子と惡魔の子とが共に生長し、遂に後者が抜き捨てらるゝを述べて居る。前の比喩に於ては種子は其の語で即ち知識の萌芽である。之に於ては人間其のものが成熟する穀粒であつて、其の收穫せらるゝは來世の終りである。又彼は云ふ其の世界に發達するは穀物が畑に生育するが如く靜かにして内部の生命作用に依るのである。而して其は小さき種子が大木になる如く、外觀上些細なる起源——心情の變化より生ずる。其は社會に普及し其本性を密かに變化せしめつゝ、ある酵母である。

此等の比喩は總て天國の進化——其の發達の徑路——に關係のあるもので、又人間の生活を變化せしめる祕密の感化力として其を示して居る。彼は彼の弟子に大運動が權威を以て到來するまで彼等は死なざるべしと述べて居る。



彼は歸依者の中一層進歩せる者に説明した、又個人的感覺なるものがあつて、あらゆる天の賜物よりは寧ろ神の指導を求むる者にとつては、其は神の力であり、永遠に流る、水を永遠の生命——我等が「死」と呼ぶ時間と感覺の總ての事件を超越する物に形體を與へあらゆる者に打勝つ靈——に發達せしめる神の明智である。この光榮ある生命の微光を認めたる者は、隠れたる財寶を求めが如くに求める。而してあらゆる物を純粹なる汚點なき價値を超絶せる眞理の眞珠と比較して屑と看做すのである。しかもこの隠されたる財寶は利己的の所有物となることは出来ぬ、其を手拭に包めば失ふのであるから。又其は富の比喩によつてのみ考へらるべきものではない、其は人間にとつて内部的であると同時に外部的のもの——時の海を一掃する大なる網の如きものであるからである。又其は眞理の新局面を表はし、古きものを復活せしめ、家主の如く使用し得るものたらしめる智力である。

又未來の感覺なるものがあるが、其は因果の絆によつて現在に連結して居る。總ての内に靈が明かに姿を現はし、地が神の知識を以て充さる、こと水の海を被ふが如くなる時、其の時こそは天國が來たのであつて、總ての者の心中に其が建設せられた結果として、明白に外部的に建設せられたのである。總ての基督教國に於て幾百年間繰返されたる祈禱は、

この教訓に完全に匹敵する。

神は天に在す我等の父である——而して我等は己れの才能に従つて、天國を空中に在るものと思ふことが出来る、又宇宙を造り其を充す力の内部に存在する愛として考へることも出来る——孰れにしても其の結果は同じである。如何なる形式の下にも我等は神の名を崇め、其を神聖なるものとする。而して我等は神の意志が地上に行はれるに依つてのみ世界に到來すべき天國を欲求して居る。我等は日常肉體の糧と精神の糧とを求めて居る、又我等が宥すが如く宥恕を求めて居る。斯くしてのみ我等は天國の市民たるに適當なる資格を得られるのである。又我等は審判を受けざるやう祈禱する、併し我等が苦痛によらずして愛と理性によつて習得するやうになれば、次第々々に惡から救はれ、神が永久に知食す力と光榮に適當なる資格を得るのである。

### 七、正義の原則と宥恕の原則

併しながら中には次の如く云ふ者があるかも知れぬ、我等は如何なる時に正義の原則を適用し、如何なる時に宥恕の原則を適用すべきものであらうかと。之に對しては次の如く答ふれば充分であらう。「もし一日に七次罪を爾に犯して一日に七次なんちに對しわれ悔と



曰ば免すべし」併し後悔が言表せらるゝと否とに拘らず、若し我等が自己に對して加へられたる總ての危害に對しては後の原則、他人に對する惡事には前者に基いて行動すれば、殆ど道を誤ることはないであらう。これは既に紳士によつて爲されて居る。近き頃までは侮辱的の語に決闘を以て復讐するが名譽とせられて居た。現今は禮ある人は他人を誹謗する者は單に自己を傷けるに過ぎぬことを承知して居る。

争ふは伊達者、嘆くは阿呆、

誠の人は侮辱を忘れ、

口に出さぬ奥床しさ。

宥恕は個人的のことである、其は惡事を犯したる者が惡事を重ねるを豫防するに必要な策を止むるやうにと歎願せられることは出来ぬ。

#### 八、初期の基督教徒の話

其と同時に基督教の顯著なる發達が、默從の原則が大膽に行はれて居た時に起つたのは著しい事實である。最初の基督教徒は數も少く且つ身分低き者であつた。迫害を受けても救ふ者はなかつた——彼は黙つて忍んだ——而して基督を否定するよりは寧ろ圓形劇場で

虐殺せらるゝを望む確乎たる態度は、彼等を裁判したる者の驚異と嘆賞を動かした。殉教者の血は教會の種子であつた。人々は彼等が超自然力の前にあつて其の威嚴の前に敬意を表するを見た。眞理は酵母の如く擴大した——偉大なる實在の爲めに死ぬる此等の男女は其の最良の證據であつた。彼等に非常なる勇氣を賦與したものはそも何であつたか。

其は基督の復活であつた——世界が之を挫くことが出来なかつたあらゆる時代の高尙なる者、偉大なる者、眞實なる者に遭遇することを得る靈魂の生活が、眞に存在すると云ふ知識であつた。

基督が死に打勝ちたる理由は、死は出生と同じく自然なりと云ふこの確信であつた、而して勇敢なる者及び高尙なる者に對しては、死は眞實不滅の生命の門であつて、彼等は人間に爲し得ることは決して恐怖せぬと云ふことを初期の基督教徒は知つて居た。

されば彼等の模範は廣く傳播して遂には羅馬軍の半數以上が基督教に歸依するに至つた。此等の初期の基督教徒は、武器を執ることが基督教の趣旨に反すると云ふが如き愚なる謔語によつて苦しむやうなことはなかつた。彼等は今日の基督教の兵士と同じく、一端緩急ある場合には喜んで生命を抛つた。



狡猾にして政略的なるコンスタンチンはリシニアスと衝突したる時、好機逸すべからずとなし、進んで基督教に歸依し、既に改宗せる軍團の熱心なる援助を得た。彼が如何なる種類の基督教徒であつたかは、彼が己れの野心に反対する者を悉く無残にも死刑に處したること、及び洗禮が罪を洗去るものならば、罪を犯す機會のなくなるまで延期すること、最もよけれと説破して、臨終に至るまで受洗を肯ぜざりし事實によつて窺ひ得られる。彼が王位に即くと共に、基督教徒は富と權力を得始めた。私慾の爲めに基督教徒と稱する者が、眞の信者よりも遙かに多い有様であつた。

ついでビツボのオーガスチンが國家神の夢を以て現はれた——羅馬に於ては權威と力とが正義と眞理の同盟者にして且つ擁護者たるべしとの夢であつたが、四世紀の羅馬人は餘りに墮落して居たので其を實現することは出来なかつた。數百年の後シャーレマンに至つて其の觀念を實踐することが出来た。北海から地中海へ大西洋から黒海に及ぶ彼の帝國は教會國家提携の實現であつた。其の大臣は即ち僧正及び國境衛守知事であつた。其が爲めに中世の歐羅巴は悉く基督教の教化する所となり、個人的戰爭の渾沌状態の中に秩序を生じ、封建制度と騎士制度の創建となり、羅馬は諸王の法術となつたが、遂にオーステリッ

に於てブルボン家を以て終りを告げた。ブルボン家は羅馬帝國と同じく、人間の貪慾の爲め、權力を個人的利益に濫用し、永遠の原則を信條と政略に墜落せしめたる飽くこと知らざる利己心の爲めに滅亡するに至つたのである。

### 九、特質は靈魂と不死に在り

併し唯一の永遠の人間の實在は、靈魂と生活と權利と正義は提携しなければならぬて其の不滅の理想である。この理想を新しき形に改造するは諸君の任務である。併し其の實現は過去に於けると同じく、今日も個人的性格の如何によつて定まるのである。而して其の性格は結局世相は變遷しても、神の語は永久に續く——我等には各、死後の生活があつて、其の世に於ては正義が行はれ、愛が強く赫奕と君臨するてふ信念と分離すべからざるものである。

而して我等の前に存する生活は自然法によつて支配される、若し然らずんば我等は其を信ずることは出来ないであらう。其は奇蹟的新奇なる事柄ではない、其は極めて限られた意味に於ては別として未來の生活でさへない、肉體の無き新らしき環境に於ける靈魂の現在生活であるからである。靈魂は相互間に言語の必要がないと想像し得らる、相當の理



由がある。靈魂の思想は開放されて居る——靈魂は他から知られる如く己れも知るのである、彼等の思想の交換は大聲にて考へるやうなものである。

基督は常にこの力を有して居た——彼はパリサイの徒シモンの思想を知つた、而して開かれたる書物の如く人々の心を読んだ。我等の間にも現世に於て既にこの思想を洞察する力を有し始むる者がある。彼等は折々一瞬間に他人の心中を悉く看破することが出来る。予の親友にもこの能力を時々發揮する者があつて、予の未だ口に出さぬ思想に對して返答を與へたことがあつた。この能力は若し其が一般的であつたならば、賤しき男女に對する怖るべき試みであらう。併し我等が死後に赴くは正にこの眞理の官殿である。

諸君にして若し利己的な卑陋なる人間の末路が如何に怖るべきものを悟らんと欲するならば、デョージ・エリオットの「掲げられたる幕」を一讀せられよ。高尚なる希望と目的とを有する人々にとつては、其は大なる喜悅である。其によつて心の眞の本質を見る力を得其は眞摯と愛の最高の保證であり、其によつて我等は高尚なる人々と親密になることが出来るからである。偉大なる目的を有する靈魂間の斯る状態が、善に對して有力なる兄弟の如き關係に彼等を結合するは看易き事實である。

併し同じ法則は外部的暗黒と、邪惡を意識して光明に嫌ふ人々に對する顔の混亂である。彼等にとつては交際も友情もない。眞の友情が善良なる人々の間に生じ得る人間の狀態が其處で強められるからである。

一〇、「天國」とは何ぞ

故に我等が楽しんで待ち受けて居る天國は白衣と王冠と豎琴の場所ではない——此等は唯だ戲曲的の人物、無垢の正義、權利の王冠、及び讚美歌に對する今は廢れたる象徴に過ぎぬ。文字通りに解釋すれば、我等は決して斯る生存を欲しないのである。我等は己れの愛する者に會ひ、偉大なる家族に入り、新しき事業新らしき生活、強く自由なる新らしき活動に身を投じ、相共に王に奉仕せんことを期待して居るのである。

この書の此等の最後の部分を起草するは一九一五年の復活祭、正義の太陽が血と火と荒涼と死との赤き雲を通して昇りつ、あるこの怖ろしき復活祭の日であるから、予は敢て云ふ——天國を信ぜよ、其が爲めに働き、其が爲めに生活し、其が爲めに求めよ。狂的もしくは迷信的の熱心を以てせず、思想の不可能なる統一を意味する幻想を以てせず。氣質の異なる者は證據立てられたる事實に就てさへも考へ方の違ふものである。よつて調和



を計るが原則であつて、聯合よりも調和に妙音がある。各の美しき眞實なる觀念は天の旋律であつて、其の各が靈魂の生活なる多くの諧音によつて表はされるのである。而して有り得べき旋律の数は無限である。諸君のみが正しき思考の唯一の手段を有する、或は有し得ると決して考ふる勿れ。神の眞理は餘りに偉大であつて何人の心も、如何なる國民も之を把握することは出来ぬ。總ての欲望が知られ、總ての思想が開かれ、總ての祕密が隠されぬ天國に到達するまでは、各其の己れの一片を密かに祕藏することが出来る。總ての力が正義に用ひられ、世には普遍的の平和があり従つて死して再び蘇つた神、罪と死の征服者に對する普遍的の愛があるまでは、我等は働かねばならぬ、然り闘はねばならぬ。

一、天國——權力と正義との提携

天國！ 其が爲めに働く我々以外の者！ 我等の特別の叙述の形式を離れて科學的に眞實なる者！ 理想的な併し實行し得べき政策！ 珊瑚蟲が荒海の底から岩の塞を築き上ぐる如く永遠の律に基を定めて我等が堅固なる建築を助くるもの！ 我が同胞に奉仕することによつて愛し仕へるべき不滅の王者！ 總ての高尙なる人々の兄弟！ 人生の目的！

人間は物質的自然を充分に而して幾分差控へてもよい程に支配して居る。我等は熱鐵を捏ねる、電光を利用する、殆んど意の儘に新らしき機械、新らしき爆藥を製造する。而して悲しい哉！ 我等は此等の力を我等の同胞を滅ぼすために墮落せしめる、掠奪と竊盜の爲めにての力を用ひる。人間と自然との間には競争はない。我等にとつて生存競争は實際、高尙なる性格を生ぜしめる精神的原因を我等が知らざることに対する奮闘に過ぎぬのである。其は我等の怠惰、我等の不規律、我等の誘惑せられたる意志に對する奮闘である。若し我等が「先づ天國と其の正義を求めよ、然らば總ての者汝に加はらん。」とて語の完全なる眞理を悟らんとせば、我等はあらゆる家庭の義務を盡すべきである。さすれば世界の總ての必要なる仕事はよく誠實に爲されるであらう、而して我等は個人的健康と社會的平和と國民的繁榮とが必ず従ひ來るを認むるであらう、善の原因は惡の原因を壓倒する不斷の働きの中にあるからである。

この本質的の基督教は世界の病氣に對する唯一の救治策である。宗教の形式は其の實質がありさへすれば大した關係はない。本となる生活なくして性格の結果を得んとするあらゆる種類の政治的計畫は豫め運命の定まつて居る失敗である。而して彼等が階級の憎惡



しくは階級の利害に訴へると否とに拘らず、彼等が帝國、寡頭政治、ヂャコピン式革命、軍隊的專制、其の孰れを造り出すにせよ、彼等は「人の怒は神の正義を行ふ事をせざれば也」又「鉛の如き性格を黄金の如き操行に變せしめ得る鍊金術はなし」てふ永久の事實の例證に過ぎぬのである。

この永久の眞實、新契約は死より蘇れる基督が歸還したと云ふ事實によつて人間に確認せられた。我等若し基督の復活を理解し始めんとするならば、我等は己れの思想を聖トマスを信服せしめたる空虚の墳墓と實在的の肉體にあらずして、精神が全く肉體を支配して居る證據なる出現と消滅、物質的肉とは全然別物なる靈魂の本質に思想を集中しなければならぬ。其は最早肉體の中で調べられぬ、而して其に總ての天地の力が授けられた無限の基督の精神であつた。肉體の出現は彼の存在の標に過ぎなかつた。彼と彼の意志を行はんと求める心との接觸には眼に見ゆる必要はなかつた、今も無いのである。

羅馬帝國衰亡の種々の場面、ゴート族の支配、中世紀、近世國民の勃興、現在の科學時代、此等の歴史上の總ての有爲轉變を通じて、一の永久の眞理が持續して居る——發達の道、理解力を満足せしめる眞理、靈魂の祕密の生活は、我等の心中にある基督の性格の發

達であると云ふことである。この基督の性格は聖靈と一致して居るものであるから、我等の身分の如何に拘らず正確に正しいことを爲すのである。これは少なくとも「我は途なり眞なり生命なり」てふ基督の語の意義である。地上に平和を與ふるものは唯だこれのみである、好意を有する人間を造る正義と親切を行ふに當つて、種々の氣質に充分なる自由を與ふるものは唯これだけであるから。

「基督我が中に在り」と云ふはこの意味である。我等と神の創造的精神との關係は肉體の細胞と靈魂との關係に酷似して居る。其の靈魂はナイフをシースに刺すが如くに肉體に挿入されるのではないが、各の細胞の中に住み其を創造するのである。靈魂は細胞を離れて存在することが出来る、又實際存在するのである、併し此等の細胞は物質世界に其の活動を表はす。若し細胞が其の機能衰へる時は、悲哀と苦痛其に依つて生じ、細胞が健全ならば靈魂は喜悅する。

我等と聖靈との關係も亦斯の如くである。聖靈は我等に生命を與へる。聖靈の意志は、若し我等によつて爲されるとせば、世界の秩序と美である。我等の健康は我等の天の父の喜悅であり、我等の不名譽は神の子を再び十字架に釘て顯辱（おとしめ）とすることになるのである。



## 一、生の神祕に對する解答

これが予が諸君に説明し得る範圍の天國の神祕である。諸君の未だ理解し能はざるが如き、或は思考と注意とを費した後漸く之を了解するが如き神祕は多々あるであらう。但し若し諸君が眞に理解せんと欲するならば、愈々充分に理解し得るやう指導を受け得らる、であらう。諸君は諸君の心に浮ぶ種々の問題に直接の解決を期待してはならぬ。我等は基督が如何様にして來るか正しくは知らぬ。總ての豫言に對する如く、我等は其が實際に起るまでは、其の歴史的成就を見ないのであるが、併し其が何等かの手段で成就せらるべきこと、及び我等が人生の特殊なる位置にあつて正義の行爲によつて其を助勢し、不正なる行爲及び不注意によつて其を阻止しつゝ、あることは確實である。其の進路は眞の精神的法則によつて定められてあるのであるから、其が將來來ると云ふことは確實である。若し我等が故意に不正の行爲を持続するならば、各國民が墮落すると其を貶黜する抵抗すべからざる力に反して、自ら其を避けることになる。我等は外部の暗黒と不滅の靈魂に對して地獄なる内部的の火を慎重に選むやうになるであらう。

これは單に輪廓である、即ち諸君の力が發達する時は理解し得られることが多々存在す

る。天國の豫言を理解するは大山脈に接近するが如くである。遠方より我等は雪を戴ける峰を見る。其は一丘陵の如く見える。一層接近する時は、山脈の後ろに更に山脈のあるを見る。而して登れば登るに従つて愈々山の高きを感じる。豫言も亦斯くの如きものであつて、一の事件の如く見ゆるものが、實は時間の谷に距てられたる二三の事件なることの判明することがある。最後まで到達せざる中は、壯麗なる雪景、青色の氷洞、白水仙や青龍膽や總ての愛らしい高山植物にて被はれたる高地を見ることが出來ぬ。

天國に就ても亦斯の如くであつて、諸君は案内書の指導の正しきを認めるであらう。諸君は進むに従つて多く習得するであらう。予は諸君に單に原則を述べたに過ぎぬ——原則には變遷がない。其等の原則は諸君の両親が其に屬し、其によつて諸君が育てられたるあらゆる形式の宗教に適するであらう。山岳を旅行するが悦樂である如くに、諸君の發達も喜悅に充ちるであらう。勇敢なれ、心を眞實に清淨にせよ——其で充分である。若し諸君が眞實にして勇敢ならば、諸君は殆んど懶惰の生活は出來ぬであらうし、若し諸君の心が清淨ならば卑陋なる事物は好まぬであらうから。恰も諸君は世界に於ける唯一の靈魂であつた如く、神の指導の原則を固執せよ。世に處する上に常に神の手に縋れ。諸君は特に宗



教的になる必要はない。諸君は他人に對して一般の人よりも一層懇懇で一層思慮深く、無情の断定は人一倍之を嫌ふと云ふことを除いて、何等外部的の相違を示す必要もなく、又示すを欲しないであらう。諸君は宗教に關する談話をせぬであらうし、就中其について議論を闘はすことはあるまいが、併し必ず來るべきかの光明を期待するであらう。

諸君は遊戯にも人生の享樂にも從來より一層の妙味を感じらるゝであらう。眞理は諸君を自由に造つたのであるから何者も諸君に禁じられぬ。諸君は思ふが儘に人生のあらゆる道を選ぶことが出来る。併し諸君の現在居る場所が兎に角其の時に於ては天國に於ける諸君の指定せられた場所であつて、其は他に無いことを知るゝであらう。其の場所で諸君が成就したる義務によつて諸君は審判を受けるのである。諸君は見えざる友、諸君の生ける主にして王なる神に接近する。己れの生涯を神の指導に任ずる者は悉く人生の總ての義務に——家庭、學校、農園、市場、書齋、工場、陣地、戦場の義務に對する助力を受けるものであるから。又生ける神の軍は單に受動的忍耐の機能を有するのみならず、「彼は正しく裁斷し且つ戦ふ」ものであるから。總ての者は内部より指導し外部から強請せざる明智を有することが出来る。若し明智を缺く者あらば神に乞はしめよ、神は總ての人に惜氣なく

物と與ふるものなればなり。この救済は金錢なき總ての人々に自由に與へらるゝものである。

併し就中これを記憶せよ、諸君は其の保護と指導を諸君の個人的利益のため、又諸君の困難を救ふため、又方法の如何を問はず諸君をして他方を凌駕せしむる爲めに使用することとは出來ぬ、諸君の義務を見る明智と義務を果すべき力を得んが爲めに使用しなくてはならぬことを記憶せよ。

この點に就ては其は決して缺けることはないが、併し靈魂は肉體に奴隸にはならぬ。而して諸君は、「見よ我萬物を新にせん。我はアルハ也オメガなり始めなり終りなり。勝を得る者は此等の物を得て其業となさん我かれの神となり彼我が子となるべし。」と云ふ神の下に働く高き特權を有すてふ默々の意識を有するに至るであらう。

何人と雖も其の契約に附加することも其から除くことも出來ぬ。少年少女も我等の最年長者と同じく其を理解することを得る。而して少年少女と雖も最高の無私を行ひ得ることは、ある青年士官の筆になる次の如き、氣高き文句によつて示される、彼は未だ少年とも云ふべき年配で、今回の戦争に生命を捧ぐる前に執筆したものである。







121

### 本會役員

會長 侯爵 大隈 重信

編輯長 法學博士 浮田 和民

理事長 市島 謙吉

理事 大島居 弁三

同 並木 覺太郎

同 森脇 美樹

同 杉山 重義

同 田中 唯一郎

同 監事 廣井 一

大正十年九月二十二日印刷  
大正十年九月二十五日發行

大正十年度刊行書  
生の神髓

不許複製

編輯兼 發行者 大日本文明協會

右代表者 市島 謙吉

印刷者 渡邊 八太郎

印刷所 日清印刷株式會社

東京市牛込區榎町七番地

東京市牛込區水道町三十八番地

發行所 大日本文明協會事務所

電話番町三五四二番  
振替東京二一八九〇番



466  
D51



終

